2024.5.9

株式会社三井住友フィナンシャルグループ　御中

「SMBCグループ ライジング基金」における社会的インパクト評価報告書

SOCIAL VALUE JAPAN

特定非営利活動法人ソーシャルバリュージャパン
Contact: : info@socialvaluejp.org

サマリー

「SMBCグループ　ライジング基金」に対する2023年度社会的インパクト評価では、ライジング基金による社会課題解決への貢献度合いを可視化し、継続に資する活動であることを検証するとともに、各支援団体が社会的インパクト評価の仕組みを習得し、事業の成果が可視化されることで、よりインパクトあるプロジェクトへの改善や高度化につなげるを目的とした。

本年度評価により得られた知見とプロジェクトへの提言の概要は、以下の通りである。

1. 得られた知見：ライジング基金による事業成果の確認

① 支援団体による社会課題解決の促進

- すべての支援団体の活動において、当初想定した初期アウトカムの実現を確認できたことから、ライジング基金による「社会課題の解決の促進」は一定程度達成できているといえる。なお、事業期間内に確認できなかったアウトカムもあることから、事業の継続や改善を通してモニタリングしていくことが望ましい。
- ライジング基金の特徴として、寄付先の選定や事業実施期間中の見学会等、寄付を行っているSMBCグループの社員が参画可能なプロセスが設定されており、各団体が取り組む社会課題や事業内容を知る貴重な機会となっている。社員の社会貢献マインドの育成につながるとともに、社会課題解決に取り組む団体のモチベーション向上につながると推察される。

② 支援団体の組織基盤の強化

- ライジング基金による組織基盤の強化を直接的に目指した支援団体は1団体のみであったが、目標設定した支援団体だけでなく、目標設定していなかった1団体においても、ライジング基金での取り組みによる組織基盤の強化が認識されていた。
- 事業費だけではなく、団体内の人件費を含めた管理運営費にも寄付金を利用できるライジング基金の仕組みが、人材確保や定着に寄与していると考えられる。

③ 支援団体における社会的インパクト・マネジメント導入による事業の高度化

- 2022年度寄付先募集では、インパクト志向での事業遂行を推奨しており、各支援団体が対象事業への社会的インパクト評価を実施した。5団体中、4団体が初めて社会的インパクト評価に取り組む状況ではあったが、全ての支援団体がアウトカム観点によるモニタリングと事業成果の可視化を達成した。
- さらに、全ての団体が評価結果を用いた事業改善を検討しており、2団体は、自発的にロジックモデルや評価指標のブラッシュアップ、事業プロセスの振り返りによる事業改善を実施していた。ライジング基金を通じて、組織内に社会的インパクト・マネジメントの視点が定着し、事業の高度化につながったと言える。

2. 提言

ライジング基金のサポート体制や社員参画の仕組みの維持や、プロセスへの社会的インパクト・マネジメント導入による事業の高度化や組織基盤の強化等の提言を行った。

目次

Ⅰ．評価概要

1. 検討の背景・目的
2. 対象となる事業
3. 想定される成果
4. 実施スケジュール
5. プロセス
6. 役割分担

Ⅱ．各支援団体の評価結果

1. 2022年度寄付先募集における支援団体の一覧
2. 特定非営利活動法人アクセプト・インターナショナル
3. 特定非営利活動法人エデュケーションエーキューブ
4. 認定特定非営利活動法人SALASUSU
5. 特定非営利活動法人チャイボラ
6. 母子生活支援施設ベタニヤホーム

Ⅲ．ライジング基金全体の評価結果

1. ライジング基金全体の評価概要
2. SVJ所見（再掲）
   ※「Ⅱ．各支援団体の評価結果」内に掲載
3. 支援団体へのヒアリング結果（抜粋）
4. 支援団体の評価結果に基づくライジング基金全体の評価総括
5. 社会的インパクト評価導入によるライジング基金のインパクト向上
6. 評価結果から得られた成果と学び
7. 提言

Ⅰ.評価概要

Ⅰ-1. 検討の背景・目的

1. 検討の背景

- SMBCグループは、社会課題の解決に貢献していくために、「環境」「コミュニティ」「次世代」の３つを重点課題に設定し、日常業務を通じた社会への貢献に加え、社会的責任を果たすための『良き企業市民』として、豊かな社会を実現すべくさまざまな社会貢献活動を実施。
- その取り組みの一つとして、役職員有志の給与から毎月天引きする積立募金制度『SMBCグループ ライジング基金』をSMBCグループからのマッチングギフト制度と併せて運営している。

本事業を継続していくためには、ライジング基金全体の成果を可視化し、**ステークホルダーへの説明責任を果たしていく必要**がある。

2. 本事業の目的

- **継続的に効果測定が可能となる仕組みを実現**するため、**汎用性ある社会的インパクト評価が内包された支援事業として「SMBCグループ ライジング基金」を構築**する。
- ライジング基金による社会課題解決への貢献度合いを可視化し、**継続に資する活動であることを検証**する。
- 各支援団体が社会的インパクト評価の仕組みを習得し、事業の成果が可視化されることで、**よりインパクトあるプロジェクトへの改善や高度化**につなげる。

Ⅰ-2. 対象となる事業

「SMBCグループ ライジング基金」

※ マッチングギフト制度：社員が寄付した金額に対して企業側が一定の額を上乗せしたものを特定の団体や活動に寄付する制度

- **SMBCグループにおける有志の役職員の給与から毎月天引きする積立募金制度**であり、同行からのマッチングギフト制度※と併せて運営されている。
- 社会的インパクトの創出により複雑化の一途をたどる社会課題の解決に貢献するため、**2021度より本制度をSMBCグループのグループ会社にも拡充し、併せて一般公募での寄付先募集を開始。**
- 運営協力：一般社団法人ジャパン・フィランソロピック・パートナー（JPP）

対象となる事業テーマ	国内外の子ども（未成年を想定）の貧困問題解消に取り組む事業
対象となる取り組み	上記のテーマで活動する団体が、現在の事業においてより効率的・効果的に支援対象や支援内容を広げる取り組み（拠点や対象者拡大、サービス内容の拡充、新しい工夫による普及等）
対象となる団体	• 特定非営利活動法人、財団法人、社団法人、社会福祉法人等の法人格を持つ非営利組織（※営利を目的とした組織（株式会社等）、任意団体は含まない） • 活動実績2年以上の団体でより効率的・効果的に支援対象や支援内容を広げようとする意欲と計画がある団体（主たる事務所が日本国内にある団体に限る）
対象となる経費	応募事業の実施に必要な費用全般（応募事業に従事するスタッフ等の人件費・管理費を含む）
1団体あたりの寄付金額	最大300万円
寄付総額	1,500万円
採択団体数	5団体
寄付対象期間	2023年4月から1年間
社会的インパクト評価	専門機関のサポートを受け寄付先団体が主体となり実施
公募開始	2022年10月20日（木）
公募締切	2022年11月25日（金）15時
最終選考結果通知	2023年3月

Ⅰ-3-1. 想定される成果

本事業の取り組みによる成果及び成果物として、以下が想定される。

取り組み	成果	成果物
＜1＞ 社会的インパクト評価を内包する支援事業の仕組みの構築	• 個別の事業が対象ではなく、ライジング基金事業の2024年度以降の支援事業に活用ができ、継続的に効果測定が可能となる、社会的インパクト評価基準とプロセスの構築	① 評価プロセスが内包された支援事業の仕組み ② 各フォーマット a. 評価計画 b. 評価報告 c. 評価に関するプレゼンテーション資料
＜2＞ ライジング基金全体の社会的インパクト評価	• ライジング基金による社会課題解決への貢献度合いの可視化 • ステークホルダーへの説明責任を果たすエビデンスの獲得	① 評価報告書 ② 事業への提案
＜3＞ 支援団体の事業の社会的インパクト評価への伴走支援	• 採択事業者による社会的インパクト評価の実践 • 事業成果の可視化を通じた、より社会的インパクトのある事業への改善や高度化につながる教訓・示唆の獲得	① 伴走支援 a. 評価計画の策定 b. 調査・分析 c. 報告書作成

Ⅰ-3-2. 想定される成果

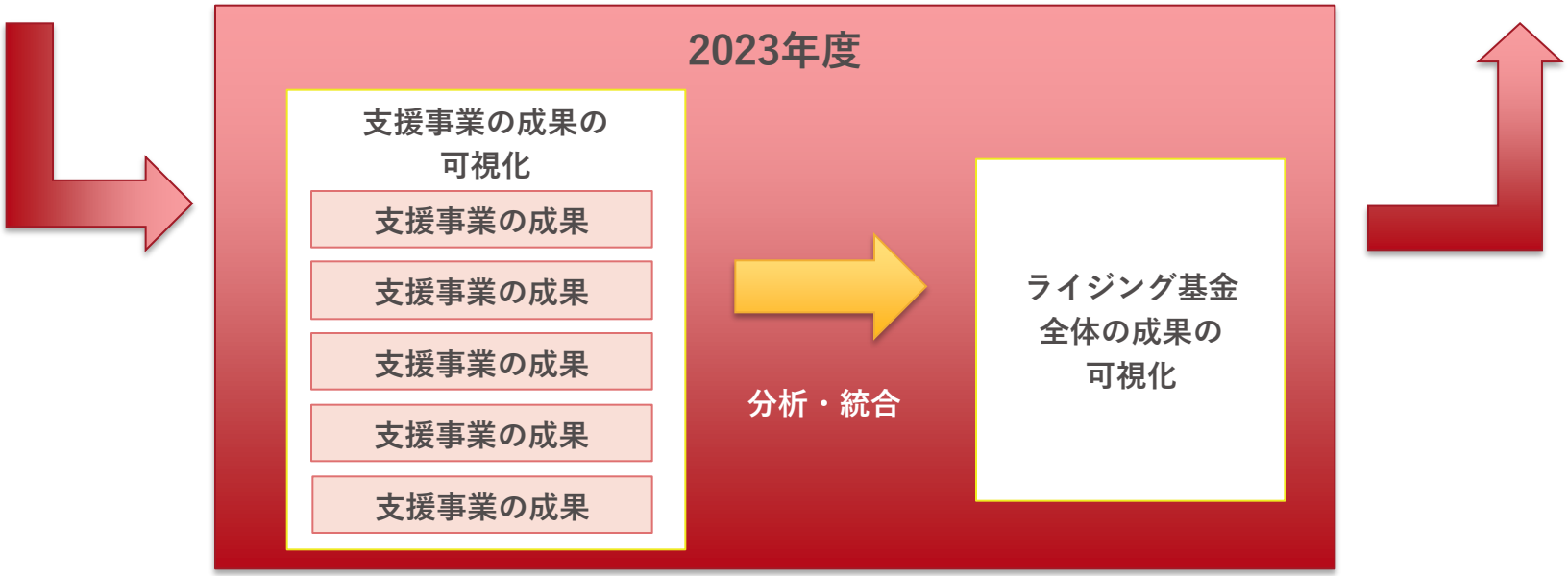
本事業の取り組みによる成果として、以下が想定される。業務委託期間は2023年度であるが、その準備として2022年度には基準とプロセスの設計を実施、成果は2024年以降にライジング基金事業において実装されることを想定した。

2022年度

社会的インパクト評価プロセスが内包されたライジング基金の評価基準とプロセス（案）の構築

2024年度～

ステークホルダーによって合意されたライジング基金の評価基準と評価プロセス



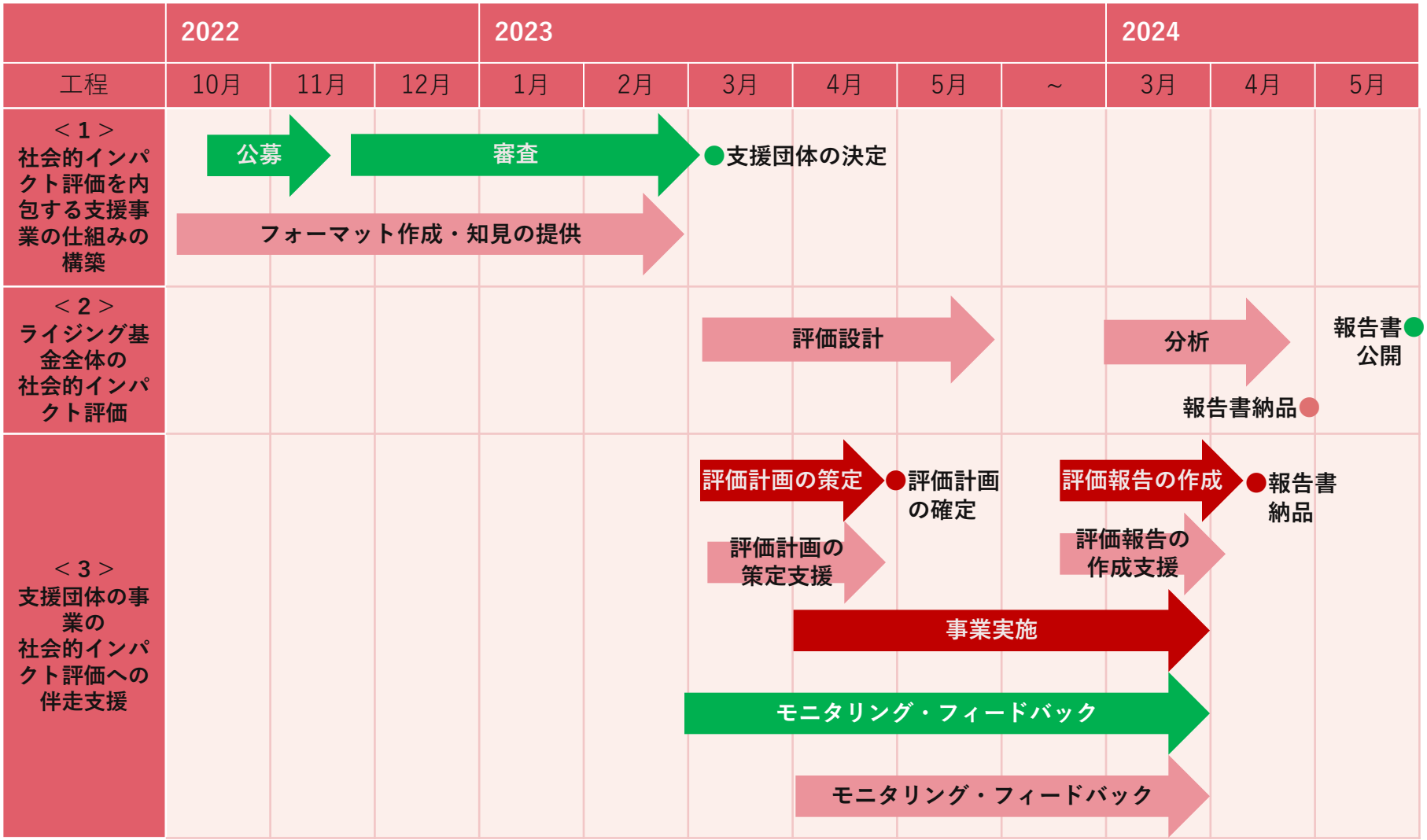
Ⅰ-4. 実施スケジュール

SMFG・JPPの取り組み

支援団体の取り組み

SVJの取り組み

2022年度事業は、以下のスケジュールで実施された。



Ⅰ-5-1.　プロセス (1)仕組みの構築（2022年度実施）

ライジング基金の仕組み構築におけるプロセスのうち、仕組み構築に関しては以下を想定した。

フェーズ	実施内容	SMFG/JPP	SVJ
目指す社会的成果の確認	• 事業に関する資料やヒアリングにより、ライジング基金の目指す社会的成果を明確化する	ヒアリングの対応 資料の提供	ヒアリングの実施 事業に関する資料の分析
目指す成果に基づいた評価プロセスの設定	• 評価アプローチの設定	資料の提供	評価アプローチの決定
	• ライジング基金全体の評価プロセスの設定	ヒアリングの対応 資料の提供	評価項目・評価報告フォーマットの設計
	• 支援団体の評価プロセスの設定	資料の提供	評価計画フォーマットの作成
評価的観点からの知見の提供	• 応募要項における、社会的インパクト評価に関する項目の確定	資料の提供	知見の提供
	• 説明会における、社会的インパクト評価に関するプレゼンテーションの実施	説明会の開催	資料の作成・参加
	• 審査における、社会的インパクト評価に関する審査項目等への知見提供	資料のご提供	知見の提供
伴走支援プロセスの設定	• 支援団体が実施する評価に関するモニタリングとフィードバックのプロセスの設定	ヒアリングの対応 資料の提供	モニタリング・フィードバックのプロセスの設定

Ⅰ-5-2.　プロセス (2)評価・(3)伴走支援（2023年度実施分）

ライジング基金の仕組み構築におけるプロセスのうち、社会的インパクト評価、伴走支援として、以下を想定した。

フェーズ	実施内容	SMFG/JPP	支援団体	SVJ
支援団体の評価計画の策定支援	• 各支援団体が、ロジックモデル、評価計画を確定する	モニタリング・フィードバック（事業全体）	評価計画の策定	評価計画の策定支援
モニタリング・フィードバック	• 定期的に評価の進捗状況を確認し、必要に応じてフィードバックを実施	モニタリング・フィードバック（事業全体）	事業の実施 進捗状況の共有 評価の実施・分析	モニタリング・フィードバック（評価部分）
支援団体の評価報告書の作成支援	• 各支援団体が成果報告書（評価報告書）を作成する	成果報告書（評価報告書）の確認	成果報告書（評価報告書）の作成	成果報告書（評価報告部分）の作成支援
全体レポーティング	• ライジング基金全体の評価報告書を作成する	ライジング基金全体の評価報告書の確認・公開		ライジング基金全体の評価報告書作成

Ⅰ-6. 役割分担

本事業の取り組みによる成果及び成果物として、以下を想定した。

	＜1＞ 社会的インパクト評価を内包する支援事業の仕組みの構築	＜2＞ ライジング基金全体の社会的インパクト評価	＜3＞ 支援団体の事業の社会的インパクト評価への伴走支援
SMFG	• 資料の提供 • 応募要項等の確認・決定 • 支援団体の決定	• ヒアリングの参加 • 資料の提供 • 報告書の確認・公開	• モニタリング
JPP	• 応募要項等の作成 • 募集・説明会の実施 • 応募～審査プロセスの運営	• ライジング基金の達成目標や成果指標検討への知見の提供	• モニタリング（事業全体） • フィードバック（事業全体）
支援団体	N/A	• 事業実施に関わるデータ、評価指標に関する情報の共有	• 評価計画の策定 • 事業の実施 • 評価の実施・分析 • 評価報告書の作成
SVJ	• 評価プロセスの設定 • 応募要項・申請書、審査における、評価に関する知見の提供 • フォーマット等の作成 • 伴走支援に関するプロセスの設定	• 評価計画の設計 • 分析 • 評価報告書の作成	• 評価計画の策定支援 • モニタリング（評価部分） • フィードバック（評価部分） • 評価報告書の作成支援

Ⅱ. 各支援団体の評価結果

Ⅱ-1. 2022年度寄付先募集における支援団体の一覧

本事業の対象となる、2022年度寄付先募集において選定された、支援団体は以下のとおりである。

団体名	事業名	助成金額(円)	活動地域
特定非営利活動法人 アクセプト・インターナショナル	困窮状態にあり孤立し、非行に繋がる恐れのある子どもたちへの緊急居住支援、および生活支援	2,996,719	国内
特定非営利活動法人 エデュケーションエーキューブ	事業の持続可能性を高めるための バックオフィス強化プロジェクト	3,000,000	国内
認定特定非営利活動法人 SALASUSU	貧困層の子どもを教室で支える！学校教師最初の30人育成事業	2,997,960	海外
特定非営利活動法人チャイボラ	社会的養護における施設横断型の新任職員研修プロジェクト	3,000,000	国内
社会福祉法人ベタニヤホーム	アウトリーチパントリー3.0 -パントリーカフェの展開-	2,937,600	国内

II -2.

特定非営利活動法人アクセプト・インターナショナル

社会的インパクト評価報告書

本事業の実施概要

本評価の対象となる事業の目的と実施内容は、以下のとおりである。

事業名：
困窮状態にあり孤立し、非行に繋がる恐れのある子どもたちへの緊急居住支援、および生活支援

事業の目的：
困窮状態にあり孤立し、非行に繋がる恐れがあり、住む場所がない等の生活に課題を抱える子どもたちに対し、
緊急居住支援・生活支援を実施することで、安心安全の生活を担保しながら**犯罪に巻き込まれることなく**、
彼ら自身が困難に向き合いながらも**前向きに生きていく力を身につけ**、**社会定着する**ことを目指す。

実施内容：

事業 1．緊急居住支援

・アパート借用（1K家賃50,000円程度）3室
・対象者：貧困状態にあり、家族に頼ることができずに犯罪に巻き込まれる恐れのある帰る場所がない16～18歳未満の子ども
・緊急一時支援のため、6ヶ月～12ヶ月間住居を提供し、生活支援を実施
・家族や生活コミュニティのなかで馴染むことができずに孤立した経緯より、人間関係構築のための基本的なコミュニケーションスキルの不足が課題となる。適切に相手に気持ちを伝えること、気持ちを汲み取ることなどのコミュニケーションスキルトレーニングを行う。

【実施状況】
・2023年6月、7月、2024年3月（他助成のスケジュール都合により）の時期に緊急居住支援のための3物件を契約
・1名を受け入れ（2023年9月～2024年3月）
・**通院同行、食事支援、生活支援、公的手続き同行、不動産探し等**を実施
・就労し、物件も決まり、引越し支援を実施
・相談スタッフ3名の他に、**ボランティアスタッフ8名も参加**
・保護観察所からの委託に向けた打ち合わせ、問い合わせを実施（**保護観察所打ち合わせ5回、他団体見学3回**）
引き続き、保護観察所からの委託手続きを進めている

本事業の実施概要

本評価の対象となる事業の目的と実施内容は、以下のとおりである。

実施内容：

事業 2．生活支援（2023年4月～2024年3月）

・LINEや電話、対面での支援
・対象者：貧困状態にあり、家族から適切な養育が見込めず、犯罪に巻き込まれる恐れのある18歳未満の子ども
・目標：20名
・面談のなかで、本人が1ヶ月ごと、3ヶ月後、半年後、1年後、退所後などを見据えた目標計画を作成
・目標に合わせた、就学、学習支援、就労支援、居住支援、福祉や医療への接続、金銭管理等のライフスキルトレーニング、他の当事者や支援者等と出会う機会の創出、定期面談

【実施状況】

・**相談件数は、39件**であった（具体的なニーズの表出がない伴走支援、矯正施設内での支援、初回面談、問い合わせを含む）
そのうちの、**具体的な生活支援のニーズ、相談支援ニーズのあった21名**に支援を実施
・少年院や保護観察所への訪問、面談32回（4月20日、21日、5月31日、7月20日、26日、8月2日、7日、9月1日、21日、10月11日、24日、30日、31日、11月1日、6日、10日、17日、27日、12月20日、21日、27日、1月24日、25日、30日、2月5日、6日、9日、19日、28日、3月11日、13日、14日）
・昨年度は、２つの少年院からの受け入れが主であったが、他機関との積極的な関係構築により、今年度は、**新たに6つの矯正施設から依頼**を受け、支援を実施した。支援が必要な若者に繋がるための**ネットワークを構築**することができた。
これまでケースの協働がなかった弁護士や他団体からの問い合わせや支援依頼も多くあった。
・個別ケースにおいて、特に対応が困難なケースについては、保護観察所や教育機関、市役所や家族等とのケース会議を実施しており、少年鑑別所や検察庁、拘置所とも協働することができた。**既存の更生保護領域だけではなく、市役所や他団体等を巻き込む**ことで、彼らの抱える生きづらさ、社会制度の状況について様々な視点から議論し、**チームとして支援に取り組む**ことができた。

本事業の実施概要

本評価の対象となる事業の目的と実施内容は、以下のとおりである。

実施内容：

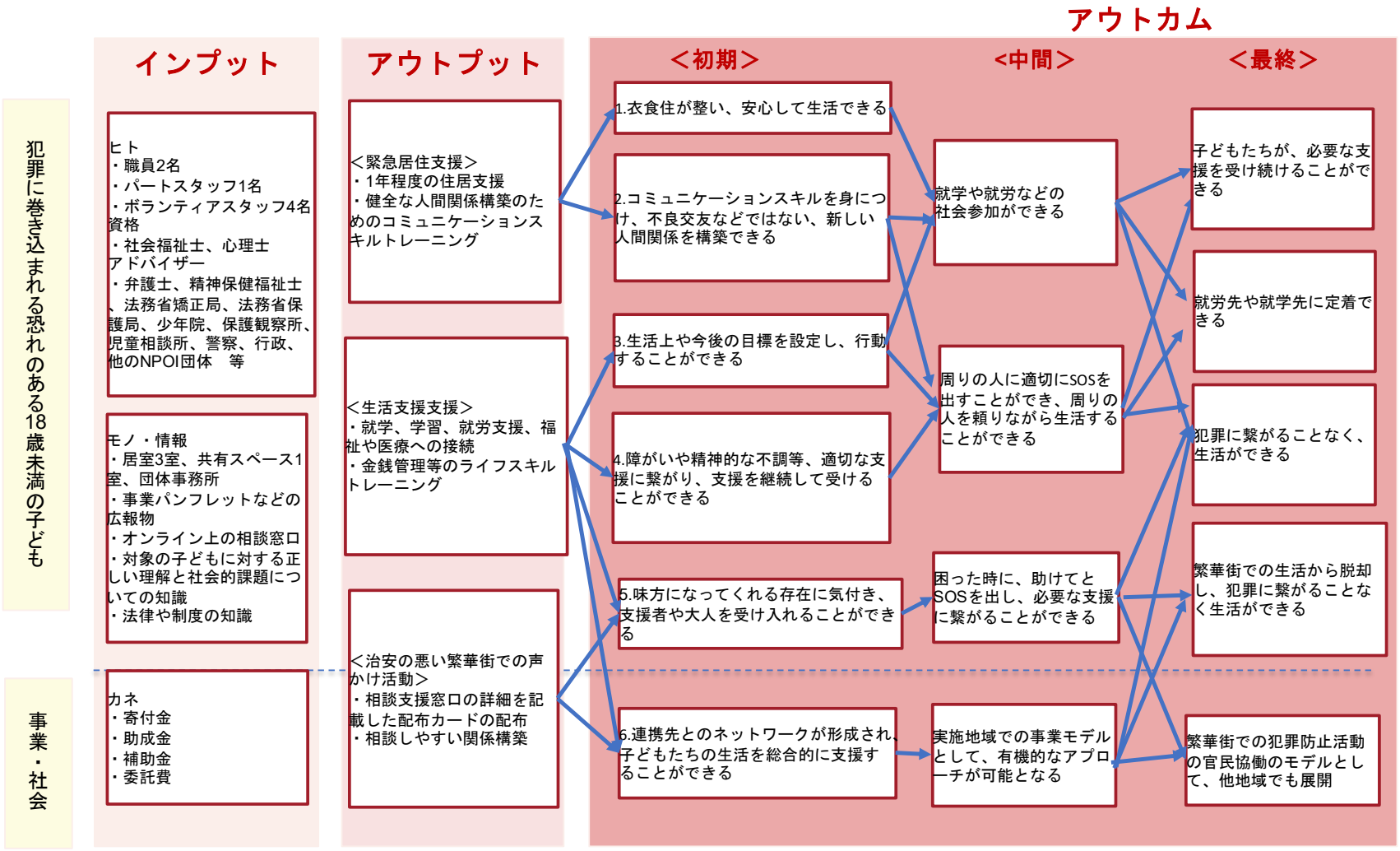
事業 3．治安の悪い繁華街での声かけ活動

・新宿区歌舞伎町
・対象：家庭や地域に居場所がなく繁華街の溜まり場に通い、長時間居座り犯罪に巻き込まれる恐れのある18歳未満の子ども
・相談支援窓口の詳細を記載したカードを配布し、犯罪に繋がる前に必要な支援につながることのできる環境をつくる
・週1回程度、歌舞伎町に通い、顔見知りの関係になり、いざという時に相談ができる顔の見える関係をつくる

【実施状況】
・繁華街等での夜回りを、2023年6月～2024年3月までに、34回を実施
（6月2回、7月3回、8月4回、9月3回、10月4回、11月5回、12月3回、1月3回、2月4回、3月3回）
・声掛け活動は、**34回実施し852名**に相談窓口の紹介を実施
・連携機関や支援団体を経由せず、夜回りや配布の相談リーフレット等からも**3名が窓口に繋がった**
・歌舞伎町で女性支援をしている団体と繋がり、売春や風俗に関するトラブルや妊娠に関する相談等、**支援を連携**することができた
・昨年度までは、担当職員とボランティアスタッフで毎回声掛け活動に出ていたが、引き継ぎを繰り返し実施し、ボランティアスタッフのみでも実施ができるようになった。**5名のスタッフに引き継ぎをし、運営**できるようになった。
・夜回りで配布する相談カードについて、実際に歌舞伎町に通っている若者にどのような物だと受け取りやすいかを聞き、**新しく2種類のデザインを作成**した。

想定したロジックモデル

本事業のロジックモデルとして以下を想定した。



想定した評価指標とアプローチ

本事業の評価指標と想定したアプローチとして、以下を想定した。

アウトカム	指標	手段	事業への活用方法
1.衣食住が整い、安心して生活できる	1-1.1日3食、睡眠時間5時間以上などの生活項目を作成し、1人あたり1ヶ月80%を達成している 1-2.定期面談の際に、感情の変化を測定し、目標ができた、楽しい、頑張りたいなどの前月と比較し、ポジティブな言葉が子どもたちから聞かれた	1-1.毎日の生活記録表の作成 1 -2.支援期間中に1ヶ月に1度、定期面談を実施	・生活基盤を整える中での本人の課題を発見し、不足している視点からの生活支援を構築することができる ・ポジティブな気持ちになったきっかけや心情の変化を分析し、支援の質の向上につなぐことができる
2.コミュニケーションスキルを身につけ、不良交友などではない、新しい人間関係を構築できる	2-1.これまでの生育歴や家庭環境、経験について支援者に話し、振り返ることができる 2-2.物事に対する情動を整理するためのワーク、トレーニングに参加し、支援者の問いかけに対し、拒否なく質問項目を言語化することができる 2-3.新たに関わる支援者や外部パートナーに対して、無視する、口を聞かないなどの長期間に渡る一方的なコミュニケーションに対しての不都合がない状態になる	2-1.人生録の作成 2-2.ワークの実施、評価シートの作成 2-3.支援期間中の支援者とのコミュニケーションや日々の支援についての記録を作成	・子どもたちの変化を考察することで、支援力向上、ワーク、トレーニング内容の改善につながる
3.生活上や今後の目標を設定し、行動することができる	3-1.生活目標を立てたうえで、自分の苦手な部分を自覚し、発信することで必要な支援を受けることができた 3-2.1ヶ月ごと、3ヶ月後、半年後、1年後、退所後の目標が設定できた 3-3.上記目標に対して、行動を考え行うことができ、月1回の面談で振り返ることができた	3-1.生活のなかで必要な力について整理したシートを作成 3-2.面談時に目標設定シートの作成、以降月1回のモニタリング面談 3-3.面談時に行動計画シートの作成、以降月1回の定期面談	・どのような環境があれば、子どもたち自身が苦手を認識し、伝えることができるのか、検討することができる ・支援ノウハウが蓄積されていくことで、それぞれの子どもたちに合わせた支援構築のイメージがしやすくなる

想定した評価指標とアプローチ

本事業の評価指標と想定したアプローチとして、以下を想定した。

アウトカム	指標	手段	事業への活用方法
4.障がいや精神的な不調等、適切な支援に繋がり、支援を継続して受けることができる	5-1.必要に応じて繋がった支援先からの支援を、1ヶ月以上、拒否なく支援を受け続けることができる 5-2.繋がった支援に対しての定期面談を行い、支援を受ける前と後で、ポジティブな変化があったと回答がある	5-1.支援開始から1ヶ月ごとに利用状況を管理 5-2.月1回程度、本人との面談を行い、支援期間中の変化について質問する	・子どもたちの変化によって、支援者の関わりを見て、より信頼をおける機関、団体との支援協働が可能になる
5.味方になってくれる存在に気付き、支援者や大人を受け入れることができる	7-1.アプローチした子どもたちのうち、90%が支援者の声かけを無視せず、相談窓口カードを受け取る 7-2.出会った子どもたちのうち50%が、お金がない、住まいがない、家に帰ることができないなどの生活に関する内容を打ち明ける	7-1.アプローチした人数と配布人数のカウントを行う 7-2.ヒアリングした内容と人数を記録	・適切な声かけの仕方や、話がしやすい環境づくりなど、支援スキルの向上につながる
6.連携先とのネットワークが形成され、子どもたちの生活を総合的に支援することができる	6-1.子どもたちのニーズに合わせて、新たに2つ以上の機関、団体との協働ができた 6-2.ネットワーク構築のため、月1回程度、共有会やケース検討会の出席が全団体数の8割以上	6-1.連携の目的、内容、担当者等の記録の作成 6-2.月1回程度、共有会やケース検討会の実施	・よりよいネットワークの構築につながる

評価の実施概要

それぞれの評価指標のデータ収集の概要は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	データ取得方法	データ取得時期（アンケート等を実施した日時）・対象者数
1	衣食住が整い、安心して生活できる	1-1.1日3食、睡眠時間5時間以上などの生活項目を作成し、1人あたり1ヶ月80%を達成している 1-2.感情の変化を測定し、目標ができた、楽しい、頑張りたいなどの前月と比較し、ポジティブな言葉が子どもたちから聞かれた	1-1.毎日の生活記録 1 -2.支援期間中に1ヶ月に1度定期面談	• 2023年9月～2024年3月 • 1名
2	コミュニケーションスキルを身につけ、不良交友などではない、新しい人間関係を構築できる	2-1.これまでの生育歴や家庭環境、経験について支援者に話し、振り返ることができる 2-2.物事に対する情動を整理するためのワーク、トレーニングに参加し、支援者の問いかけに対し、拒否なく質問項目を言語化することができる 2-3.新たに関わる支援者や外部パートナーに対して、無視する、口を聞かないなどの長期間に渡る一方的なコミュニケーションに対しての不都合がない状態になる	2-1.人生録の作成 2-2.ワークの実施、評価シートの作成 2-3.支援期間中の支援者とのコミュニケーションや日々の支援についての記録を作成	• 2023年9月～2024年3月 • 1名
3	生活上や今後の目標を設定し、行動することができる	3-1.生活目標を立てたうえで、自分の苦手な部分を自覚し、発信することで必要な支援を受けることができた 3-2.1ヶ月ごと、3ヶ月後、半年後、1年後、退所後の目標が設定できた 3-3.上記目標に対して、行動を考え行うことができ、月1回の面談で振り返ることができた	3-1.生活のなかで必要な力について整理したシートを作成 3-2.面談時に目標設定シートの作成、以降月1回のモニタリング面談 3-3.面談時に行動計画シートの作成、以降月1回の定期面談	• 2023年4月～2024年3月 • 相談件数は、計39件 • アウトカム3の支援が必要な状況にあった子どもは、21名

評価の実施概要

それぞれの評価指標のデータ収集の概要は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	データ取得方法	データ取得時期（アンケート等を実施した日時）・対象者数
4	障がいや精神的な不調等、適切な支援に繋がり、支援を継続して受けることができる	4-1.必要に応じて繋がった支援先からの支援を、1ヶ月以上、拒否なく支援を受け続けることができる 4-2.繋がった支援に対しての定期面談を行い、支援を受ける前と後で、ポジティブな変化があったと回答がある	4-1.支援開始から1ヶ月ごとに利用状況を管理 4-2.月1回程度、本人との面談を行い、支援期間中の変化について質問する	• 2023年4月～2024年3月 • 相談件数は、計39件 • アウトカム4の支援が必要な状況にあった子どもは、14名
5	味方になってくれる存在に気付き、支援者や大人を受け入れることができる	5-1.アプローチした子どもたちのうち、90%が支援者の声かけを無視せず、相談窓口カードを受け取る 5-2.出会った子どもたちのうち50%が、お金がない、住まいがない、家に帰ることができないなどの生活に関する内容を打ち明ける	5-1.アプローチした人数と配布人数のカウントを行う 5-2.ヒアリングした内容と人数を記録	• 2023年4月～2024年3月 • 毎週平日1日1時間程度 • 歌舞伎町にいる子どもたち
6	連携先とのネットワークが形成され、子どもたちの生活を総合的に支援することができる	6-1.子どもたちのニーズに合わせて、新たに2つ以上の機関、団体との協働ができた 6-2.ネットワーク構築のため、月1回程度、共有会やケース検討会の出席が全団体数の8割以上	6-1.連携の目的、内容、担当者等の記録の作成 6-2.月1回程度、共有会やケース検討会の実施	• 2023年4月～2024年3月 • 矯正施設や支援団体等

評価指標ごとの結果一覧

本事業で設定したアウトカムの変化の一覧は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	事業開始時の数値・状態（事前）	事業終了時の値・状態（事後）	事業による変化（事前事後の差異）	回答数（事前/事後）
1	衣食住が整い、安心して生活できる	1-1.1日3食、睡眠5時間以上等の目標を80%を達成している 1-2. 目標ができた、楽しい、頑張りたい等、ポジティブな言葉が子どもたちから聞かれた	1-1.1日1-2食、2-3時間睡眠しかとれていない状態（1名） 1-2.矯正施設を退所して、仕事や将来について考えることが難しく、精神状態も不安定であった（1名）	1-1.1日3回の食事、5時間以上の睡眠時間の確保ができた（1名） 1-2.支援機関中に就労し、不動産契約をして退去した（1名）	・居住支援を提供することで、1日3食、5時間以上の睡眠時間の確保等、生活が安定し、さらに就労をして生計を立てることができた。 ・不動産契約もして、地域で生活することができた	1名
2	コミュニケーションスキルを身につけ、不良交友などではない、新しい人間関係を構築できる	2-1. 生育歴や家庭環境、経験について振り返りができる 2-2.情動を整理するためのトレーニングで、拒否なく言語化することができる 2-3.新しい支援者に対して、無視する、口を聞かないなどのコミュニケーションに不都合がない状態になる	2-1.支援者を信頼できず、悩みを打ち明けることが難しい（1名） 2-2.意見が通らない場合に、人の話を聞くことができない、イライラして爪を噛む等があった（1名） 2-3.気に食わないことがあると黙り込む、理由をつけて自分の意思を何とか通そうとすることが多くあった（1名）	2-1.生育歴や自身の考え方を、話すことができた（1名） 2-2.イライラすることはあるものの拒否はなく、支援を受けることができた。ルール上難しいことを納得し、生活することができた（1名） 2-3.関係性が構築されている場合には、イライラしたり意見を通そうとすることは少なくなったが、関係性が構築できていない場合に不快な思いをしたり意見が合わないと、批判的になり黙り込む場合もあった（1名）	・コミュニケーションに関するトレーニングにより、自身の中で折り合いをつけて話ができるようになりつつある ・自身のコミュニケーションの特徴について気付くことができ（自己理解が進み）、精神科等で実施されている認知行動療法等を利用して、改善したいと希望が聞かれた	1名

評価指標ごとの結果一覧

本事業で設定したアウトカムの変化の一覧は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	事業開始時の数値・状態（事前）	事業終了時の値・状態（事後）	事業による変化（事前事後の差異）	回答数（事前/事後）
3	生活上や今後の目標を設定し、行動することができる	3-1.生活目標を立て、必要な支援を受けることができた 3-2.1ヶ月ごと、3ヶ月後、半年後、1年後、退所後の目標が設定できた 3-3.上記目標に対して行動し、月1回の面談で振り返ることができた	3-1.生活に関する目標や困り事が整理されていない状態（21名） 3-2.3-1の内容が整理されていないため、将来を具体的に考えることができていない状態（21名） 3-3.行動の目標が定まっておらず、振り返りができない状態（21名）	3-1.生活の課題を整理して行動目標を設定し、支援機関中に少なくとも2回は、前向きな行動を起こすことができた（21名） 3-2.生活状況が変わることはあったものの、その時々で特に直近の行動目標については再設定をすることができている（20名） 3-3.緊急的な対応が必要なケースについては、週1回以上の面談を実施し、定期的に振り返りをすることができている（19名）	・生活状況について困り感を実感している対象者については、丁寧に関係性を構築し、面談をすることで9割以上が前向きに行動することができた ・非行や生活状況により目標を達成する、定期面談をすることが難しい場合もあったが、どのような内容でも相談にのり、解決策を探していくことが信頼関係に繋がり、支援についての拒否はなく全員が関係を継続することができている	21名
4	障がいや精神的な不調等、適切な支援に繋がり、支援を継続して受けることができる	4-1.繋がった支援先の支援を、1ヶ月以上、拒否なく受け続けることができる 4-2.繋がった支援を受ける前と後で、ポジティブな変化があったと回答がある	4-1.4-2.必要な支援につながることができていない状態（14名）	4-1.支援先や行政の支援を定期的に利用し、生活の向上に繋がった（12名） 4-2.支援を受けた後の変化に関する質問で、知らなかったことが知れた、使えるサービスを知れた、話せる人が増えてよかった等の回答があった（12名）	・適切な支援機関、団体に接続することができたため、対象者の80%以上は、それぞれの具体的な生活課題の解決に繋がった ・当事業がはじめにハブとなり、大人や支援団体への不信感が減ることで、前向きに支援を利用することができた	14名

評価指標ごとの結果一覧

本事業で設定したアウトカムの変化の一覧は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	事業開始時の数値・状態（事前）	事業終了時の値・状態（事後）	事業による変化（事前事後の差異）	回答数（事前/事後）
5	味方になってくれる存在に気付き、支援者や大人を受け入れることができる	7-1.アプローチした子どもたちのうち、90%が相談窓口カードを受け取る 7-2.出会った子どもたちのうち50%が、お金がない、住まいがない、家に帰ることができないなどの生活に関する内容を打ち明ける	ー ー	5-1.声かけのうち拒否75%以上は、カードを配布することができている ー	・声かけを34回実施し、852名に相談窓口の紹介を実施した ・歌舞伎町にいる子どもたちの流動性が高く、1ヶ月～2ヶ月で人が入れ替わるため、拒否につながる場合もあるものの、75%以上は、相談窓口の紹介をすることができた ・相談支援に3名つながり、伴走支援を提供することができた	852名
6	連携先とのネットワークが形成され、子どもたちの生活を総合的に支援することができる	6-1.子どもたちのニーズに合わせて、新たに2つ以上の機関、団体との協働ができた 6-2.ネットワーク構築のため、月1回程度、共有会やケース検討会の出席が全団体数の8割以上	6-1.当事業を知らずに、利用できる状態にない ー	6-1.前年度には依頼のなかった12箇所の矯正施設、支援機関から支援依頼があった 6-2.ケース検討や共有会を実施することはできなかったが、これまでにつながりのなかった42機関に対して事業の広報や、情報交換を実施した	・前年度から繋がりのなかった矯正施設、支援機関からの依頼により、全相談件数39名のうち、20名を受入れすることができた。1度受け入れをした後も、定期的に依頼が来ている ・42機関に事業の広報を実施し、パンフレットや相談チラシを670枚配布し、事業を知ってもらうことができた	12施設 42機関

アウトカムの変化（事業１．緊急居住支援）

本事業で確認されたアウトカムの変化は以下のとおりである。

1.衣食住が整い、安心して生活できる　→よい変化が確認できた

・受け入れ当初は、引っ越しや年金の手続き、就労に関する不安等が大きく食欲の低下、不眠状態にあった
　一つずつ問題を整理して方法をわかりやすく提示し不安の解消に繋げたことや、通院して服薬調整をしたこともあり、
　1日3食、5時間以上の睡眠の確保等、徐々に生活が安定した
・衣食住が整うことで、就労も望むことができるようになり、就労して転居することができた
・支援内容は、通院同行、役所等への手続き同行、携帯契約等の支援、調理支援等を実施

■想定していた以上の変化
・ボランティアスタッフも参加し、主婦メンバーからコツを聞いたり楽しく料理をすることで、調理に対する意欲の向上が見られた。
・食事にはあまりこだわらず、調理の意欲も低い様子だったが、食への興味を持てるようになり、メニューの希望が出たり、
　レシピを教えてほしいと要望があった。実際に一人でも料理を作るようになり、食の改善につながった

2.コミュニケーションスキルを身につけ、不良交友などではない、新しい人間関係を構築できる　→よい変化が確認できた

・入居当初は、自身の考えと違う考えを聞いたり、ルール上できないことがあると過剰反応が起こり、イライラして攻撃的になる、
　人の話を聞けないこと等が多くあった。以前に成功した例があると、必ずできるはずだと思い込み、他罰的な思いが強くなり
　批判的になってしまうため行政機関からも当窓口に相談の連絡が入ることもあった
・その時々で振り返りを実施し、また本人の性格や障害特性を理解し、わかりやすく伝えることで信頼関係が構築でき、支援者と
　話すときに大きくイライラすることは少なくなった。

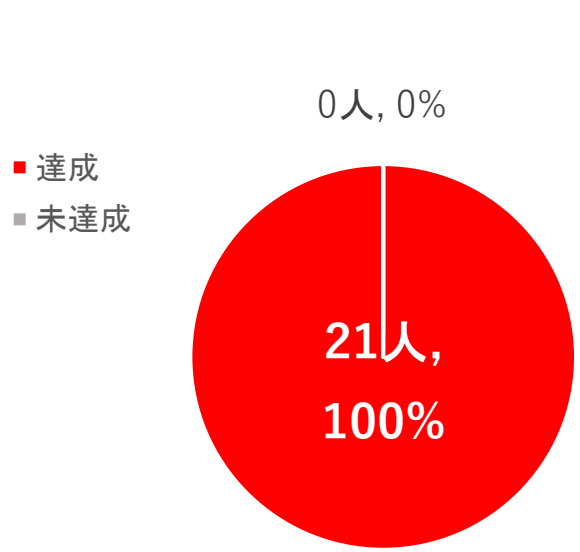
■想定していた以上の変化
・面談を繰り返すなかで、本人自身が自分の苦手について気づき、イライラした時に対処できるようになりたいと、病院での
　トレーニングに通いたいという希望があった
・調理練習の際に、ボランティアが一緒に参加することで、多様な人とコミュニケーションを取る機会をつくり、相談員以外にも
　適切にコミュニケーションが取れるようになった。コミュニケーション不安への軽減につながった

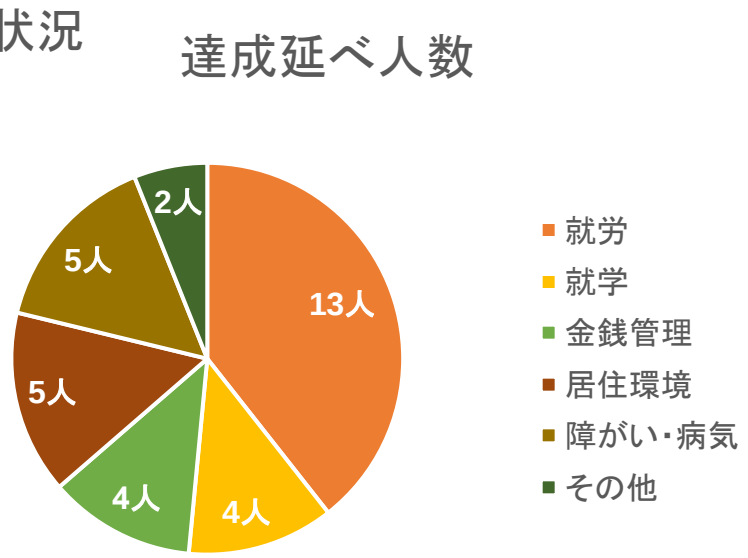
アウトカムの変化（事業2．生活支援）

本事業で確認されたアウトカムの変化は以下のとおりである。

3.生活上や今後の目標を設定し、行動することができる　→支援を提供した子ども全員が目標を達成した

アウトカム指標	達成状況	備考（具体的に行った支援や理由等）
3-1.生活目標を立て、必要な支援を受けることができた（21名） ※複数回答あり	就労についての目標設定をした 13名	就労のためのハローワーク同行、就労支援団体への接続、雇用主との関係調整　等
	就学についての目標設定をした 4名	高校見学、教育長からの学校紹介、教育機関の相談員への接続、学習支援への接続、手続き同行　等
	金銭管理についての目標設定をした 4名	金銭管理の方法を指導、家計簿をつける練習、銀行口座の開設の手伝い、借金の返済計画を立てる、弁護士への接続　等
	居住環境についての目標設定をした（引っ越し等） 5名	不動産への接続、内覧同行、引っ越し手続き支援、引っ越し支援　等
	障がいや病気に関して目標設定をした 5名	病院探し、通院同行、障害年金受給や自立支援医療（精神保健）の手続き、他障害サービスへの接続　等
	その他（妊娠、生活に必要な手続き整理） 2名	妊娠団体への接続、通院同行、区役所等への同行支援　等



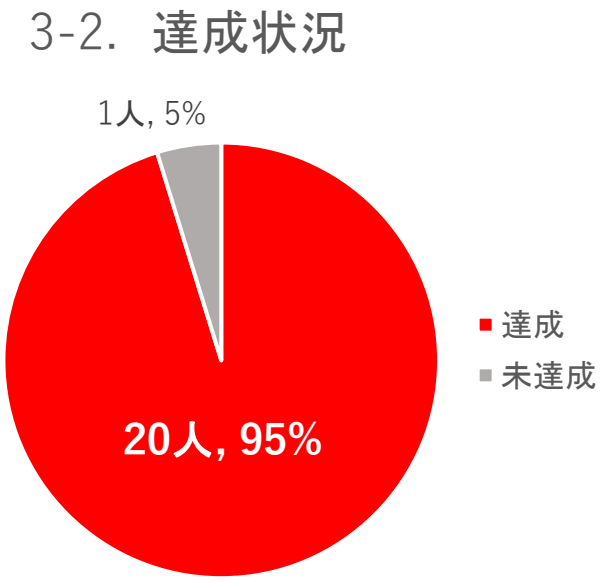


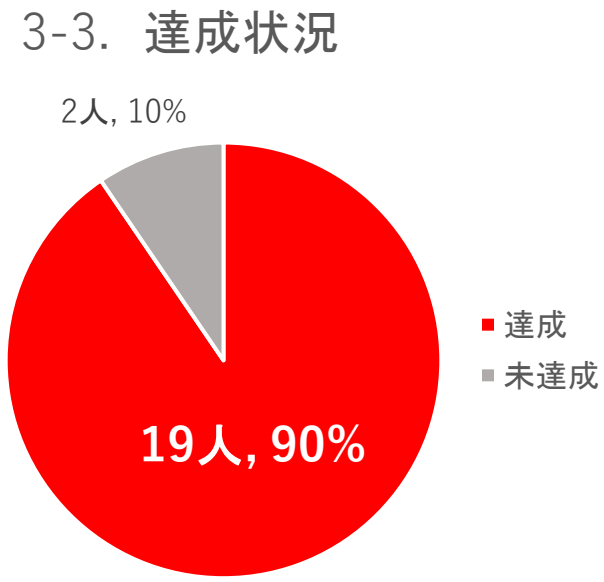
アウトカムの変化

本事業で確認されたアウトカムの変化は以下のとおりである。

3.生活上や今後の目標を設定し、行動することができる

アウトカム指標	達成状況	備考（具体的に行った支援や理由等）
3-2.1ヶ月ごと、3ヶ月後、半年後、1年後、退所後の目標が設定できた（21名）	**達成** **20名**	上記目標に対しての細かな目標を設定した
	未達成 **1名**	非行に繋がりやすい状況にあり、生活状況が落ち着かず、目標設定をするのが難しかった。関係性を構築しながら、長く伴走していくために、定期連絡へと切り替えた
3-3.上記目標に対して行動し、月1回の面談で振り返ることができた（21名）	**達成** **19名**	上記目標に対しての振り返りを行った
	未達成 **2名**	非行に繋がりやすい状況にあったため、連絡が途絶える期間もあった。どちらのケースも、数ヶ月のうちに再度連絡があり、助けてほしいとSOSがあった

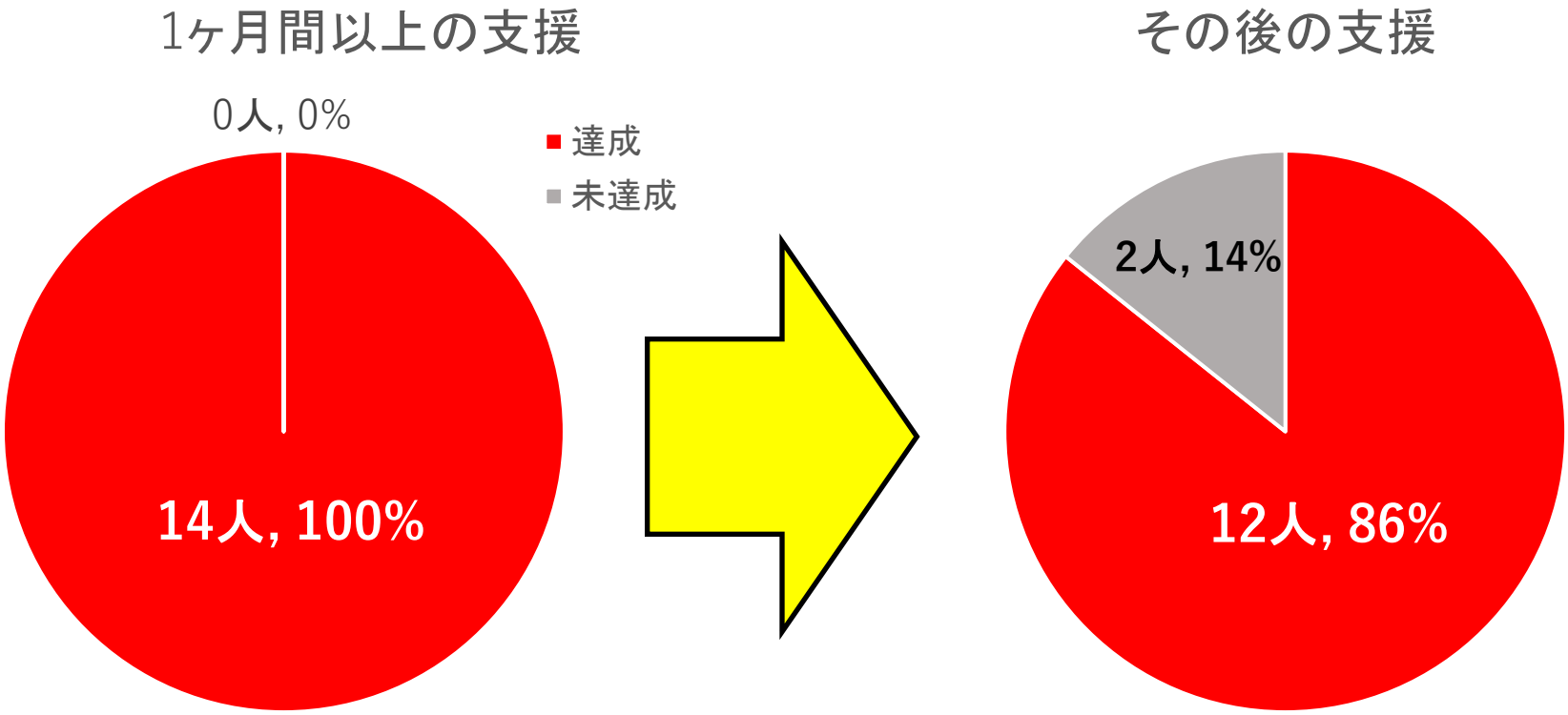




アウトカムの変化

本事業で確認されたアウトカムの変化は以下のとおりである。

4.障がいや精神的な不調等、適切な支援に繋がり、支援を継続して受けることができる　→目標を達成した



ニーズの表出があった14名のうち全員が、他連携機関や支援団体の支援を1ヶ月以上、受けることができていたが、
そのうち2名は、半年以内に再非行へとつながった。
再非行につながった理由は、地元に戻って不良交友を再開、家族関係の不和など環境が大きく影響した。

アウトカムの変化
（事業 3. 治安の悪い繁華街での声かけ活動、ネットワーク構築

本事業で確認されたアウトカムの変化は以下のとおりである。

5.味方になってくれる存在に気付き、支援者や大人を受け入れることができる　→おおむね達成

実施月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
相談紹介人数	57	83	133	107	98	107	41	85	93	48
拒否人数	9	16	28	21	19	25	10	16	16	10

6.連携先とのネットワークが形成され、子どもたちの生活を総合的に支援することができる　→想定以上の成果があった

6-1.子どもたちのニーズに合わせて、新たに2つ以上の機関、団体との協働ができた

（結果）前年度には依頼のなかった12箇所の矯正施設、支援機関から支援依頼があった

施設種別	数	受け入れ人数
矯正施設	6	13
弁護士事務所	2	3
支援団体	3	3
児童養護施設	1	1

6-2.ネットワーク構築のため、月1回程度、共有会やケース検討会の出席が全団体数の8割以上　→おおむね達成

（結果）ケース検討や共有会を実施することはできなかったが、これまでにつながりのなかった42機関に対して事業の広報や、情報交換を実施した

配布先	矯正施設	支援団体、地域連携機関	教育機関	弁護士事務所
詳細	少年院、拘置所、更生保護施設　等	社会福祉協議会、他支援団体　等	教育庁、大学　等	
紹介数	15施設	23団体	2ヶ所	2事務所

本事業がもたらした成果・得られた学び

本評価を通して確認された、本事業の成果、得られた学びは以下のとおりである。

【事業成果】

・昨年度は、２つの少年院からの受け入れが主であったが、他機関との積極的な関係構築により、**新しく12の矯正施設、連携団体等**から依頼を受け、支援を実施した。また、そのすべての施設で継続的に支援依頼が来ており、**支援が必要な若者に繋がるネットワークを構築することができた**。

・個別ケースにおいて、特に対応が困難なケースについては、保護観察所や教育機関、市役所や家族等とのケース会議を実施しており、少年鑑別所や検察庁、拘置所とも協働することができた。**既存の更生保護領域だけではなく、市役所や他団体等を巻き込む**ことで、彼らの抱える生きづらさ、社会制度の状況について様々な視点から議論し、チームとして支援に取り組むことができた。

・具体的な支援の成果としては、当事業の介入により拒否が強く連絡がつかなくなっていた連携先と本人の関係性が良くなり、少年の孤立を防ぐことができたケース、希死念慮が強かった少年で支援開始当初は自殺未遂をすることもあったが、半年の支援期間を経て自傷行為がなくなり生活が安定したケース、就労就学が叶い前向きに生活することができているケースもある。

・当事業では、**ボランティアスタッフも参画**し、現在は9名の学生インターン・社会人プロボノが関わっている。
事業運営やリサーチ業務だけではなく、相談員とともに生活支援、金銭管理や調理の練習等の支援も行なった。
対象者にとっても相談員以外の支援者と関わる機会をつくることで、**コミュニケーション能力の向上や新しい価値観を得る機会**となった。
人のために時間を使って活動するボランティアスタッフの関わりを見て、「人のためになることがしたい」と話す少年もおり、個別の**相談支援だけでは生み出すことのできない効果**をもたらすことができた。
また、ボランティアスタッフからは、**「彼らに対する偏見や先入観がなくなった」「そういったものを持って彼らと関わることがいかに罪深いことなのか認められるようになった」**というような声が多く上がった。

・相談件数は39名だが、具体的なニーズの表出まで繋がったのは、21名だった。**必要な時にニーズを聞き出し、支援を提供できるよう、長く繋がっておくこと**が非常に重要である。

【得られた学び】

・事業のコアターゲットである非行をした、あるいはつながる恐れのある若者に支援を提供するためには、更生保護領域や児童福祉の性質上、制度サービスとの細かな協働が必要となり、1団体が自主事業として実施するには**様々な制約がかかってしまう**状況にあり、支援が必要な状況にあっても、すぐに受け入れが難しい状況にあった。（特に居住にかかわる問題）
生きづらさを抱える若者に十分に適切な支援を提供するには、**官民協働が必要不可欠**でありながら、その**取り組みは非常に限定的**であることが課題だと言える。
今後は関係機関と支援を協働するとともに、長期的な活動を通して、**様々なアクターが適切に介入し適切に支援を提供できるよう**関係をさらに深め、円滑な関係調整を行う必要がある。
（保護観察期間中の者の引越しや生活の環境調整、18歳以下の児童に関しては児童相談所との連携）

【今後について】

・2023年度の取り組みを振り返り、さらに支援が必要な子どもたちに出会い、適切に支援を提供できるよう、今後も**事業を継続**していく

・緊急居住支援については、空室期間の有効活用のため、**児童養護施設等と連携し一人暮らし体験の実施**を検討していく。

SVJ所見：アクセプト・インターナショナル

	社会課題の解決 （事業アウトカム）	組織基盤強化	IMM導入による 事業の高度化
設定された ゴール・ 代表的な指標	犯罪に巻き込まれる恐れのある子どもたちが必要な支援を受け、安心して生活できる • 支援者との関係性の構築・維持 • 継続的な支援の受け入れ	設定なし	アウトカム観点による事業成果の可視化 • モニタリングの実施 • アウトカムの測定
事業成果	• 安心できる居住環境の提供 • 支援者との関係性の構築・継続 • 1か月以上の支援継続 • 必要な支援との連結（新たに12の矯正施設・支援機関からの支援依頼等）	ー	• 支援人数だけではなく、支援対象者の望ましい変化に着目し、評価を実施 • 多様な支援者との接点を提供することでコミュニケーションが円滑になる等、成果につながる学びや知見の明確化
課題と 期待される対応	• 支援が有効と想定されるが、現状リーチが難しい対象者もいたことから、団体単独ではなく、複数の関係組織による支援構築が期待される	ー	• 最少人数での事業運営であることから、組織全体でのIMM導入は難しかった • IMMに関する学習意欲が高いため、組織全体での研修や評価の継続によるIMM浸透が期待される

Ⅱ-3.

特定非営利活動法人エデュケーションエーキューブ

社会的インパクト評価報告書

本事業の実施概要：
事業の持続可能性を高めるためのバックオフィス強化プロジェクト

本評価の対象となる事業の目的と実施内容は、以下のとおりである。

【事業の目的】　（申請時資料より）

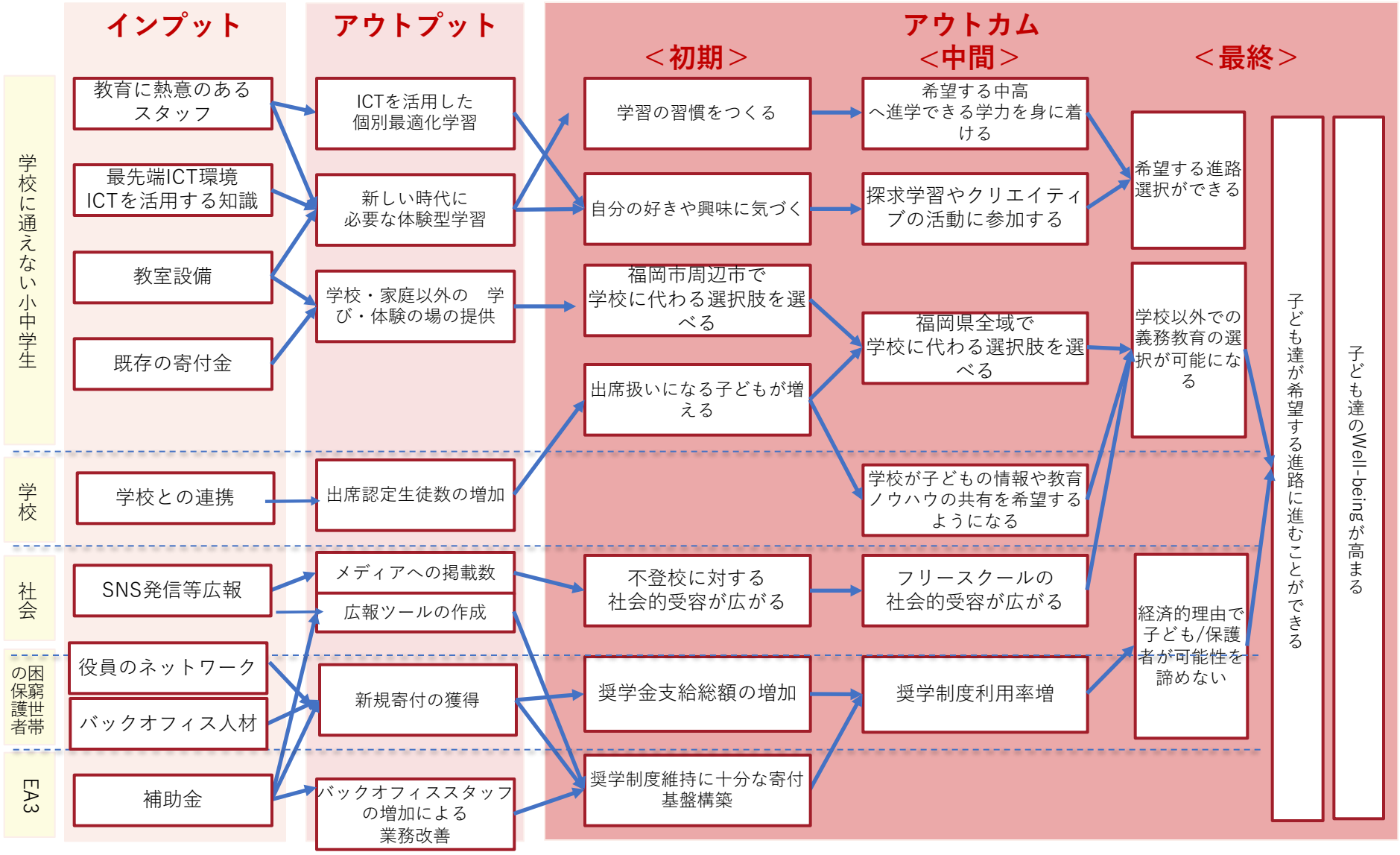
今回の寄付金を活用して、団体の課題であるファンドレイジング・広報などのバックオフィス体制の強化を目標に、ファンドレイジングの多様化と広報活動の強化を実施し、持続可能な運営体制を構築します。
現在の法人としての課題としては大きく３点あります。１点目は、寄付収入の拡大です。経済的背景に関係なく全ての子ども達を支えながら事業の拡大・継続していくためには、事業収入の増加に加え、奨学制度維持・拡大のための安定的な寄付収入の獲得が必須となっています。昨年の事業収入に占める寄付収入の比率は21%であり、この比率を将来的に33%まで高めたいと考えています。２点目は、広報活動の強化です。寄付獲得や経済的困窮世帯への認知拡大のため、ホームページでの情報発信やパブリシティなどの更なる強化が重要だと考えています。３点目は、管理部門の体制強化です。これまでは、事業部門ではないファンドレイジング・広報などバックオフィスに先行投資として人員を割くことが難しく、代表理事に依存しておりました。前期よりバックオフィス業務は代表理事を中心に、パートタイム・業務委託のスタッフの２名が従事しておりますが、２名とも子育て中のスタッフであり、スタッフに無理なく働いてもらうためにも業務の効率化や体制強化が急務となっています。今回、新たに１名のスタッフを追加することで、広報・ファンドレイジング・管理・インパクト評価など事業活動以外の重要課題に取り組む体制を構築します。

【実施内容】

2023年4月	管理事務部門に新規パートタイムスタッフ1名を採用 【課題3　管理部門の体制強化】 代表に依存していた広報・経理・ファンドレイジング・寄付者管理などのバックオフィス業務について、リモート勤務の既存管理スタッフと連携し、3名体制で運営する基盤作りを実施しました
2023年6月	寄付者管理システム「コングラント」を導入 【課題１　寄付収入の拡大と支援者対応の強化】 寄付者増に伴う領収証発行などの管理業務の負担増大に対応しました。
2023年7月	公式ホームページのリニューアルを実施 【課題２　広報活動の強化】 新しいホームページでは、団体が取り組む社会課題や活動内容をより分かりやすく伝えるようなコンテンツを制作し、情報更新がやりにくい点や寄付までの導線が分かりづらいという課題を解決しました。また、支援者向けに活動を伝えるためブログ・SNSでの情報発信を強化しました

想定したロジックモデル

本事業のロジックモデルとして以下を想定した。



想定した評価指標とアプローチ

本事業の評価指標と想定したアプローチとして、以下を想定した。

#	アウトカム	指標（単位）	定性／定量	データ取得方法と頻度	ベンチマークの対象と方法	どのように事業運営に活用するか
1	学習の習慣をつくる	フリースクールへの出席率（%）	定量	• 学校への出席率 • フリースクール出席率	• フリースクールに入校前の出席率との比較	• 出席比率を学校にも提示し、学校復帰につながる事例も示し、連携強化とフリースクールの地位向上を目指す
2	自分の好きや興味に気づく	アンケート ルーブリック評価 制作物	定性	• 入校時にアンケート • 入校後一定期間を経てからのアンケート実施 • スタッフ評価 • 活動での制作物	• フリースクールに入校前のアンケート結果を比較 • 期初と期末で比較	• 子ども達が実現したい将来に向けてのサポート
3	福岡市周辺で学校に代わる選択肢を選べる	提携含む教室数（校） 在校生徒数（人） 出席扱い市町村数（市）	定量	• 活動数値から把握	• 前年比較 • その他フリースクールとの比較	• 対象エリア拡大でスクールとしての信用向上
4	出席扱いになる子どもが増える	出席扱比率（%） 出席扱生徒数（人）	定量	• 在籍生徒数に占める出席扱い生徒数の割合と生徒数	• 前年比較 • 他のフリースクールとの比較	• 学校を代替できる存在としての認知向上に活用
5	奨学金支給総額の増加	奨学制度利用者比率（%） 奨学制度支給金額（円）	定量	• 奨学制度利用者／在校生徒数 • 奨学制度で免除した授業料計	• 前年比較 • 市町村予算との比較	• 奨学制度のニーズのエビデンスとして寄付獲得に活用
6	奨学制度維持に十分な寄付基盤構築	寄付者の数	定量	• マンスリーサポーターの数	• 前年比較	• 持続的な奨学金支給に活用 • 学校を代替できる存在としての認知向上に活用

評価の実施概要

それぞれの評価指標のデータ収集の概要は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	データ取得方法	データ取得時期（アンケート等を実施した日時）・対象者数
1	学習の習慣をつくる	フリースクールへの出席率（%）	生徒DB	2022/4-2023/3 対象生徒数53名 2023/4-2024/3 対象生徒数56名
2	自分の好きや興味に気づく	ルーブリック評価	スタッフ作成	2023/4と2024/3にスタッフ４名で評価
3	福岡市周辺で 学校に代わる選択肢を選べる	生徒数 生徒アンケート	生徒DB アンケート	2023/10と2024/3で生徒アンケートを実施
4	出席扱いになる子どもが増える	出席扱比率（%） 出席扱生徒数（人）	生徒DB	2023/4-2024/3 対象生徒数56名
5	奨学金支給総額の増加	奨学制度利用者比率（%） 奨学制度支給金額（円）	月謝受領表	2022/4-2023/3 と2023/4-2024/3 の比較
6	奨学制度維持に十分な寄付基盤構築	寄付者の数 寄付者管理業務の時間	寄付者管理システム 勤務表	2023/4-2024/3 対象者；ファンドレイジング担当（山田）
7	広報数	メディア掲載数 SNS発信数	カウント	2022/4-2023/3 61件 2023/4-2023/3110件

評価指標ごとの結果一覧

本事業で設定したアウトカムの変化の一覧は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	事業開始時の数値・状態（事前）	事業終了時の値・状態（事後）	事業による変化（事前事後の差異）
1	学習の習慣をつくる	SPへの出席率（%）	出席率 78.4%	出席率 78.0%	▲0.04%
2	自分の好きや興味に気づく	ルーブリック評価 ※別紙にまとめる	ルーブリック評価 3.8	ルーブリック評価 6.0	ルーブリック評価＋2.2
3	福岡市周辺で学校に代わる選択肢を選べる	提携含む教室数（校） 在校生徒数（人） 出席扱い市町村数（市）	生徒アンケート 3.9 在校生徒数70名 出席市町村 10市町村	生徒アンケート 4.0 在校生徒数69名 出席市町村 8市町村	生徒アンケート+0.1
4	出席扱いになる子どもが増える	出席扱比率（%） 出席扱生徒数（人）	出席扱比率 100% 出席扱生徒数 52人	出席扱比率 100% 出席扱生徒数 52人	変化なし
5	奨学金支給総額の増加	奨学制度利用者比率（%） 奨学制度支給金額（円）	奨学制度利用比率 32.9% 奨学制度支給金額 3,313,000円	奨学制度利用比率 27.5% 奨学制度支給金額 3,009,300円	奨学制度利用比率 ▲5.4% 奨学制度支給金額 ▲303,700円
6	奨学制度維持に十分な寄付基盤構築	寄付者数 FR主担当スタッフの年間勤務時間数	領収証送付224名 勤務時間　740時間39分	領収証送付301名 勤務時間　520時間53分	領収証送付+75名、34%増 219時間46分の減少 （2022/4~2023/3）
7	不登校に対する社会的受容が広がる	メディア掲載数 SNS発信数	掲載数5件 61件（2022/4-2023/3）	掲載数　0件 110件（2023/4-2023/3）	▲5件 +59件

アウトカムの変化（評価指標２）：自分の好きや興味に気づく

本事業で確認された自分の好きや興味に気づく（アウトカム）の変化は、期初と期末でスタッフによるルーブリック評価を実施した。探究的活動において+1.2ポイント評価が向上し、活動全体としては期初のスコア3.８から期末スコア6.0（12点満点）と+2.2ポイントのアウトカムの変化が見られた。

ルーブリック評価基準

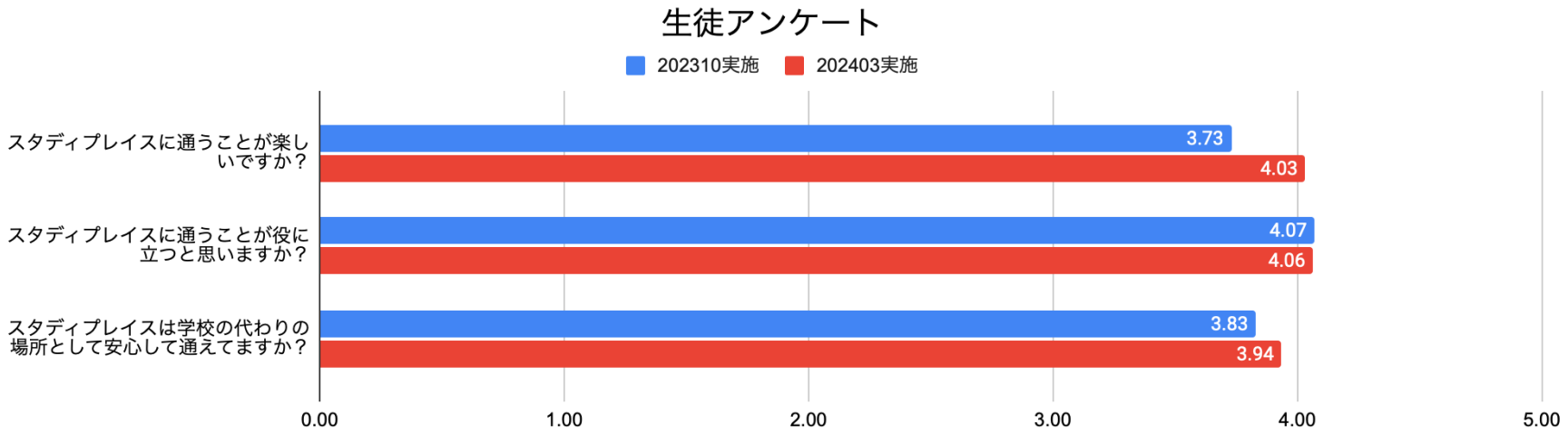
	1	2	3	4
学習	遅れて参加できた	朝から参加できた	主体的に学習に取り組んだ	年間学習目標を達成できた
探究	活動に参加できた	１つテーマを完成できた	発表もしくは良い思考ができた	良い問いの探究ができた
クリエイティブ	活動に参加できた	作品を１つ完成できた	発表もしくは作品作りを楽しめた	オリジナリティの高い制作ができた

評価結果

	学習	探究	クリエイティブ	総合スコア
2023.4実施	1.7	0.8	1.4	3.8
2024.3実施	2.1	1.9	2.0	6.0
改善度	0.3	1.2	0.6	2.2

アウトカムの変化（評価指標3）：学校に代わる選択肢を選べる

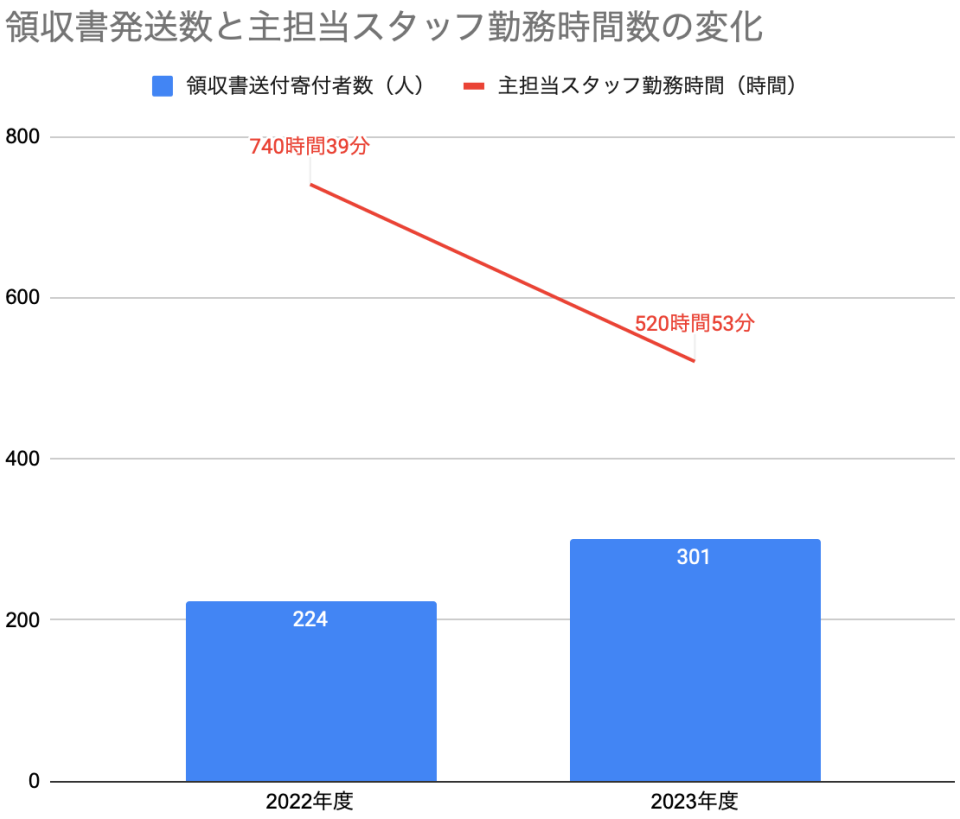
本事業で確認された学校に代わる選択肢となりうるの変化は、生徒アンケートによる評価を実施した。楽しさと安心において評価が向上し、平均4.01ポイント（５点満点）と前回比+0.11ポイントのアウトカムの変化が見られた。また子ども達のウェルビーイングに関するアンケートにおいても全体で+1.05ポイントのアウトカムの変化が見られた



	①やってみよう！（自分を信じて、いろんなことにチャレンジできる）	②ありがとう！（自分と他の人を大切にし、他の人を思いやったり、感謝ができる）	③なんとかなる！（自分はできる！とポジティブに行動できる）	④ありのまま！（他の人と比較しないで、自分らしくいることができる）
202310実施	3.27	3.67	3.07	3.17
202403実施	3.26	4.03	3.35	3.58
改善	-0.01	0.36	0.28	0.41

アウトカムの変化（評価指標６）：奨学制度維持に十分な寄付基盤構築

本事業で確認された奨学制度維持に十分な寄付基盤構築の変化（アウトカム）は、寄付者数が、75名増加（前年比１３４％増）したが、管理システム導入により、担当スタッフの勤務時間は219時間46分の減少するアウトカムの変化が見られた。



本事業がもたらした成果・得られた学び

本評価を通して確認された、本事業の成果、得られた学びは以下のとおりである。

【事業成果】

課題１　寄付収入の拡大
クラウドファンディングによる寄付者増に伴う寄付者管理や領収書発行業務の増大に対応するため、寄付者管理システム「コングラント」を導入し、上記業務の効率化を実現することができました。領収証の発行者数は前年から75名増加しましたが、導入により主担当スタッフの業務時間が219時間46分減と大幅に負担を軽減することができました。

課題２　広報活動の強化
2023年7月にホームページのリニューアルを実施しました。新しいホームページでは、団体が取り組む社会課題や活動内容をより分かりやすく伝えるようなコンテンツを制作し、情報更新がやりにくい点や寄付までの導線がわかりづらいという課題を解決しました。これにより、年間のブログ・SNS発信数が110件と59件増加しました。

課題3　管理部門の体制強化
バックオフィス体制を強化するため、１名のパートタイムスタッフを採用しました。リモート勤務の既存管理スタッフと連携し、代表に依存していた業務の多くを3名体制で運営する基盤ができました。リモート勤務に柔軟に対応するため、zoomやslackなどのICTツールを活用し、育児中の女性スタッフが働きやすい職場環境を構築できました。

【得られた学び】

新規寄付決済システムの導入により、寄付者の増大に耐えうる寄付者管理体制を構築することができたほか、複数経路からの寄付を年度をまたいで一元管理できるようになったことで、スタッフの業務負担が大幅に改善されました。また、システム化によりチームで寄付者関連業務に取り組むことができるようになったため、従来の主担当者1名に精神的負担がかかっていた状況も改善し、その軽減も実現することができました。

また、ホームページのリニューアルにより情報発信がやりやすくなり、広報に携わることができるスタッフが増えたことで、タイムリーな情報発信も実現できました。

上記の通り、良質なシステム基盤を導入したことで、属人的になっていた業務についてもマニュアル化と効率化を進めることができました。結果として業務全体が円滑に進むようになり、スタッフの勤務環境も改善しました。

さらに、バックオフィス体制の基盤強化の取り組みの中で、育児中の優秀な女性スタッフを活用するためのリモートでの勤務体制の構築も実施しました。既存スタッフのフルリモート勤務への転換は不安もあったものの、zoom、slack、Googleスプレッドシート等のICTツールの活用によりオフィス勤務時と変わらないパフォーマンスを実現することができました。また、子どもの発熱等に対応しやすい職場環境の実現により、育児中のスタッフからの高いロイヤリティも得ることができています。

また、今回の経験でロジックモデルの見直しの必要性を感じており、ビジョン・ミッションの実現へのパスが明確になるようなロジックや適切なKPIの検討などブラッシュアップしていきたいと考えています。

SVJ所見：エデュケーションエーキューブ

	社会課題の解決 （事業アウトカム）	組織基盤強化	IMM導入による 事業の高度化
設定された ゴール・ 代表的な指標	子ども達が希望する進路選択が可能となる • 自身の好きや関心への気づき（学習・探求・クリエイティブ活動の向上） • 学校以外の学習環境の増加	事業の持続可能性を高めるためのバックオフィス強化 • 寄付件数 • 業務の効率化（属人性の改善）	アウトカム観点による事業成果の可視化 • モニタリングの実施 • アウトカムの測定
事業成果	• 子どもの探究活動の向上 • 子どもにとって安心できる場所・学べる場所としてのスタディプレイスの認知度向上	• システム導入やマニュアル整備による属人性の改善 • FRスタッフの勤務時間が200時間以上削減 • 働きやすい環境整備によるスタッフのロイヤリティ向上 • 寄付金処理数の34%増加	• 寄付金を活用するバックオフィス事業に加え、スタディプレイス事業に関してのロジックモデルと評価指標を設定し、評価を実施 • 評価結果に基づき、団体のミッション・ビジョン実現に寄与する事業ロジックに改善
課題と 期待される対応	• 事業期間中に初期アウトカムが実現されていることから、事業継続及び追跡調査による中間アウトカムの確認が期待される	• 業務効率の改善により職場環境やスタッフの働きがいが向上した • バックオフィスにおける課題や不安がないか、組織診断等を活用し、今後も定期的な振り返りを実施してほしい	• 事業期間中に自発的なIMMによるPDCAサイクルが実現していることから、現場での定着により、さらなる事業と組織の高度化が期待できる

Ⅱ-4.

認定特定非営利活動法人SALASUSU

社会的インパクト評価報告書

本事業の実施概要

本事業ではカンボジア貧困層の子どもを教室で支える公立学校教師の最初の30人を育成することを目的に、2023.4-2024.3の1年間、教員養成大学附属校及び自社教育実験校（以降自社スクール）で授業研究を基軸とした教師の育成を試みた。本事業でアプローチできた教師は118名（教員養成大学附属校教師は総勢111名、自社スクール教師は7名）と計画を上回り、参加した教師の学びを見る目は育まれきたことが確認できた。また授業研究への参加を通じて授業の修正が多くの教師によって行われ、特に自社スクールでは新規開発されたカリキュラム94本のうち30本以上において改善が行われるなど、期待した成果を出すことができた。一方、同僚性の構築は明確な成果を確認することができず課題が残った。実施方針、評価方針を共に見直し、より有意義な形での実施継続を図る。

事業名：カンボジア貧困層の子どもを教室で支える公立学校教師の最初の30人を育成したい!

【事業の目的】

カンボジア教師の質の向上を目指し、

1) 教育省モデル校2校で、教師研修として日本発祥で世界的に注目される「授業研究」を実施し、生徒一人ひとり学びにより深く着目できるようになることで、教室から取り残される生徒を減らす。
2) 自団体の運営する学校にて、日本人教育専門家と共にカンボジア最先端の授業案を開発し、貧困層の学びを直接自分達で支える現場をもつことで、公立小学校教師授業案・教授法改善に大きく貢献する。

【実施内容 1 】

	実施内容		申請書内、実施計画		
月	教員養成大学附属校2校	自社運営の学校	教員養成大学附属校2校	自社運営の学校	その他
4-6月	（日本人外部専門家派遣、麻布研究所永島氏） 4月　バッタンバン教員養成大学副学長および附属小学校校長・副校長と会議。 実施目的・内容の共有、実施開始の合意を得る	授業の開発	ベースライン調査の実施 キックオフの実施	ベースライン調査の実施 授業の開発	教育省担当部局、教員養成大学との会議
	5月25日バッタンバン教員養成大学附属小学校にて初回授業研究実施。 同校校長へのインタビュー実施	・授業研究実施開始 ・自社運営学校の教員の、左記附属校での授業研究への参加、交流。	教師研修（授業研究）開始 月1回 * 2校（2地域）	授業研究開始 月3回	CPD 正規業者申請
	・6月1日バッタンバン教員養成大学附属中学校にて初回授業研究実施。 ・6月29日バッタンバン教員養成大学附属小学校にて授業研究実施、 教員へのインタビュー、および同僚性サーベイの実施	授業案開発継続・授業研究継続	日本人外部専門家 現地派遣	授業案第一弾まとめ	

本事業の実施概要

【実施内容 2 】

	実施内容		申請書内、実施計画		
月	教員養成大学附属校2校	自社運営の学校	教員養成大学附属校2校	自社運営の学校	その他
7-9月	7月27日バッタンバン教員養成大学附属中学校にて授業研究実施。		授業研究継続	授業研究継続	
	(その他）8月　CPD取得のための調査、ヒアリング実施		授業研究継続 授業案サポート リーダーシップ研修の実施	自社学校と附属校の交流授業研究	CPD正規業者登録
	9月 ・9月6日日本人専門家（カンボジア教師教育専門、荻巣氏）派遣 ・9月7日バッタンバン教員養成大学附属中学校での授業研究（研究協議後半に専門家による講話実施） ・同日、バッタンバン教員養成大学学長・副学長訪問、実施進捗報告 ・同日、バッタンバン教員養成大学で現在実施中の授業研究の見学、担当教官からの実施課題ヒアリング ・ 9月15日 プノンペン教員養成大学附属訪問、副学長との会議にて附属学校での授業研究の実施に関する合意取付。 附属中学校、小学校訪問。 ・ 9月28日 プノンペン教員養成大学附属中学校校長・副校長、教員との授業研究初回導入ワークショップ・授業研究体験会の実施	左記授業研究への継続的な参加	授業研究継続	授業研究継続	中間評価開始

本事業の実施概要

【実施内容 3 】

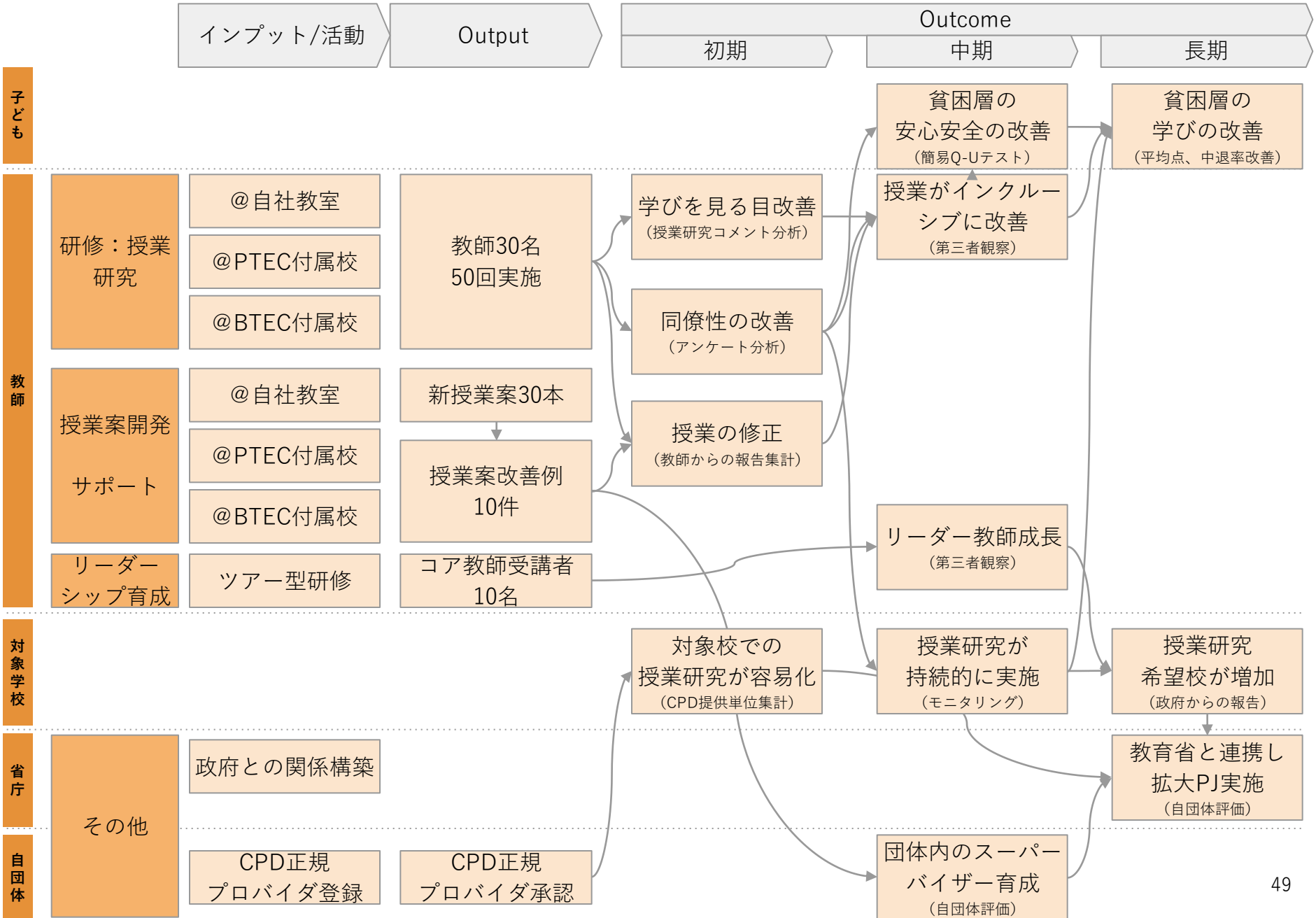
	実施内容		申請書内、実施計画		
月	教員養成大学附属校2校	自社運営の学校	教員養成大学附属校2校	自社運営の学校	その他
10 - 12月	10月 ・10月2日 プノンペン教員養成大学附属小学校副校長、教職開発担当との会議。実施合意取付 ・10月17日プノンペン教員養成大学附属中学校での初回授業研究実施。小学校教員も参加、共同実施。 また同僚性に関するベースライン調査の実施 ・ 10月28日 プノンペン教員養成大学附属小学校での授業研究実施 12月 日本の専門家（麻布教育研究所永島氏）招聘・ ・12月21日バッタンバン教員養成大学附属中学校での授業研究実施（研究協議後半に専門家による講話実施） ・12月23日プノンペン教員養成大学附属小学校での授業研究実施（研究協議後半に専門家による講話実施）	左記授業研究への継続的な参加	授業研究継続	授業案第二弾まとめ	中間報告、教育省、教員養成大学、開発パートナー
1 - 3月	・2月1日　プノンペン教員養成大学附属中学校での授業研究実施。 ・3月27日 JICA 教員養成大学強化事業担当者との顔合わせ・授業研究実施方針の共有・すり合わせ ・3月28日　プノンペン教員養成大学附属中学校での授業研究実施。 ・エンドラインサーベイの実施	・（自社スクール）1月　近隣の小学校生徒を招いての授業の試験的実施 ・授業研究の毎週実施を開始 ・エンドラインサーベイ実施、振り返り対話ワークショップの実施	授業研究継続 授業研究の今後の継続体制の確立 エンドラインサーベイ	授業研究継続 授業案の公開	最終報告、評価実施 次フェーズの提案

【参考　主なアウトプット】

参加教師人数118名、授業研究実施総数59回	自社学校	総計参加人数 7名 実施回数：48回
	PTEC付属校	総計参加人数43名 実施回数：5回
	BTEC付属校	総計参加人数68名 実施回数：6回

授業開発数	自社学校	94本 - 31本*3教科（文学、算数、アート） - 1本（倫理） 改善本数30本

想定したロジックモデル



想定した評価指標とアプローチ

本事業の評価指標と想定したアプローチとして、以下を想定した。

#	アウトカム	指標（単位）	定性／定量	データ取得方法と頻度	ベンチマークの対象と方法	どのように事業運営に活用するか
1	学びを見る目改善	授業研究協議会コメント分析	定性/定量	・協議会での教師一人一人 のコメント分類・集計 • 毎回の授業研究実施時に 録画・録音。分析担当チー ムによるコメント分類	日本や他国での授業研究実施 時の教師の変化に関する平均 データ。	深く学びをみとるコメントが 増えているかから授業研究 の質・教師の学びの深さを 確認する。 スコアが向上しなかった項目を把握し介入施策の改善に活用する。
2	同僚性の改善	アンケート分析	定量	• アンケート調査 • 当団体授業研究開始前後の2回(または中間を入れて3回)	•授業研究を導入していない小学校•授業研究参加前の、付属小学校の教員	• どのような影響があったか・なかったかを確認し、介入施策や頻度について検討する
3	授業の修正	教師の報告集計	定量	• アンケート調査 • ワークショップ開催時	• 授業研究が行われていない学校の授業内容	• 結果を元に介入施策や頻度について検討する • 付属小管轄の教員養成大学管理職や中央省庁政府高官への説明に活用し、より協力を得たり次期事業展開へ繋げる。
4	対象校での授業研究が容易化	CPD提供単位集計	定量	・BTEC/PTECでの単位集計記録(未定)	• CPD取得前の学校とのコミュニケーションの円滑さ	

評価の実施概要

それぞれの評価指標のデータ収集の概要は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	データ取得方法	データ取得時期（アンケート等を実施した日時）・対象者数
1	学びを見る目改善	授業研究協議会コメント分析	・協議会での教師一人一人のコメント分類・集計 • 毎回の授業研究実施時に 録画・録音。分析担当チー ムによるコメント分類	9月7日バッタンバン教員養成大学付属中学校授業研究開催時、参加教員28名 10月17日 プノンペン教員養成大学中学校授業研究開催時、参加教員31名 10月28日 プノンペン教員養成大学小学校授業研究開催時 参加教員20名 12月21日バッタンバン教員養成大学付属中学校授業研究開催時 参加教員19名 12月23日プノンペン教員養成大学小学校授業研究開催時 参加教員15名 2月1日 プノンペン教員養成大学中学校授業研究開催時 参加教員20名 3月28日 プノンペン教員養成大学中学校授業研究開催時 参加教員13名
2	同僚性の改善	アンケート分析	• アンケート調査 • 当団体授業研究開始前後の2回(または中間を入れて3回)	6月29日バッタンバン教員養成大学付属小学校教員11名 7月27日バッタンバン教員養成大学付属中学校教員14名 10月17日プノンペン教員養成大学小学校・中学校教員21名 4月4-12日バッタンバン教員養成大学付属小学校教員15名、中学校6名、 プノンペン教員養成大学小学校32名、中学校教員58名、SALASUSU教師4名
3	授業の修正	教師の報告集計	• アンケート調査 • ワークショップ開催時	4月4-12日バッタンバン教員養成大学付属小学校教員15名、中学校6名、 プノンペン教員養成大学小学校32名、中学校教員58名 4月11日SALASUSU教師4名
4	対象校での授業研究が容易化	CPD提供単位集計	・BTEC/PTECでの単位集計記録(未定)	

評価指標ごとの結果一覧

本事業で設定したアウトカムの変化の一覧は以下のとおりである。

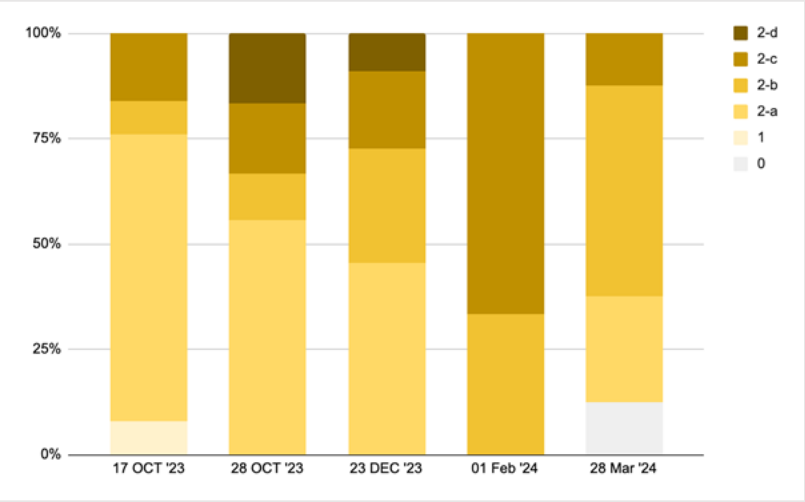
アウトカム	指標（単位）	事業開始時の数値・状態（事前）	事業終了時の値・状態（事後）	事業による変化（事前事後の差異）	回答数（事前/事後）
学びを見る目改善	授業研究協議会コメント分析	生徒を多数で捉えるカテゴリー（1）、個別生徒の性格(2a)に分類されるコメントが半数以上	生徒の学習に関する評価、生徒の学習からの検証を示す2b, 2c のコメントが半数以上	より個別の生徒に着目し、事象をより具に観察できている。また事象からの考察が加えられている	25/18
同僚性の改善	アンケート分析	プノンペン教員養成大学附属小学校　3.0 プノンペン教員養成大学附属中学校　3.1 バッタンバン教員養成大学附属小学校 3.1 バッタンバン教員養成大学附属中学校　3.2	・プノンペン教員養成大学附属小学校　3.0 ・プノンペン教員養成大学附属中学校 2.7 ・バッタンバン教員養成大学附属小学校　2.8 ・バッタンバン教員養成大学附属中学校　2.5 SALASUSU　2.6	平均スコアは低下設問形態、回答者の不一致等が原因で正確なデータの収集に失敗した	（学校名　事前/事後） ・プノンペン教員養成大学附属小学校 8/32 ・プノンペン教員養成大学附属中学校 7/58 ・バッタンバン教員養成大学附属小学校11/15 ・バッタンバン教員養成大学附属中学校 14/6
授業の修正	教師の報告集計	ー	83%95名の教師が授業修正を報告	95名の教師の授業の修正が実施された	事後115名
対象校での授業研究が容易化	CPD提供単位集計	なし	CPD取得は至らず。	一方でJICAのカンボジア国教員養成大学強化を通じた基礎教育の質改善.プロジェクトとの連携が確約され、継続実施・政策化に大きな一歩となった	-

（プノンペン教員養成大学付属校教師）

学びを見る目（アウトカム）の変化

プノンペン教員養成大学付属校教師の学びを見る目がより深まっていることが、研究協議会の発話内容の変容から確認できる。

初期には、生徒を多数で捉えるコメント(分類1) や、主に個別の生徒の性格や態度へ言及するコメント（2a) が多く見受けられたが、後半は、生徒の学習に関して焦点が当たっていく(2b, 2c) コメントが少しずつ増えておいる。観察した事実から、教師自身が学んでいることが読み取れるコメント（2d) は多くはないものの、描写はより詳細になっている。初期は断片的な場面を語るコメントが多かったが、徐々に、連続性のある流れの中で子どもを捉えるようになったコメントが増える傾向にある。



0: 授業・生徒以外の語り
1: 多数の生徒を語る（They, Studentsなど ）
2a : 生徒の性格を語る（この生徒はShyである、
2b: 生徒の学習に関する評価を語る
（よく理解していた、わからなかった）
2c: 生徒の学習に関して実証するコメント（学習課題が適切であったか、グループ学習や質問がどうその行動に影響したか）
2d : 観察した事実から自らが学んだことを述べる

なお、実施5回目となる2024年3月のセッションは、新たに参加した新人教員が5名増え、継続参加教員の参加が落ち込みた。そのため0, 2aのコメントの割合が増えていると考えられる。

（自社学校の教師）

学びを見る目（アウトカム）の変化

自社学校の教師の発話の変容からは、教師の学びを見る目が深く養われていることが窺える。
初期の観察は、特定の個別の生徒の参加態度に焦点が当たっていたが、回数を重ねるにつれて観察の描写が詳細になっている。さらに、その観察された生徒の行動や発言の背景から考察し、自身の学びを述べるようになる。

Mar 2023	キムヤン、モノ、ティーダはとても**活動的で、**隣同士に座っている。教師が彼らに何かをさせたり、質問をしたりすると、**彼らはいつも小さなディスカッションをしてから教師に答える。**あまり**積極的でなかった**のは、ニスとフィープで、先生から質問を受けたり、チームワークを命じられたりしても、あまり参加しなかった。	2a 特定の生徒の授業参加方法・態度
11 Sep	パイカさんのグループについて話します。ピリアクさんも言いましたが、パイカはグループの中で一番静かでした。グループディスカッションの時に、サムナンさんが発表した時に、パイカさんとスウンさんは全然聞いてあげませんでした。イエップさんが発表する時も、パイカさんとスウンさんは全然聞いてあげませんでした。二人だけで話し合っていたので、ソムナンさんはなぜ聞いてあげないのかと聞きました。ソムナンさんからの質問があったから、パイカさんとスウンさんも聞くようになりましたが、**途中でチョムラン先生からの話があったので、2人はイエップさんの話を聞かずに先生の話を聞きました。** 学んだことは、グループディスカッションの時は発表者の話を聞いた方がいいと思います。2人のように発表者をあまり聞かないのはあまりよくないです。全体的な発表も、みんなあまり聞いてあげませんでしたが、**その理由は発表者がちゃんと自分の作品の見せ方にも**問題があると思います。発表するグループにもあまり気づいていなかったので、あまり聞きませんでした。	2c 特定の生徒の詳細な行動、なぜそれが起きていたかの考察
20 Dec	生徒たちは自学自習が少なく、**自分で学ぶよりも座って聞いていることが多かった。**文章を書くという点では、本当に書いているのだが、それは教師の説明から書いたもので**、自分の理解から生まれた文章はなかった。**スレイ・モックとラス・レアクサのグループのチームワークについては、グループに分かれたとき、彼らの表情が変わりすぎていて、嬉しそうだったが、アイデアを共有するとき、サビディがいつも邪魔をするため、あまりアイデアを共有しなかった。	2c 特定の生徒に起きていたことの背景、考察
21 Dec	チョンレアン君を観察していると、彼はクリエイティブな子で、自分のアイデアを持っていて、変なことをするのが好きなんだなと思った。もし私たちが彼に課題を与えたり、**これよりも難しい課題をわたしたら、**彼はこのように遊ばずに、課題に取り組んだかもしれないなと思った	2c 起きていたことへの考察・仮説
01 Feb, 2024	**グループシッティングは生徒の学習に適している**と思いました。教師が質問したり、グループ内でディスカッションをしたりするとき、生徒がたくさんの活動をしているのを見ました。2つ興味深かったのは、1つ目は、生徒の緊張についてです。生徒がとても緊張しているときは、答える勇気がなく、笑顔でいることができないのだと感じました。テアリーとキムチャンを見たとき、彼らは質問に不正確に答え、不正解になった後、お互いに無言で不正解だったことを話していました。聞き取れませんでしたが、とても不安な表情をしているように見えました。もう一つは、ノートを取ることに関してです**。彼女は友達に「先生はまだノートを取るように言っていないから、ノートを取るな」と言っていた。** もし、ノートを取らないのであれば、どの点を覚えればいいのかわからないのではないかなと思いました。 またお互いの会話についてですが、先生が生徒に話し、他の生徒が話すとき、**先生と生徒の間には動きがあるように見えました。もし生徒と生徒の間に動きがあれば**、もっと良くなると思います。	2d 起きたことへの考察、座席配置に関する学び

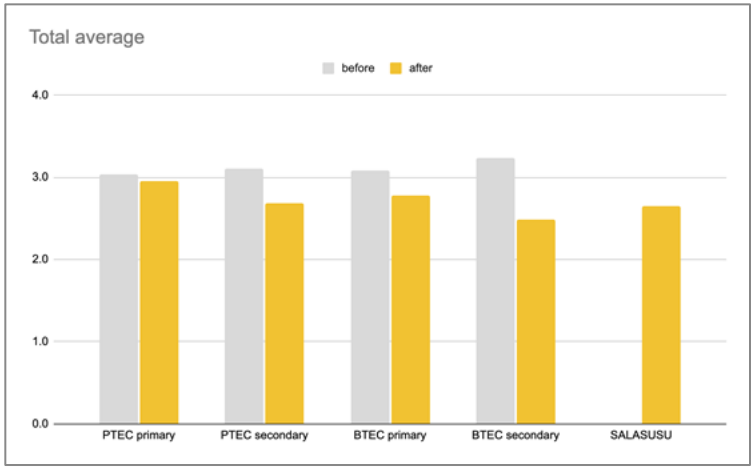
同僚性（アウトカム）の変化

ベースラインとの比較では同僚性の向上に有意な結果を得ることができなかった。アンケート回答形式の違い、ヒアリング対象者の不一致により正確なデータの取得に失敗している可能性がある。
一方で、授業研究を通じて自身の授業の修正を試みたという教師と、同僚性の高さには相関関係が確認できた。同僚性の高い教師は、授業の修正にも意欲的であるか、授業の修正に意欲的な教員は同僚性も高い傾向があるといえそうだから。

他方、初期のインタビュー調査で確認された、職員室がないこと、午前午後の二部制によって教員同士が集う機会が少ないこと等の環境要因をふまえると、授業研究の継続開催施策のみでは、同僚生の向上を促すには不十分であったとも言える。引き続き継続的な調査と施策の投入を試みる必要がある。

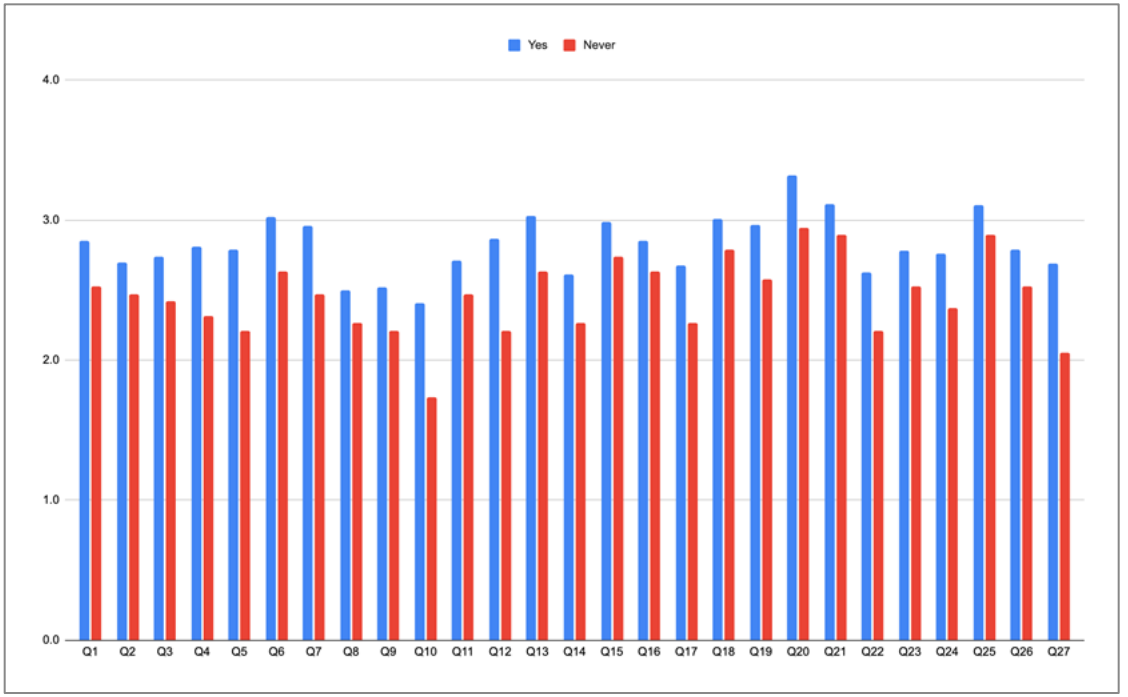
■ 学校別同僚性サーベイ全設問平均スコアのベースラインとの比較

プノンペン・バッタンバン教員養成大学付属校の全4校でエンドラインの結果がベースラインを下回った



■ 授業研究後、授業の修正を行ったかという設問に「はい」と回答した教員と「いいえ」と回答した教員の、同僚性に関する各設問の平均スコアの比較

はいと回答した教師の平均スコアは、いいえと回答した教師に比べて全設問において上回った



アンケート形式についての補足

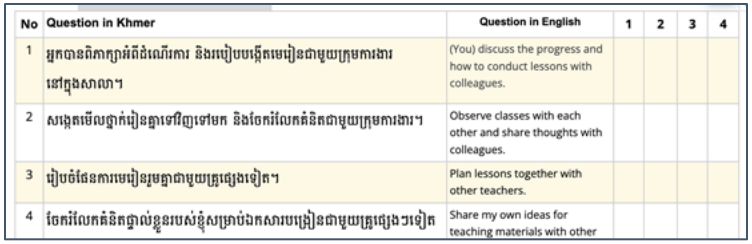
設問の選択肢の違い

例）
Q1. 授業の進度や進め方について話をする。
(You) discuss the progress and how to conduct lesson with colleagues. តើអ្នកបាន ពិភាក្សាអំពីដំណើរការ និង របៀបដឹកនាំមេរៀននៅ ក្នុងសាលាជាមួយក្រុមការងារទេ?

選択肢：1 Never មិនដែលសោះ　　2 Sometime ពេលខ្លះ
3 Often ជាញឹកញាប់ 4 Always ជានិច្ចកាល

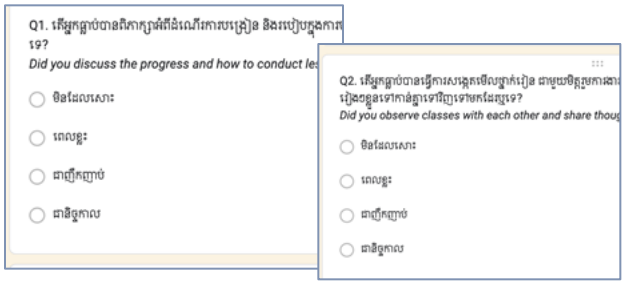
上記選択肢の回答方法にベースラインとエンドラインで違いがあった。

- Before:　数字をチェックする形で行動傾向を回答する。
  3を選ぶバイアスが強かった可能性がある。



No	Question in Khmer	Question in English	1	2	3	4
1	អ្នកបានពិភាក្សាអំពីដំណើរការ និងរបៀបបង្កើតមេរៀនជាមួយក្រុមការងារ នៅក្នុងសាលា។	(You) discuss the progress and how to conduct lessons with colleagues.				
2	សង្កេតមើលថ្នាក់រៀនគ្នាទៅវិញទៅមក និងចែករំលែកគំនិតជាមួយក្រុមការងារ។	Observe classes with each other and share thoughts with colleagues.				
3	រៀបចំផែនការមេរៀនរួមគ្នាជាមួយគ្រូផ្សេងទៀត។	Plan lessons together with other teachers.				
4	ចែករំលែកគំនិតថ្នាល់ខ្លួនរបស់ខ្ញុំសម្រាប់ឯកសារបង្រៀនជាមួយគ្រូផ្សេងៗទៀត	Share my own ideas for teaching materials with other				

- After：1-4のliner scaleでの回答の分かりづらさを防ぐため、頻度を示す単語を設問の都度、選ぶ形式とした。

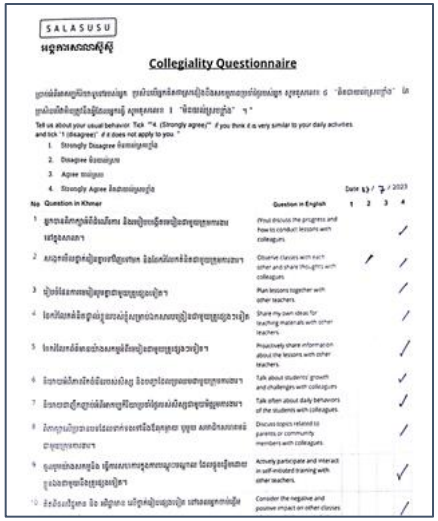


回答数の違い

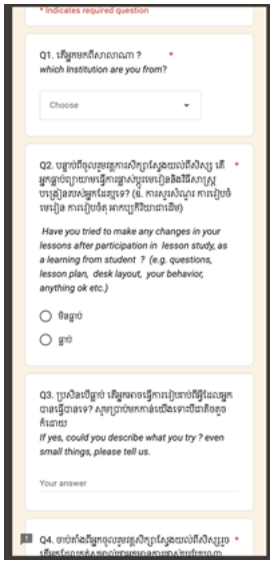
アンケート回答数		before	after
PTEC	小学校	8	32
	中学校	7	58
BTEC	小学校	11	15
	中学校	14	6
SALASUSU		0	4

形式の違い

Before: 質問票



After: Google Form



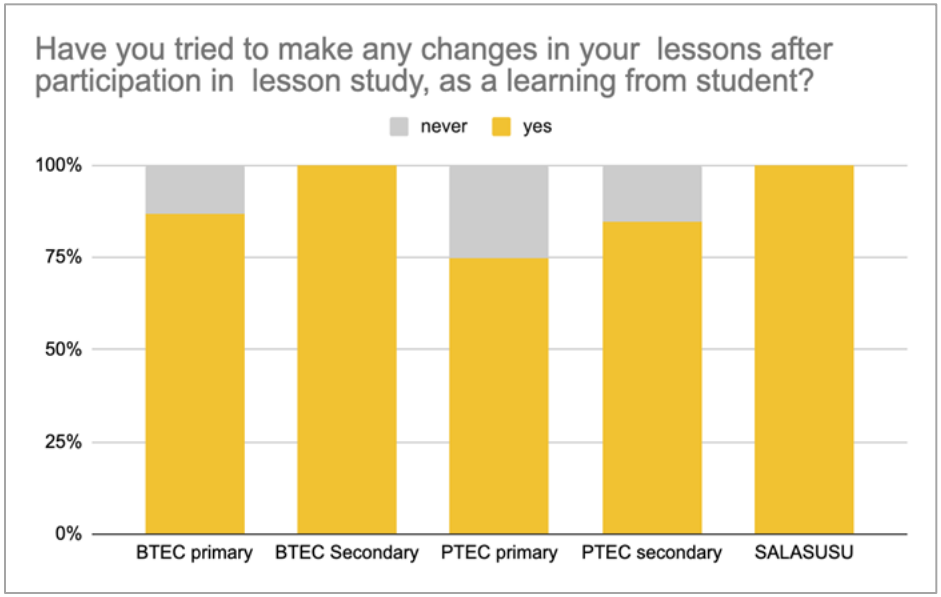
授業の修正（アウトカム）の変化

授業研究への参加によって、多くの教師が授業の修正を試みている。
90%以上の参加教師が授業研究が有益であると回答。

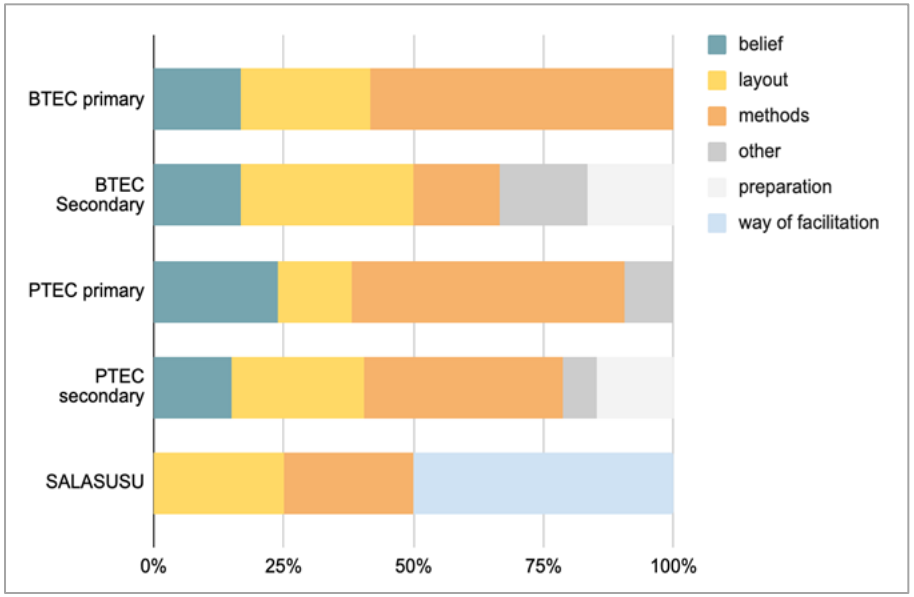
具体的な修正としては主に以下のような内容が確認できた。
1) 教授法の工夫（「発問を変えた」「 生徒中心の活動を充実させる」「写真等、教材を工夫し生徒を支援できるようにした」）
2) 座席配置の工夫（生徒の自然な対話を促すグループの配置の導入、一人ひとりの学習レベルを鑑みてグループを組む等の工夫）
3) 教師自身のマインドセット・信念に関する変容（より一人一人を近くで観察するようになった、より学習スピードのゆっくりな生徒へのサポートを考えるようになった、自信がつくように、生徒が楽しく学べるように心がける、など。

（BTEC 教員）*「できるだけ生徒が学習方法を選べるように、たくさんの機会を作るようにするようにしました。例えば、物語を読んだり、写真を見せたりするのが好きな生徒には、皆の前でやってもらうようにします」*

- 全校で授業研究後に授業の修正を行った教師が多数を占める



- 多くの教師が教授法の工夫や、座席配置の変換を行っている



（自社学校の教師）

授業の修正（アウトカム）の変化

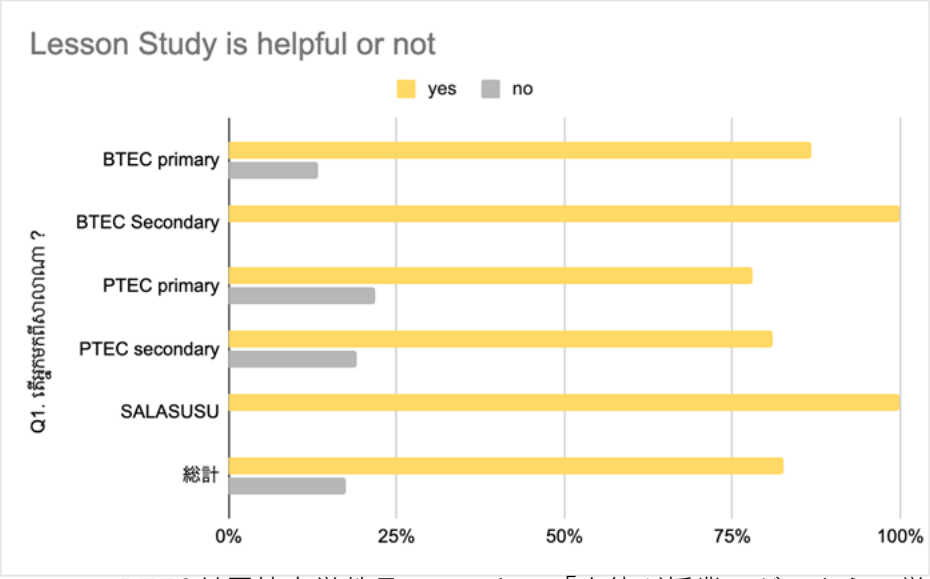
自社学校の教師は教員養成大学附属校に比べて授業研究参加回数・頻度ともに大きく上回っている。授業研究と授業の修正の結びつきもより明確になってきていることが伺える。授業研究が時間をかけてインダイレクトに教師の変容を導いていく特徴からすると、付属校教員においては多数が授業研究の意義に賛同するものの、疑問を感じる教員も少なからず存在する。

- 自社学校の教師は、授業研究を総計48回ほど実施。授業研究での学びが日々の授業での小さな挑戦に繋がるようになってきている

- 大多数の教師が授業研究は有益であると回答。一方で附属小学校、中学校では回数を重ねられたからこそ、授業との結びつきに疑問を持つ教師もおり、ここから頻度を向上できるかが鍵である。

授業の中で問いを投げかけても生徒がみんな話をしないので、みんなが授業内容を理解していない、あるいは理解しても話すことがないのかなと思っていた。ただ、他の授業を見た時に、実は子どもたちが紙にキーワードをメモしていたり、小さい声でつぶやいていたりしているのを見て、彼らは話すことがあるんだ、話せてないだけなんだと気づいた。そこからは、自分の授業中も自分が話すのではなく子どもたちの小さい声に耳を傾け、観察するようになった。グループで話すだけではなく、自分のペースで意見を言葉にできるように紙に書いてもらったり、ペアで話してもらったり、せかさず待つように授業のやり方を変えた（クメール文学クラス担当教員 SALASUSU）

成人女性と子どもたちが一緒に学んでいるクラスを持って、1つのグループに大人に対して子どもの数が少ないと、子どもが置いていかれがちになってしまうことに気づいた。そこからはできる限り成人女性と子どもたちのバランスが取れるように席の配置を工夫している。（アートクラス担当教員 SALASUSU）



- PTEC付属校中学教員コメント：「生徒が授業でどのように学んでいるのか、毎回よりよく理解することができる」
- PTEC付属校小学教員コメント：「なぜ有益なのかわからない」

本事業がもたらした成果・得られた学び

本評価を通して確認された、本事業の成果、得られた学びは以下のとおりである。

【事業成果】

- 授業研究、特に生徒の学ぶ姿から学ぶという形の授業研究を、カンボジアの教員養成を担っていく教員養成大学の附属の小中学校とともに進められたことは大きな成果である。特にプノンペンにおいては期の後半からのスタートとなったが、校長・副校長の強力なサポートを得られ約2ヶ月に一回の頻度で開催できている。
- 生徒から学ぶことを中心においた授業研究の実施を重ねたことで、教員の学びを見る目が深まっていくことを確認できた。
  また発話だけからは明確に確認できずとも、授業研究を通じて授業をよりよくしていこうと工夫する教員のコメントがアンケートから確認された。
- CPD取得には至らなかったが、付属校との授業研究の試みを本事業で先駆けて行うことができたため、 JICAが2024年より開始するカンボジア国教員養成大学強化を通じた基礎教育の質改善プロジェクトの事業実施要件に、本事業との連携・共同が明確に要請された。本授業研究を中心とする試作の継続的実施及び政策化への大きなアドバンテージとなった。

【得られた学び】

- 1年間という限られた事業期間内でバッタンバン、プノンペン、さらに自社学校を含めた3拠点での授業研究の導入～実施は想像以上に難しかったが、カンボジア内外で教育に長く携われれてきた外部専門家の方々の多大なサポートを受けて、いずれの学校でも授業研究導入に至ることができた。教育省との事業を加速していくために非常に重要な一歩となった。本事業の先行実施があり、JICA案件及び当該事業に携わる方々との繋がりが生まれたことも大きな成果である。

- 1年間でアウトカムに到達すること、またその成果を指標を用いて表現することは想定以上に難しく、ベースラインの取得や、アンケート調査の設問設定等に多くの反省が残った。特に、授業の変容を試みることと、同僚性の高さには相関性があることが言える一方で、授業研究と同僚性向上の因果関係については、はっきりと成果として確認することができなかった。その一つの要因として、同僚性のような、抽象度の比較的高く、教員らにとって慣れない行動様式を問う設問内容についてをクメール語で行うというステップであったにもかかわらず設計が至らなかったため、正確な回答を得ることが困難を極めた。現在の回答内容から改めて質問数を絞り、回答の精度をあげていき、引き続き観測していきたいと考える。

【ソーシャルバリュージャパンの方との議論からの学び】

- 特に上記同僚性の調査方法については、匿名ながら個人の変化を追うことができるようなユニークIDを用いた調査票の作成や、回答者の属性がわかるような形で回答が取れるとより有意義な分析ができそうである。また、設問や、尺度等についても引き続き先行研究を参考にしながら学習を続け、ブラッシュアップしていきたいと考える。
- またそもそも、カンボジアにおける同僚性への認識についても、より深く思考し、他団体の組織開発等の事例も参考にしながら授業研究だけではない、アプローチも模索していきたいと考える。
- 改めて、本事業を通じてインパクト評価に挑戦することができ、特にプログラムのリーダーメンバーにはロジックモデルやアウトカムへの感度が育まれた感覚がある。また今後エビデンスベースのアドボカシーを行っていく上でこうした表現方法が対外的なコミュニケーションに必要不可欠であると強く認識できた。反省点も含めこうした学びをサポートいただけたことがとてもありがたく、団体としてその経験と能力を引き続き培っていきたいと考える。

SVJ所見：SALASUSU

	社会課題の解決 （事業アウトカム）	組織基盤強化	IMM導入による 事業の高度化
設定された ゴール・ 代表的な指標	貧困層の学びの改善 • 教師の学びを見る目の改善 • 授業の修正 • 同僚性の改善	設定なし	アウトカム観点による事業成果の可視化 • モニタリングの実施 • アウトカムの測定
事業成果	• 50%以上の教師が学びを見る目の改善を認識 • 83%の教師が授業を望ましい方向へ改善	ー	• 学力向上への直接的な働きかけではない対象事業のアウトカムが可視化され、カンボジアにおける教育改善に向けたアドボカシーへの活用を検討 • リーダーメンバーにおけるアウトカム観点の浸透
課題と 期待される対応	• 同僚性の改善は、測定手法の工夫による確認が想定される • 事業継続及び追跡調査による中間アウトカムの確認により、さらなる社会構造への働きかけが期待される	ー	• 組織全体でのIMM浸透は途上だが、アウトカム観点でのモニタリングを継続し、成果を共有することで、事業の高度化やアドボカシーへの活用が期待される

II -5.

特定非営利活動法人チャイボラ

社会的インパクト評価報告書

本事業の実施概要

本評価の対象となる事業の目的と実施内容は、以下のとおりである。

事業名：社会的養護における施設横断型の新任職員研修プロジェクト

【事業の目的】

社会的養護の子どもは虐待などの過酷な背景を持ち、障がいや心理的課題を抱える場合も多い。精神的・経済的に将来自立できるよう支援者は奮闘しているが、鍵となるのは一人ひとりが温かい環境で育てられることである。養育者である職員による適切で充分な関わりが重要だが、職員の人材不足がそれを阻む。チャイボラは職員不足の解消のため、職員の確保と定着を支援し「子どもたち一人ひとりが大切に育てられる世の中」を目指している。

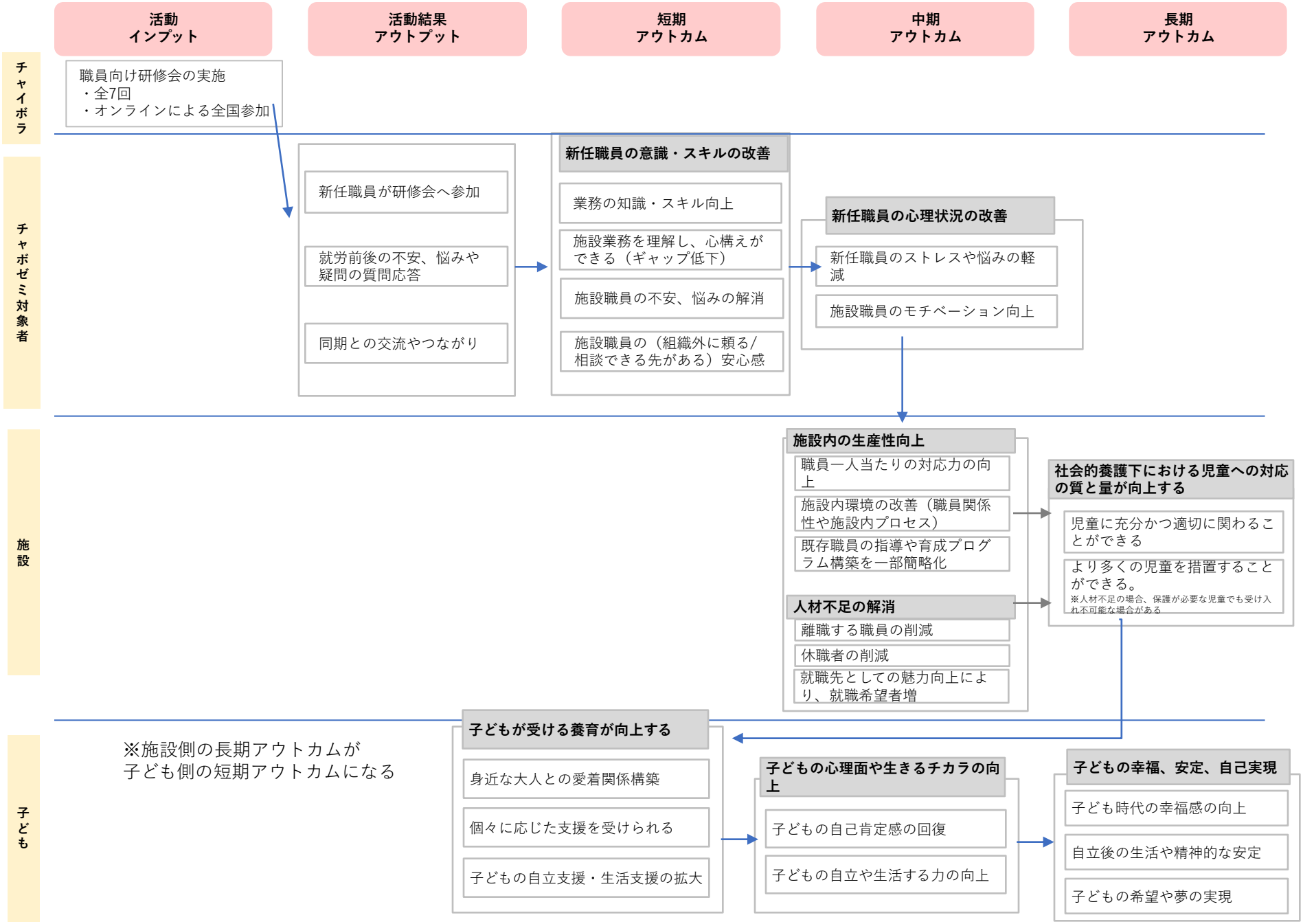
社会的養護の現場では、貧困や虐待などの背景を持つ子どもを一度に対応することから現場は想像以上に過酷である。そのうえ社会的養護の特性上、現場で指導しながら新人を育てるOJTの余裕もなく、同期との繋がりも希薄なため、新任職員が耐え切れずに離職するケースも多い。本事業では、社会的養護施設における新任職員の早期離職防止・職員定着を目的とする。

【実施内容】

社会的養護施設における新任職員の早期離職防止・職員定着を目的とした、施設横断型の内定者・新任職員研修プログラム「チャボゼミ」の実施

・対象：チャボナビ登録施設の内定者（2023年入職者）
・全７回の講座を実施
　→内定後：基礎講座として子どもとの関わりや施設職員としての知識・考え方をインプット
　→入職後：テーマを設けた交流会、質疑応答

チャボゼミ事業に関する社会的インパクトとロジックモデル



想定した評価指標とアプローチ

本事業の評価指標と想定したアプローチとして、以下を想定した。

#	アウトカム	指標（単位）	定性／定量	データ取得方法と頻度	ベンチマークの対象と方法	どのように事業運営に活用するか
1	業務への知識・スキル向上	知識・スキルの変化スコア（%）	定量	● 参加者アンケート調査 ● 研修の各受講後7回	ベンチマークや変化の測定が困難なため実感値を確認する	● セミナーの効果を可視化しステークホルダーへの説明に活用する（支援者、施設、次回対象者） ● プログラム内容や構成の改善に活用
2	施設職員のモチベーション向上	施設職員のモチベーションスコア（%）	定量／定性	● 参加者アンケート調査 ● 研修の各受講後7回	同上	● 同上
3	施設職員の悩み・不安の軽減	施設職員の悩みの軽減スコア（%）	定量／定性	● 参加者アンケート調査 ● プロジェクト中間時、最終時の2回	同上	● 同上
4	施設業務へのギャップ低下	施設業務へのギャップ低下スコア（%）	定量／定性	● 参加者アンケート調査 ● プロジェクト中間時、最終時の2回	同上	● 同上
5	新任職員の悩みやストレス、モチベーション	悩み・ストレススコア ストレス対応スコア モチベーションスコア（5段階）	定量	● 受講者へのアンケート調査	公開調査を実施し、比較する。	● 同上
6	新任職員の悩み・モチベーション低下の改善	定性	定性	● 参加施設担当者へのアンケート調査1回	過去の新任職員との比較や研修による効果	● 同上
7	新任職員の離職率	参加施設の1年目離職率（%）	定量	● 参加施設への確認 ● 最終研修後1回	参加施設の過去2年間の1年目離職率との比較（過去2年採用なければ、直近2学年）	● 同上

評価の実施概要

それぞれの評価指標のデータ収集の概要は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	データ取得方法	データ取得時期（アンケート等を実施した日時）・対象者数
1	業務への知識・スキル向上	知識・スキルの変化スコア（%）	● 参加者アンケート調査 ● 研修の各受講後7回	2023年1月22日、2月19日、3月19日、6月21日、9月20日、12月20日、2024年3月20日 研修参加者約70名
2	施設職員のモチベーション向上	施設職員のモチベーションスコア（%）	● 参加者アンケート調査 ● 研修の各受講後7回	2023年1月22日、2月19日、3月19日、6月21日、9月20日、12月20日、2024年3月20日 研修参加者約70名
3	施設職員の悩み・不安の軽減	施設職員の悩みの軽減スコア（%）	● 参加者アンケート調査 ● プロジェクト中間時、最終時の2回	2023年8月22日／2024年3月20日 研修参加者約100名
4	施設業務へのギャップ低下	施設業務へのギャップ低下スコア（%）	● 参加者アンケート調査 ● プロジェクト中間時、最終時の2回	2023年8月22日／2024年3月20日 研修対象者約100名
5	新任職員の悩みやストレス、モチベーション	悩み・ストレススコア ストレス対応スコア モチベーションスコア （5段階）	● 参加者アンケート調査 ● 比較対象アンケート	参加者：2024年3月20日 研修参加者約70名 比較対象：2023年4月／2024年4月
6	新任職員の悩み・モチベーション低下の改善	定性	● 参加施設担当者への定性で感想を問うアンケート調査	2024年4月15日 研修参加施設　35施設
7	新任職員の離職率	参加施設の1年目離職率（%）	● 参加施設の離職率は、退会者から判定 ● 比較対象の離職率は、チャボナビ全体の離職率を本件とは別のアンケートから計算。	参加施設の離職率は、退会者から判定。 比較対象の離職率は、2024年3月18日

評価指標ごとの結果一覧

本事業で設定したアウトカムの変化の一覧は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	事業開始時の数値・状態（事前）	事業終了時の値・状態（事後）	事業による変化（事前事後の差異）	回答数（事前/事後）
1	業務への知識・スキル向上	知識・スキルの変化スコア（%）	-	-	研修の内容は今後の業務に活かせそうですか？に対して5段階評価で4.83	355
2	施設職員のモチベーション向上	施設職員のモチベーションスコア（%）	-	-	仕事に対するモチベーションはあがりましたか？に対して5段階評価で4.30	355
3	施設職員の悩み・不安の軽減	施設職員の悩みの軽減スコア（%）	-	-	職務への不安・悩みは軽減しましたか？に対して5段階評価で3.86	91
4	施設業務へのギャップ低下	施設業務へのギャップ低下スコア（%）	-	-	職務に対するイメージと実態のギャップは解消しましたか？に対して5段階評価で3.89	91
5	新任職員の悩みやストレス、モチベーション	悩み・ストレススコア ストレス対応スコア モチベーションスコア（5段階）	<比較対象> 悩み・ストレス 3.34 入職後ギャップ 3.10 ストレス対処　3.25 モチベーション 3.47	<参加者> 悩み・ストレス 3.56 入職後ギャップ 3.20 ストレス対処　3.83 モチベーション 3.79	悩み・ストレス 0.21高い 入職後ギャップ 0.10高い ストレス対処　0.59高い モチベーション 0.31高い	比較対象40 参加者42
6	新任職員の悩み・モチベーション低下の改善	定性	-	-	モチベーションや同期との繋がりなどの効果について言及があった	35
7	新任職員の離職率	参加施設の1年目離職率（%）	<比較対象> 16%（2023年入社） 17%（2022年入社） 5.2%（2023年内定辞退率）	<参加者> 10.2%（2023年入社） 内定離脱 0 人	1年目離職率は、6~7%低い また、内定離脱もゼロとなった	―

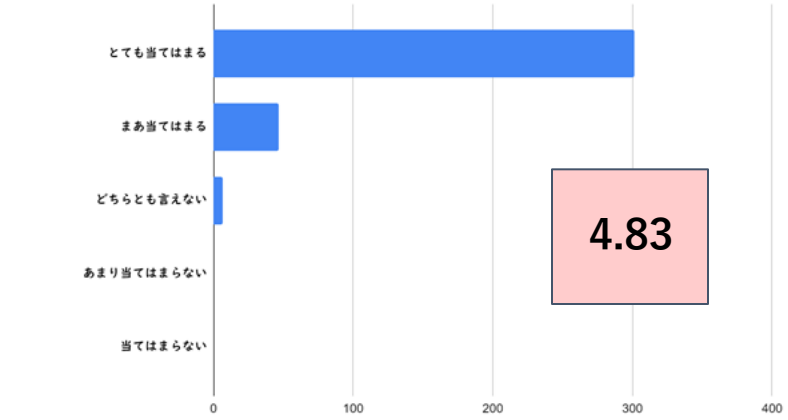
研修による意識・スキル（アウトカム）の変化

本事業で確認された受講者アンケートで調査した意識・スキル（アウトカム）の変化は以下のとおりである。

- 受講者は、研修の知識が活用でき、モチベーション向上の実感が得られている。
- 不安解消やギャップ解消については、できている受講者も多いが、どちらとも言えないと答えた層も一定いた。

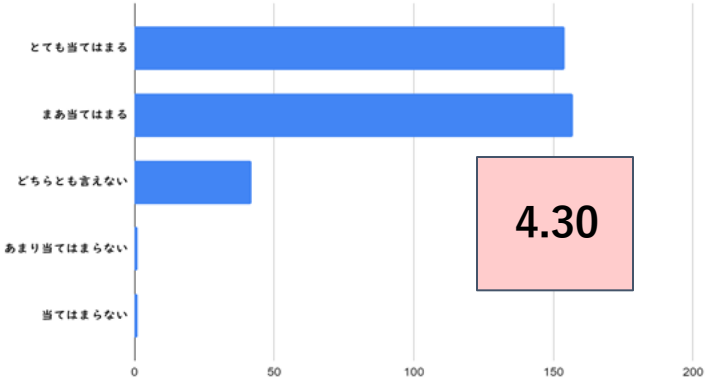
知識の活用（各講座後アンケート）

研修の内容は今後（就職後）の業務に活かせそうですか？



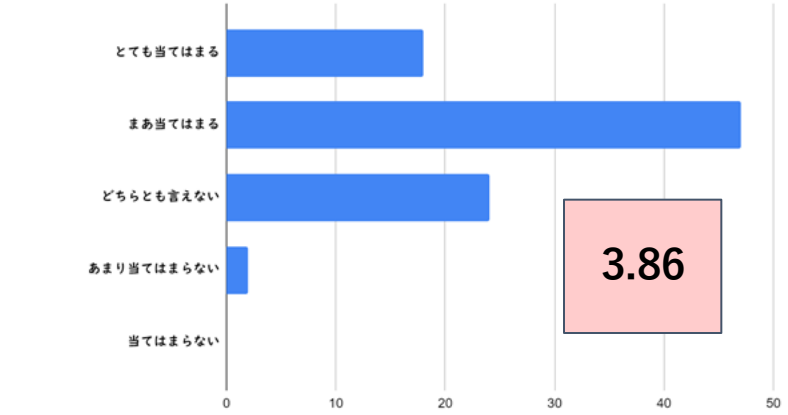
モチベーション向上（各講座後アンケート）

研修を受けて仕事に対するモチベーションはあがりましたか？



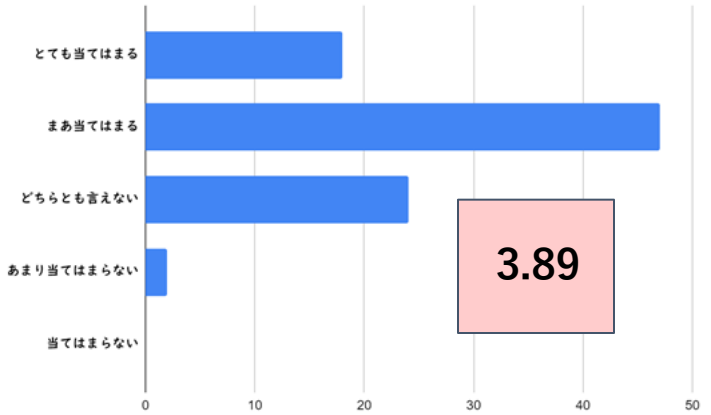
不安解消（中間、最終アンケート）

職務への不安・悩みは軽減しましたか？



ギャップ解消（中間、最終アンケート）

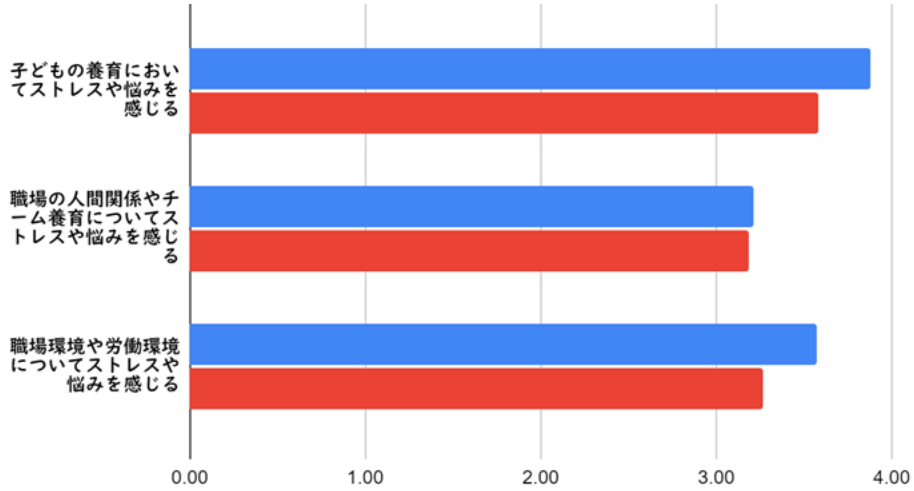
職務に対するイメージと実態のギャップは解消しましたか？



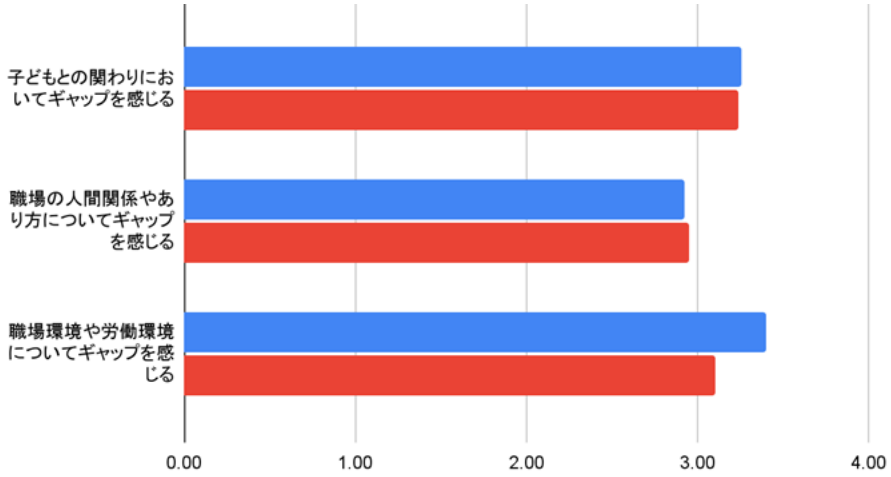
本事業で確認された、未受講者との比較で調査した意識・スキル（アウトカム）の変化は以下のとおりである。

- ストレスや悩み、入職前の想像とのギャップについては、受講者グループの方が高い結果（ネガティブな心境）となった。（想定される理由は後述）
- ストレス対処やモチベーション向上については、受講者グループの方が高い結果となった。

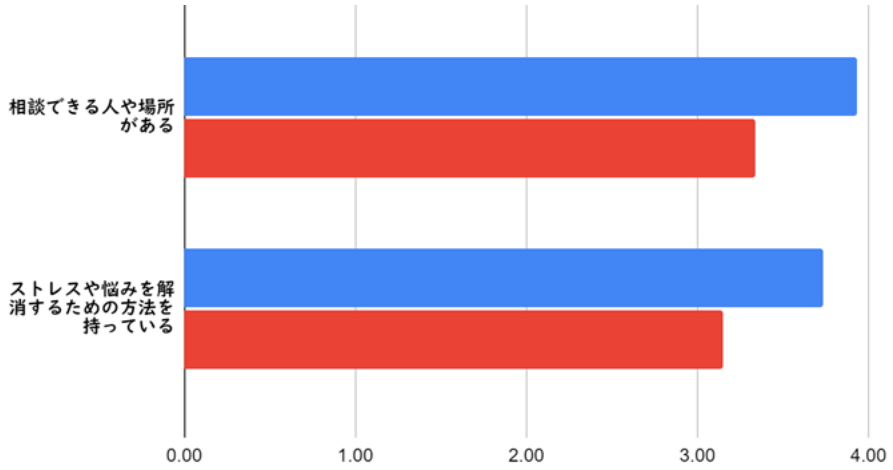
ストレスや悩みの感じ方



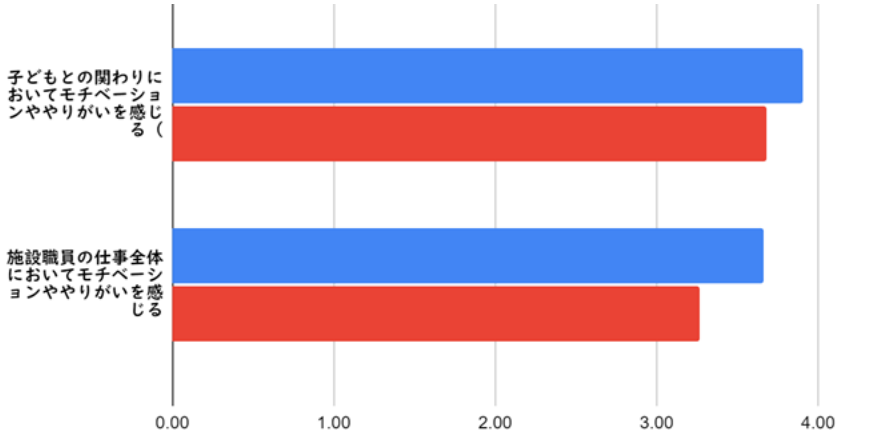
入職前の想像とのギャップ



ストレス対処



モチベーションの感じ方



受講者からの定性コメント（各アンケートから抜粋）

- 研修で得られた考えかたや知識によって、より良く対処ができるようになった姿が見られた。
- グループトークによって、楽しさや安心、励みなどの感情を得られた受講者が多くいた。
- 一方で、講座の内容が既に知っていたという意見や、メンバーとの交流についてもっと深められたらという意見も見られた。
- また、他の施設について聞くことで、自らの施設の状況をネガティブに捉えてしまう声も見受けられた。

定性コメント（知識やスキルについて）

- チーム療育の大切さと難しさについて、職員一人ひとり価値観の違いが生じた時に、すり合わせが大切で、そのときのポイントなどを知ることができ為になりました。今後現場に出た時に、理由を聞くこと、話すことや一人ひとりに合わせて伝え方を工夫するなど、実践してみたいと思いました。
- 長い勤務時間で身体が疲弊してくる中、様々な方のリフレッシュ方法であったり、宿直の日の過ごし方等、参考にしたい情報を共有できたことは貴重であり、今後にも活かしていきたいと思いました。完璧になり過ぎない事、自分の中でのハードルを下げることは今後の自分の目標にしていきたいと感じました。
- ケース検討でケースと似た子どももいてどのように声掛けをしたらよいかについて検討出来ました。今後活かせることもあるので生かしていけたらと思いました。
- 職員間でのコミュニケーションの取り方や子どもとの関わり等、講義で学んだことは実際の取り組みにも活用できると思いました。特に印象に残ってるのはABC分析です。これを学んでから、子どもたちの行動の要因について考えたり、そこからどうしていけばいいかを考えたりと、より深い支援を意識できるようになったと思います。
- 講師の皆さんの「まずは自分を大切に」という声掛けが、ついつい自分を犠牲にしてしまいがちな職種の私にとって気持ちを軽くする魔法のお言葉のようでした。日々の業務で講師の皆さんのお言葉を思い出す場面が大変多くあり、不安・悩みの軽減に繋がっていました。

定性コメント（交流について）

- なかなか先輩など同じ職場の人には話し辛いこと、年齢の近い似た職場の人と話せる機会があるのはとても嬉しい。
- 全国の、同じような職場で働いている方とお話しできることはモチベーションアップにつながり、とてもいい機会だと感じています
- グループワークで楽しく話せたことがよかった。会を重ねるごとに話したいことやエピソードが増えている気がする。
- 悩みを持っているのは自分だけではないと気付くことができてとても救われました。ありがとうございました。
- 職場に同期がおらず、経験豊富な先輩職員さんと働く私にとっては離れていても同じ悩みを抱えている新卒の方がいると認識できたことがとても励みになり、大変有意義な時間を過ごすことができました。

定性コメント（ネガティブ）

- 調べれば簡単にわかることしか出てこず少し残念。もう少し現場経験者ならではの話が知りたかった。
- 全国から参加していることもあり、1度仲良くなった参加者とずっと繋がりを保つことが難しいのは少し寂しい。色んな人と関わることができるのも魅力ですが、グループワークのメンバーを一定期間固定するなどすると、横の繋がりがより強固なものになり、モチベーションが上がるのではないか
- 初対面の人とグループになってものの数分で解散する人に自分の施設の話を詳しくしようと思えません。
- グループディスカッションは楽しかった。ただ他の職場の方がいいなと考えてしまう。

参加施設担当者からの声

- 参加施設担当者からは、同期との繋がりやモチベーションの向上、基本的な知識が得られているという声があった。
- また、それらの効果から、子どもと関わる姿の望ましい姿や、子どもへの接し方への助言がよりできるなど、具体的な養育への効果も見られた。
- 一方で、オンラインでの難しさ、施設による申込のため本人の参加意識に課題があった。
- 効果測定ができないという声があり、チャボゼミ全体としてインパクト評価を実施した結果を伝えていくことで、参加施設にも効果を理解してもらうことができる。

成果や効果について

- 全国の同期と繋がることで、職場だけでは感じられない繋がりを感じられたようです。
- 研修を受けた者同士仲がいい。
- 受講した新入職職員からは、同じ入職の人と悩みが同じだったので、自分だけではないと思い、モチベーションが上がったとのことであった。
- チームとして働くという意識からか、ホウレンソウなどの社会人としてのマナーを実践できている。わからないことは質問ができる。社会的養護で生活する子どもの前提を理解していることで、子どもと関わる姿勢も望ましい関わりが出来ている。
- 同期との情報交換の中で、自分に自信が持てたり、児童福祉で働く事、今の職場で働く事への不安が多少は解消されたのではないかと思います。
- 他施設の状況や、各々の悩みの共有などを通じて自分一人の悩みではないことを実感したり、自分の近況を話し、共感してもらうことで安心感やモチベーションアップにつながったのではないかと思います。何より楽しそうに参加していた姿が印象的でした。
- 施設としてはこのような研修の機会を用意していただいてとてもありがたく思っています。社会的養護で働く職員に向けてと、対象を可能な限り限定していて、目的も明確なため、学習効果もとても高いと感じています。

これまでの新入職員との違いについて

- 途中退職者がいなかった。
- 自分の考えや意見を伝えられる
- 入職前に事前に知識を入れることができたことと、採用が決まった後に、これまで、内定者フォローを実施することなく入職を迎えていたので、採用後のアクションとして、本来ならば園がしなくてはいけないことを、研修として実施してくださりとても助かりましたし、私どもも参考になりました。
- 子どもとの対応でメンタル面で不安を抱えている職員が、研修を受けることで、同じ悩みを共有するこができたことにより、また、頑張ろうという気力が沸いてきたようです。
- 具体的な成果のところにも記載しましたが、内部での指導の必要性がとても少ないです。事前に大事にしてほしいことを学んでいるため、具体的な子どもへの接し方などの助言ができ、前提を説明する手間が少ないような気がします。
- 仕事に対する姿勢が真摯である

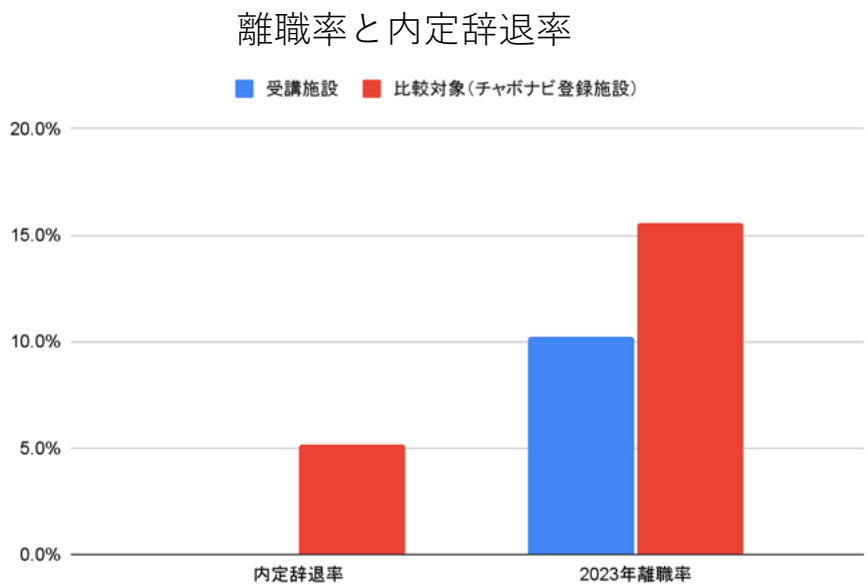
ネガティブな意見

- 今回、対面ではなくオンラインなので、研修参加による効果を職員自身も感じにくかったようです。
- 職員が積極的に受講しなかったため、よい研修にならなかったようです。
- 横の繋がりがどこまでできたか。スキル面やコミュニケーション面なので効果測定ができない。チャボゼミだからできた！　効果的だった！　と言えないような気がしました。

離職率と内定辞退率

本事業で確認された、未受講者との比較で調査した離職率・内定辞退率（アウトカム）の変化は以下のとおりである。

- どちらにおいてもチャボナビ登録施設全体と比較すると少ないことが判明した。



本事業がもたらした成果・得られた学び

本評価を通して確認された、本事業の成果、得られた学びは以下のとおりである。

【事業成果】

受講者の研修を受けた実感値として、知識を活用したり、モチベーション向上を得ることが出来た。
同時期（2年目4月）の比較調査からは、ストレスや悩みは受講者の方が感じているという結果となった。研修で話す場があることで自分のストレスや悩みを認識したり、他施設や他者との比較で至らない部分を認識したことなどの原因が想定される。
一方で、ストレスの対処やモチベーションは受講者のほうが高い結果となり、研修において様々な悩みを解決する手法や考え方（人に相談することも含めて）を得ることが出来たり、人と悩みを話したり励まされたりすることがモチベーションに繋がったと考えられる。このことから、より自身の状況をメタ認知的にとらえることができ、さらにそれに対して対応したりストレスは感じつつもやりがいを持って取り組む姿が伺える。
数値的な離職率・内定辞退率は受講者の方が低い結果となった。

上記のことから、中期アウトカムである「不安や悩みの解消」や「モチベーション」の向上、またそれによる「離職率の低下」について、一定の効果が得られたものと思われる。

【得られた学び】

- 特に施設をこえた交流やディスカッション時間がチャボゼミならではの提供価値であり、モチベーション向上に繋がり、離職率そして内定辞退率の低下に繋がったと考えられ、ここの質を高めていくことがさらなる成果につながることが分かった。毎回グループトークのメンバーを頻繁に変更してより多くの人と関われるようにしていたが、途中からは、何回か同じメンバーでグループができるように変更して、より心理的な結びつきを深めるようにした。
- 受講者のバックグラウンドが様々なため、専門学校の授業等でよく学んでいる人にとっては知っている内容でも含まれたことが分かった。ただしリアルな知識やスキルは1年目を乗り切るために効果的であったため、途中からは、講師の現場経験者としての体験談・実際のケースをより多く盛り込み、より知識やスキルを活用してもらえるようにした。
- 特に内定離脱に非常に効果があることが判明した。そのため、入職前の1月からの実施だったが、第三期ではより早い時期からプレ交流会を実施することを検討している。

SVJ所見：チャイボラ

	社会課題の解決 （事業アウトカム）	組織基盤強化	IMM導入による 事業の高度化
設定された ゴール・ 代表的な指標	子どもとかかわる新任職員の意識・スキルや心理状況の改善 • モチベーションの向上 • 離職率の低下	設定なし	アウトカム観点による事業成果の可視化 • モニタリングの実施 • アウトカムの測定 • 対照群の設定
事業成果	• 学びやスキルの獲得 • モチベーションの向上 • ストレスへの対処向上 • 離職率・内定辞退率の低下 • 施設側の負担軽減（新任職員が即戦力として活躍）	ー	• 中間評価の結果を踏まえて、グループワークのメンバーを固定する等の事業手法を改善した結果、参加者に連帯感が生まれ、参加者のさらなるモチベーション向上を達成した
課題と 期待される対応	• 参加施設への追跡調査による子どもの養育の質向上への効果の確認が望ましい • 事業成果の周知や手法・知見の共有による、参加者や参加施設といった受益者の拡大が期待される	ー	• 事業期間中に自発的なIMMによるPDCAサイクルが実現していることから、現場での定着により、さらなる事業の高度化が期待できる

II -6.

母子生活支援施設ベタニヤホーム

社会的インパクト評価報告書

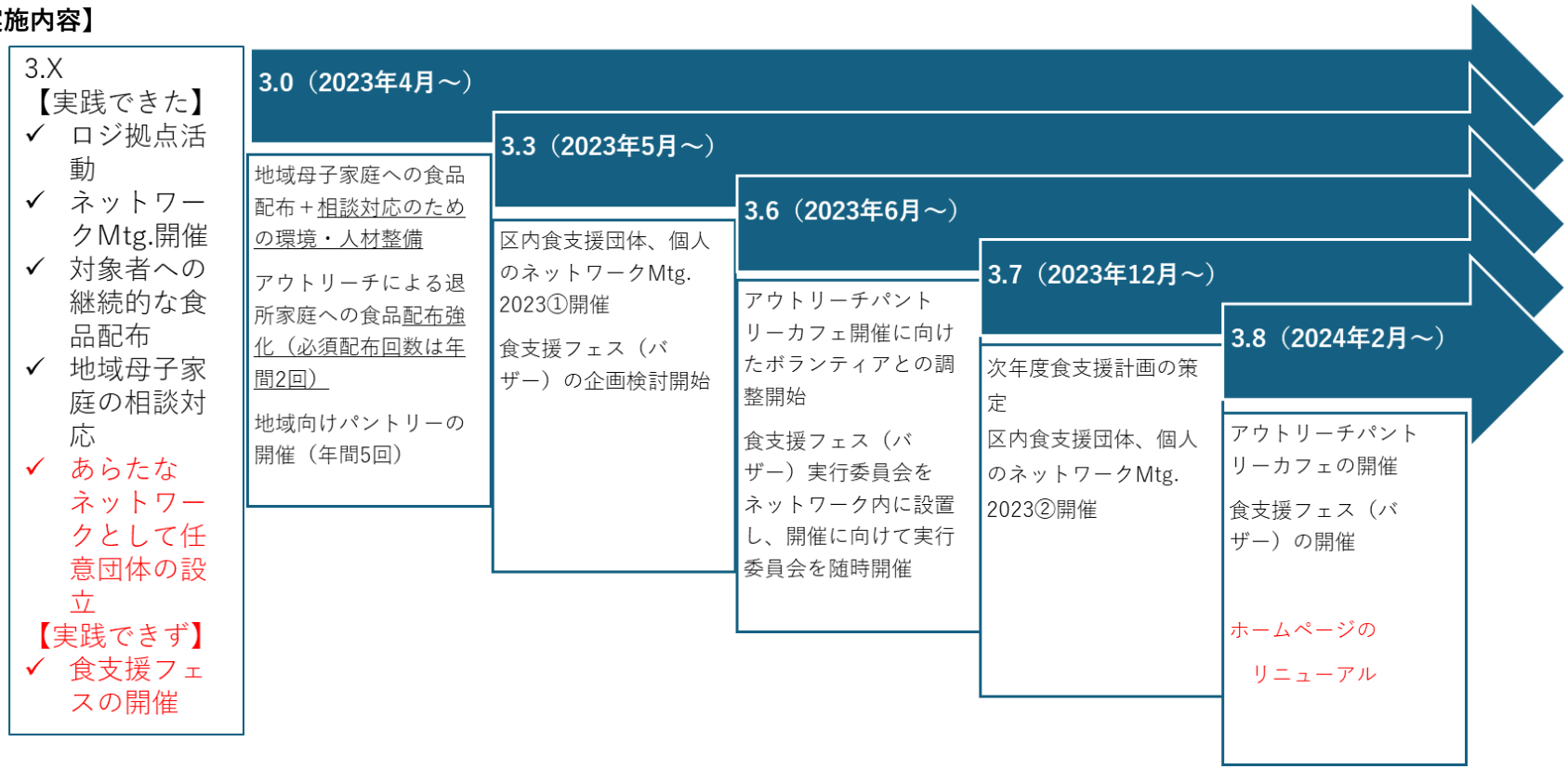
本事業の実施概要

本評価の対象となる事業の目的と実施内容は、以下のとおりである。

【事業の目的】

①DVシェルター的役割を担う母子生活支援施設は、行政の指導もあり所在をオープンにできない事情があるが、そのため地域の中でも施設の認知度が低く支援が必要な母子家庭に支援が届いていない現状がある。地域の母子家庭の中でも支援を必要としている家庭に対して、食品配布のパントリーを行い、ニーズを把握して必要な支援に結び付けるとともに、ほっとできる居場所として機能し孤立を解消することを目指す。
今回の寄付金を活用して、場所の特定はされずに施設機能を周知し、支援サービスを必要とする母子家庭に支援および情報が行き届くような広報手段を構築する（ホームページのリニューアル等）。
②また、法人の出自に鑑みて、いつ起きてもおかしくない災害時であっても地域の中で女性および母子家庭にとっての災害避難拠点としての役割を果たすことができるようなハードおよびソフト面の充実を図る。
③墨田区内の子ども食堂等ネットワークのロジ拠点として、寄贈食品や墨田区内フードドライブで集まった食品を各活動拠点や児童館に配布するネットワーク機能の強化を目指す。

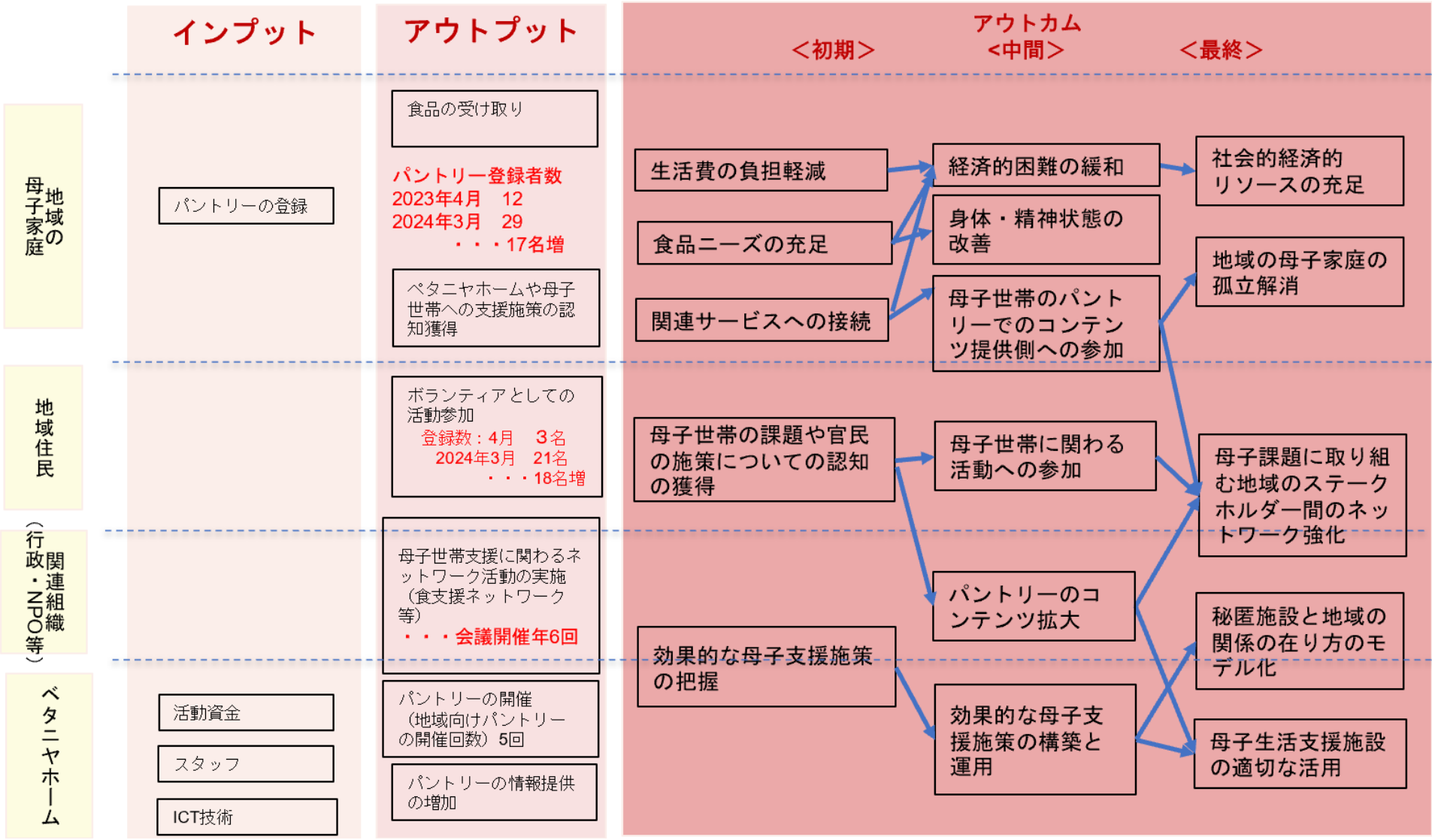
【実施内容】



想定したロジックモデル

本事業のロジックモデルとして以下を想定した。

（アウトプットの赤字は結果）



想定した評価指標とアプローチ

本事業の評価指標と想定したアプローチとして、以下を想定した。

#	アウトカム	指標（単位）	定性／定量	データ取得方法と頻度	ベンチマークの対象と方法	どのように事業運営に活用するか
1	生活費の負担軽減	地域で暮らす母子家庭のパントリー登録者数（マーケットがどの範囲なのか）	定量	毎回の参加者数カウント	4月時点での登録者数	パントリー開催数の検討素材
2	生活費の負担軽減	延べ参加世帯構成者数（何人に提供すればいいのか）	定量	毎回の参加者数カウント	2022年度の延べ人数	提供食品量および食品内容の検討素材
3	食品ニーズの充足	母子世帯の食品ニーズの充足（何が欲しいのか）	定性	アンケート 5月/7月/12月実施	5月：パントリー参加者（7月、12月のパントリーカフェでのアンケートとの比較）	寄附者への要望・食支援ネットワーク内での情報共有
4	母子世帯の課題や官民の施策についての認知の獲得	母子施設の認知向上（どうやって知ってもらえるのか）	定性	アンケート 5月/7月/12月実施	5月：パントリー参加者（7月、12月のパントリーカフェでのアンケートとの比較）	母子世帯、もしくは準母子世帯への周知方法の検討
5	母子世帯の課題や官民の施策についての認知の獲得	母子施設の利用率向上（誰が使う施設なのか）	定性	パントリー参加者の施設入所検討回数	ケースごとの状況と結果	離婚にまつわる課題で困っている母親への提供すべき情報内容と手段の検討
6	効果的な母子支援施策の把握	ボランティア参加者数（どこに相談できるところがあるか）	定量	ボランティア参加延べ人数・地域在住ボランティア参加者数	地域在住ボランティア数／ボランティア参加延べ人数	子育て家庭内で発生する問題への包括的対応が可能なセンター化構想の検討

評価の実施概要

それぞれの評価指標のデータ収集の概要は以下のとおりである。

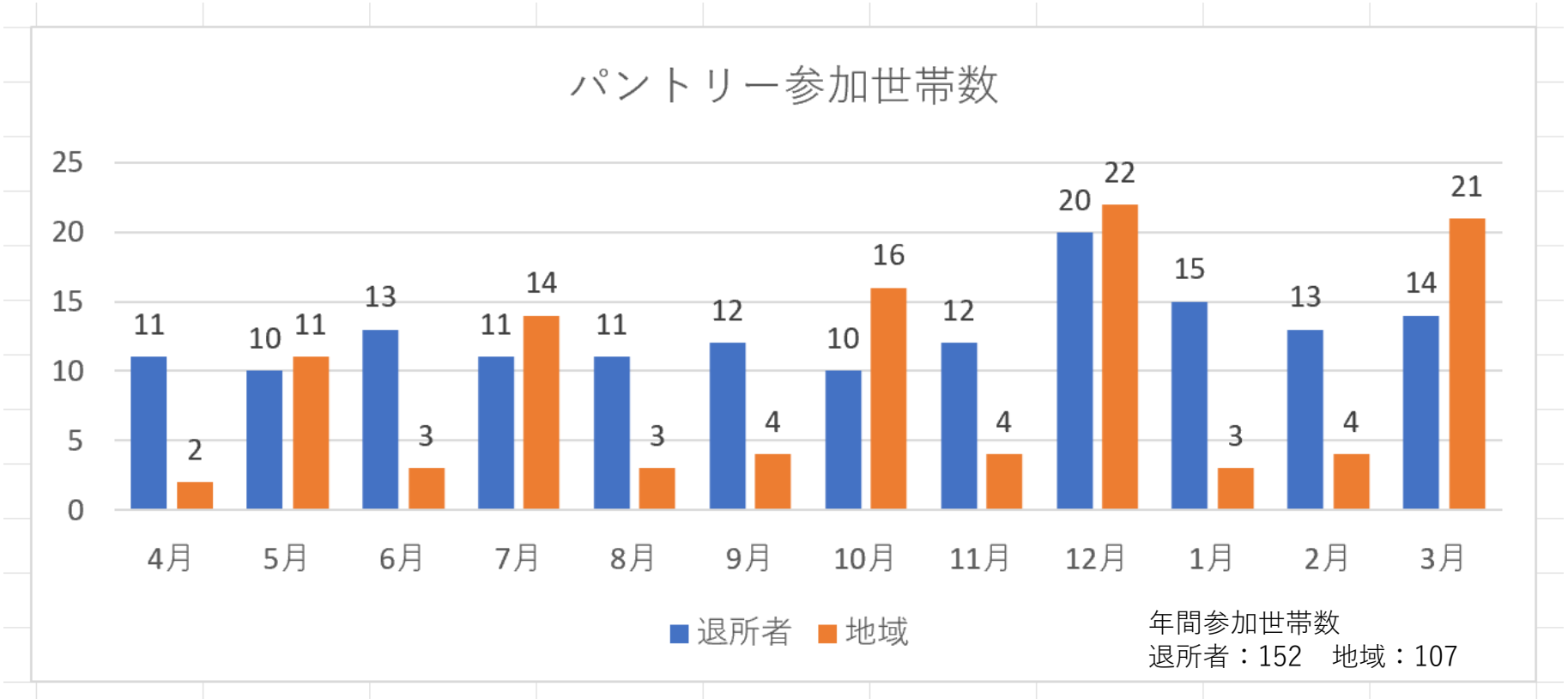
#	アウトカム	指標（単位）	データ取得方法	データ取得時期（アンケート等を実施した日時）・対象者数(人)
1	生活費の負担軽減	地域で暮らす母子家庭のパントリー登録者数(マーケットがどの範囲なのか)	・毎回のパントリー参加者数カウント ・アンケート結果	● パントリー対象者（入所/退所/地域　合計） 4月(30人)、5月(38)、6月(33)、7月(42)、8月(33)、9月(35)、10月(46)、11月(34)、12月(59)、1月(34)、2月(34)、3月(51)
2	生活費の負担軽減	延べ参加世帯構成者数(何人に提供すればいいのか)	・毎回のパントリー参加者数カウント	● 同上 ● のべパントリー参加者：469世帯、1132人
3	食品ニーズの充足	母子世帯の食品ニーズの充足(何が欲しいのか)	アンケート 5月/7月/12月実施	● アンケート対象者数 5月（38人）、7月（42人）、12月（59人）
4	母子世帯の課題や官民の施策についての認知の獲得	母子施設の認知向上(どうやって知ってもらえるのか)	アンケート 5月/7月/12月実施	● 同上
5	母子世帯の課題や官民の施策についての認知の獲得	母子施設の利用率向上(誰が使う施設なのか)	パントリー参加者の施設入所検討回数	● 2023年度通年で3世帯
6	効果的な母子支援施策の把握	ボランティア参加者数(どこに相談できるところがあるか)	ボランティア参加延べ人数・地域在住ボランティア参加者数	● 年度当初と年度末の比較

評価指標ごとの結果一覧

本事業で設定したアウトカムの変化の一覧は以下のとおりである。

#	アウトカム	指標（単位）	事業開始時の数値・状態（事前）	事業終了時の値・状態（事後）	事業による変化（事前事後の差異）	回答数（事前/事後）
1	生活費の負担軽減	地域で暮らす母子家庭のパントリー登録者数（マーケットがどの範囲なのか）	地域登録世帯数12名	地域登録世帯数29名	17世帯増	
2	生活費の負担軽減	延べ参加世帯構成者数（何人に提供すればいいのか）	2022年度のべ361人	2023年度のべ６３１人分	270人増	
3	食品ニーズの充足	母子世帯の食品ニーズの充足（何が欲しいのか）	米は、5キロを希望すればお渡ししていた		米は、2キロ、3キロ、5キロが選べるようにした	
4	母子世帯の課題や官民の施策についての認知の獲得	母子施設の認知向上（どうやって知ってもらえるのか）	食支援団体、及び食品寄付提供団体は母子生活支援施設を知らない状態であった	当施設の食支援ネットワークに加盟する15団体には周知された。また寄附提供団体も同様に母子生活支援施設の存在を認識した	・「施策についての認知」としては、パントリーでの支援情報のコンテンツの増加があった。 ・母子施設の認知としては、地域のパントリー利用者に対して「ベタニヤパントリー」にたどり着いたきっかけをアンケート内容でたずねるべきであった。	
5	母子世帯の課題や官民の施策についての認知の獲得	母子施設の利用率向上（誰が使う施設なのか）	令和5年4月1日付で18世帯が入所していた。	区内の食支援のロジスティック拠点を担ったことにより、施設のプレゼンスは高まった。年度途中には5年ぶりに定員20世帯が満員になったが、年度終了の3月には17世帯になった。	アンケートのQ12より、地域の利用者の中には、離婚にむけて動いていたり、動きたいがどう動けばよいかわからない、という回答者がいて、母子生活支援施設の支援が必要と思われる。	
6	効果的な母子支援施策の把握	ボランティア参加者数（どこに相談できるところがあるか）	・ボランティア登録数 3名	・ボランティア登録数 21名	18名増	

アウトプットとアウトカムの関係性



（入所世帯数は除く）
・退所世帯については、対象世帯が増えても、クリスマス時期以外の参加者数の大幅な伸びはなかった。

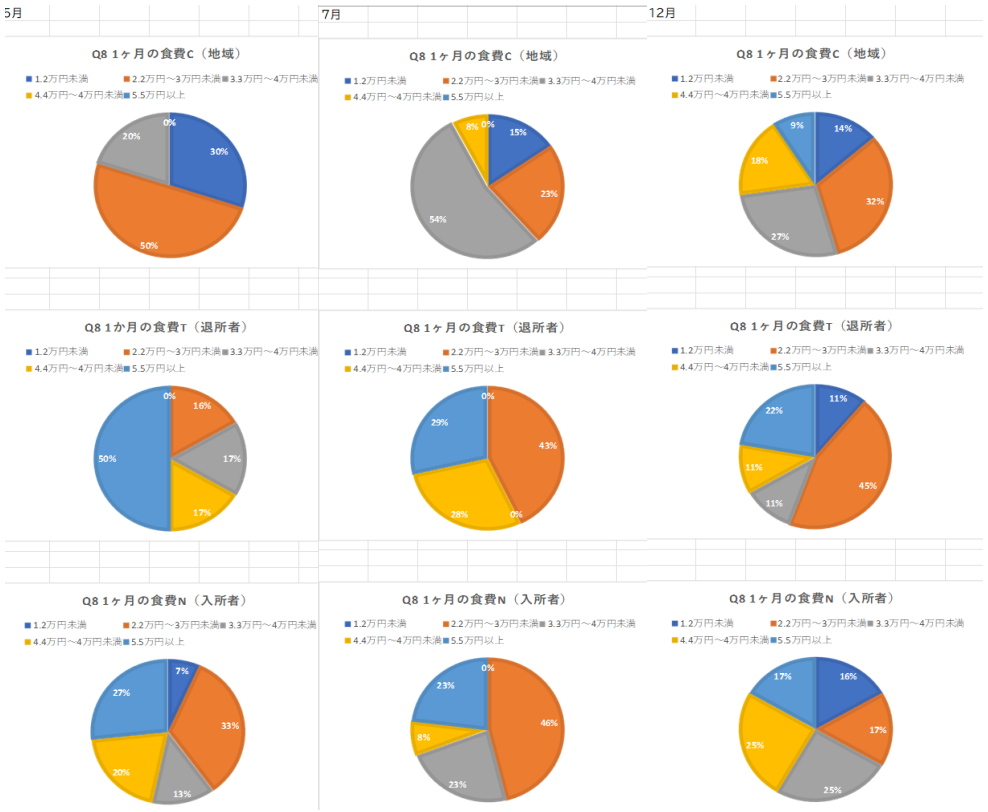
・地域世帯への呼びかけは、特に施設側として支援が必要と判断した世帯と新規世帯以外は、5月、7月、10月、12月、3月の5回であったが、登録数の増加に伴い参加者数も増加した。

・パントリー登録者数が増加し、食品を受け取りにくることで、生活費の負担軽減につながると共に、母子世帯に必要な情報を届けることができたと言える。（詳細は、次スライド以降参照）

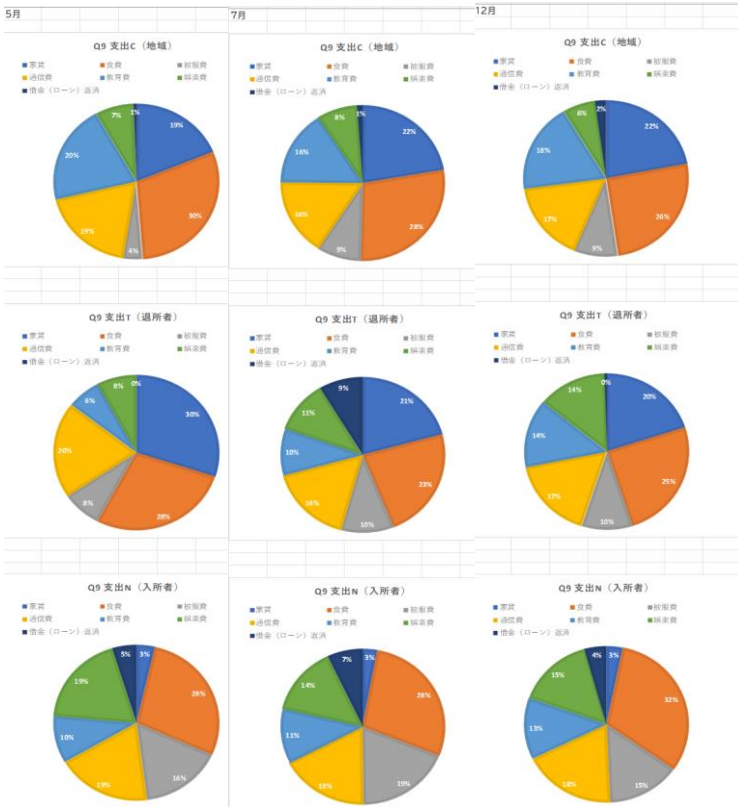
アウトカム：生活費の負担軽減

アンケート結果

1か月の食費（金額） 比較

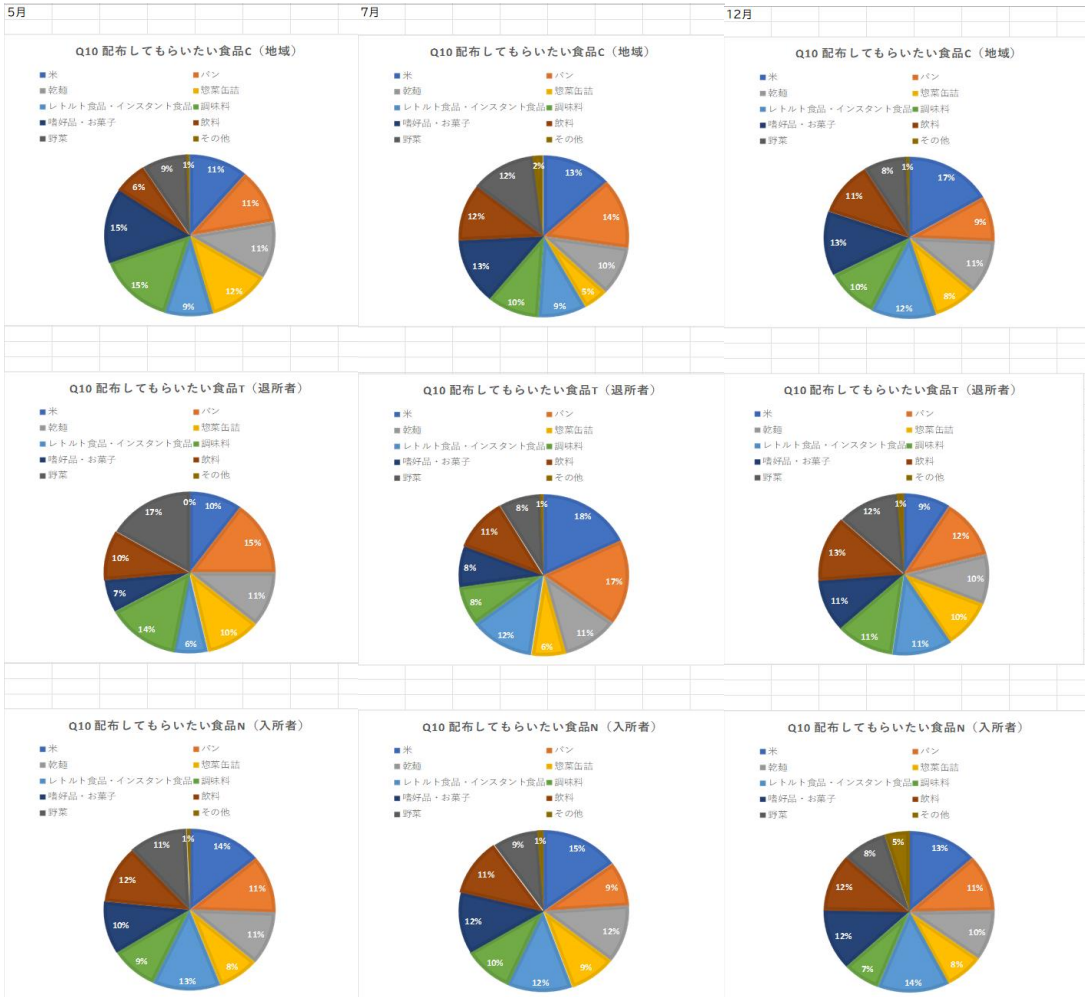


生活費のうち支出の多い割合



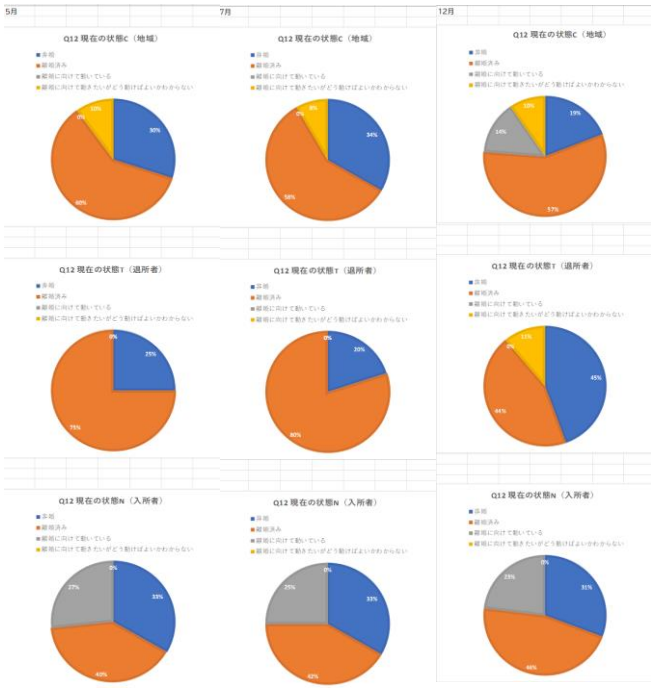
地域世帯では、確実に食費の支出額が増えており、家計を圧迫していることがうかがえる。
また、生活費の中で食費が占める割合が多いことがわかり、食費軽減としてフードパントリーが寄与していると思われる。

アウトカム：食品ニーズの充足　（アンケート結果より）



地域、退所者、入所者、いずれの世帯でも食品のニーズはまんべんなく多岐にわたっていること、嗜好品・お菓子なども一定数希望があることがわかった。これは、実際にパントリーで対応をしていても、「なかなか子どもにお菓子が買えないのでもらえて助かる」という声が聞かれることと合致し、パントリーで配る食品としては食費の中でも削られがちな嗜好品・お菓子という内容に対するニーズがあることがうかがえる。

アウトカム：母子世帯の課題：希望する支援の内容　（アンケート結果より）



・どの世帯でも、「子育てに関する相談」のニーズが高く、また「心理に関する相談」「話を聴いてもらいたい」というニーズが一定数あり、いずれの母子世帯でもなかなか悩みや課題を相談できず、ベタニヤホームのパントリーがゆっくり話を聴く場所としても必要とされていることが分かった。

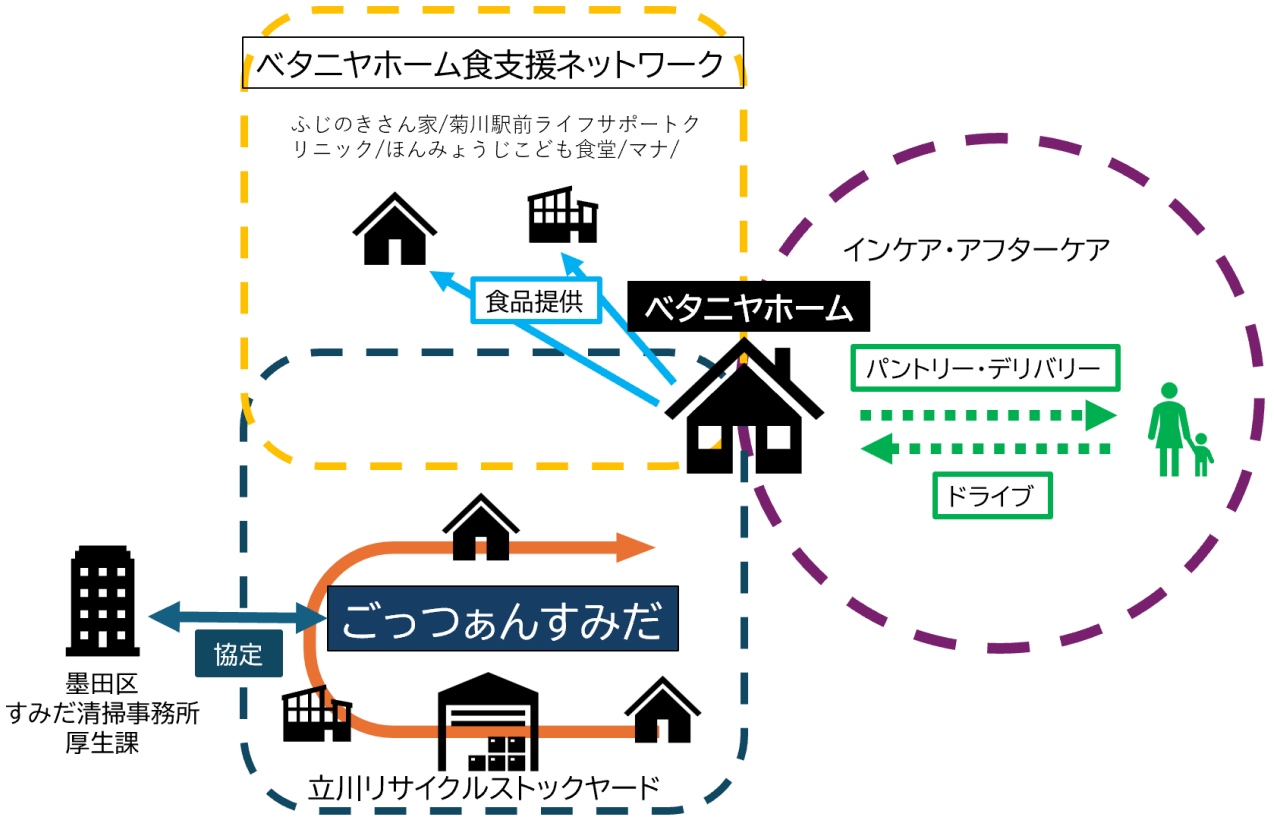
・また、特に地域の世帯では、母子に準じる世帯を受入れているが、「離婚に向けてどう動いたらよいかわからない」という現状にあることが分かり、昨年度パントリー利用者が施設入所につながった経験からも、離婚をしたいという家庭への支援が必要であることが分かった。

「ネットワーク強化」（アウトカム）の変化

本事業で確認された「ネットワーク強化」（アウトカム）の変化は以下のとおりである。

ベタニヤホームの食支援ネットワーク活動を継続する中で、墨田区との協議の結果「食支援包括ネットワークごっつぁんすみだ」という任意団体を設立することができたことは、想定外の大きな成果であった。

食支援ネットワーク相関図



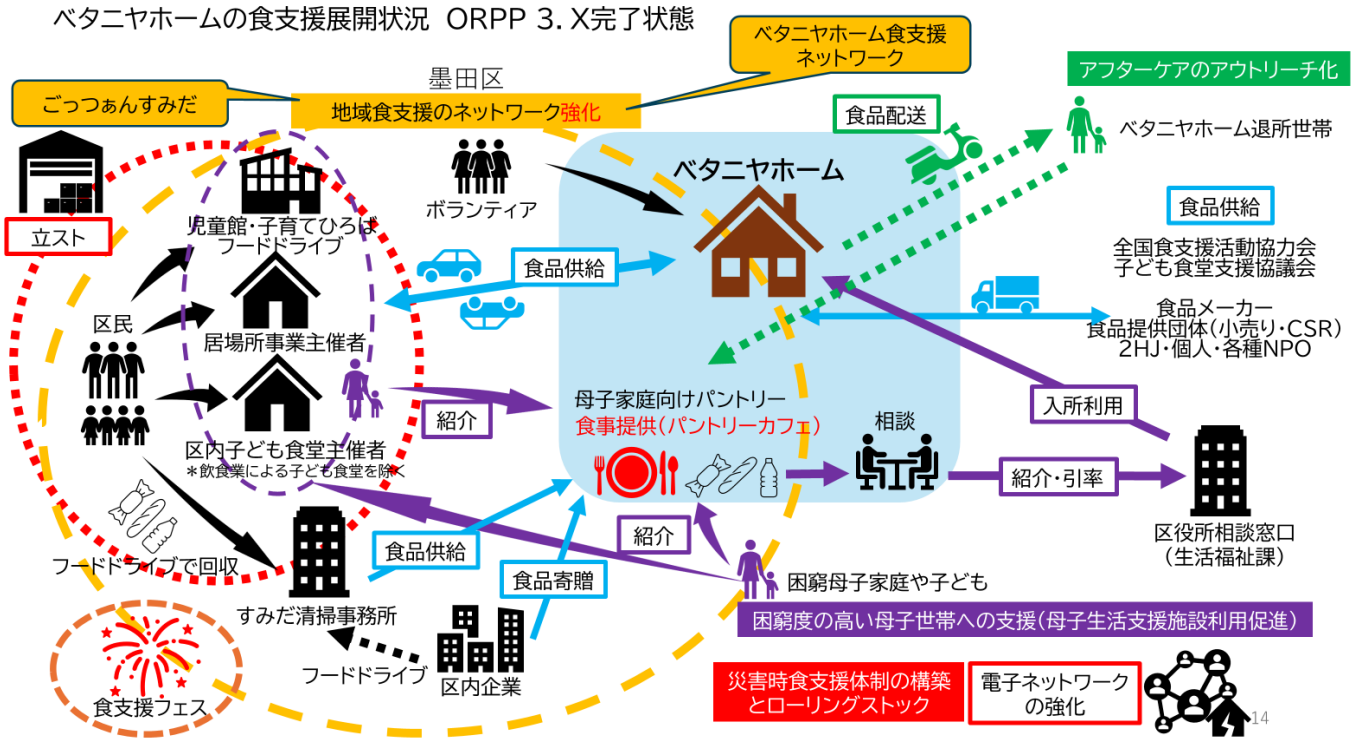
2023年度ネットワーク活動：　（当初計画、年2回の会議と食フェスの開催）
- ネットワーク会議　3回（5/11、9/15、11/2）
- ごっつぁんすみだの設立と会議　2回（11/2、1/11）
- のっとワークミーティング　1回（3/18）

本事業がもたらした成果・得られた学び

本評価を通して確認された、本事業の成果、得られた学びは以下のとおりである。

【事業成果】

- アンケートをとることにより、母子家庭の抱える課題の違いに気づくことができ、今後の支援にいかすことができるようになった。
- 「地域のステークホルダー間のネットワーク強化」については、墨田区行政とも連携し、あらたな任意団体を設立することができ、寄贈食品等の保管や配送については、充実させることができるようになった。



【得られた学び】

- 地域における食支援のネットワーク化が、生活困窮母子家庭を探し出すのに効果を発揮する
- 社会福祉協議会が担わずとも、一社会福祉施設であっても行政との食支援に関する連携と展開が可能である
- 既存の「施設」のホームページが情報の提供のみを担っており、施設の雰囲気やイメージを想起させることを念頭にして作成することが必要
- 団体、組織のネットワーク化を支えるのがインターネットのネットワークであること
- 食品配布の拠点、子ども食堂の食材配送拠点は、地域で暮らす母子家庭の「居場所」となること

SVJ所見：ベタニヤホーム

	社会課題の解決（事業アウトカム）	組織基盤強化	IMM導入による事業の高度化
設定されたゴール・代表的な指標	母子家庭の孤立解消 • 生活費の負担軽減 • 母子施設の利用率向上 • 地域のステークホルダーのネットワーク強化	設定なし	アウトカム観点による事業成果の可視化 • モニタリングの実施 • アウトカムの測定
事業成果	• パントリー利用者59%増加 • 母子家庭の支援ニーズとして離婚相談の把握 • 母子施設の利用率100% • 墨田区と協働する、新たな食支援ネットワークの構築	• 事業で必要となる能力やスキルの設定 • 職員のコミュニケーション能力の強化	• 評価を通して、これまで明確ではなかった母子家庭のニーズ（「居場所」の提供、離婚相談）を把握し、パントリー利用条件の見直しや離婚相談の拡充等、事業改善を検討
課題と期待される対応	• 対象事業が母子にとって安心できる場所としても機能していたことから、アンケート内容をブラッシュアップし、中間アウトカムの確認まで行うことが期待される	• 必要となる能力やスキルを明確化し、獲得に向けた取り組みを事業プロセスに組み込む等、機会の活用に長けている • 今後も様々な機会や他組織との連携を活用した基盤強化が期待できる	• 組織全体や現場でのIMMは途上だが、評価結果から受益者のニーズを把握し事業改善を検討する等、IMMに関する学習意欲が高いため、研修の参加や評価継続による組織全体での定着が期待される

Ⅲ. ライジング基金全体の評価結果

Ⅲ-1. ライジング基金全体の評価概要

本事業における評価概要は以下のとおりである。

評価方法

- 各支援団体からの評価報告の総括
- 各支援団体へのヒアリング

評価項目

1. 支援団体による社会課題解決の促進
2. 支援団体の組織基盤の強化
3. 支援団体における社会的インパクト・マネジメント（IMM）導入による事業の高度化

なお、申請内容とヒアリングに基づき、各支援団体における評価項目は以下のように設定した。

支援団体名	社会課題解決の促進	組織基盤の強化	IMM導入による事業の高度化
アクセプト・インターナショナル	○	―	○
エデュケーションエーキューブ	○	○	○
SALASUSU	○	―	○
チャイボラ	○	―	○
ベタニヤホーム	○	―	○

Ⅲ-2-1. SVJ所見：アクセプト・インターナショナル（再掲）

	社会課題の解決 （事業アウトカム）	組織基盤強化	IMM導入による 事業の高度化
設定された ゴール・ 代表的な指標	犯罪に巻き込まれる恐れのある子どもたちが必要な支援を受け、安心して生活できる • 支援者との関係性の構築・維持 • 継続的な支援の受け入れ	設定なし	アウトカム観点による事業成果の可視化 • モニタリングの実施 • アウトカムの測定
事業成果	• 安心できる居住環境の提供 • 支援者との関係性の構築・継続 • 1か月以上の支援継続 • 必要な支援との連結（新たに12の矯正施設・支援機関からの支援依頼等）	ー	• 支援人数だけではなく、支援対象者の望ましい変化に着目し、評価を実施 • 多様な支援者との接点を提供することでコミュニケーションが円滑になる等、成果につながる学びや知見の明確化
課題と 期待される対応	• 支援が有効と想定されるが、現状リーチが難しい対象者もいたことから、団体単独ではなく、複数の関係組織による支援構築が期待される	ー	• 最少人数での事業運営であることから、組織全体でのIMM導入は難しかった • IMMに関する学習意欲が高いため、組織全体での研修や評価の継続によるIMM浸透が期待される

Ⅲ-2-2. SVJ所見：エデュケーションエーキューブ（再掲）

	社会課題の解決 （事業アウトカム）	組織基盤強化	IMM導入による 事業の高度化
設定された ゴール・ 代表的な指標	子ども達が希望する進路選択が可能となる • 自身の好きや関心への気づき（学習・探求・クリエイティブ活動の向上） • 学校以外の学習環境の増加	事業の持続可能性を高めるためのバックオフィス強化 • 寄付件数 • 業務の効率化（属人性の改善）	アウトカム観点による事業成果の可視化 • モニタリングの実施 • アウトカムの測定
事業成果	• 子どもの探究活動の向上 • 子どもにとって安心できる場所・学べる場所としてのスタディプレイスの認知度向上	• システム導入やマニュアル整備による属人性の改善 • FRスタッフの勤務時間が200時間以上削減 • 働きやすい環境整備によるスタッフのロイヤリティ向上 • 寄付金処理数の34%増加	• 寄付金を活用するバックオフィス事業に加え、スタディプレイス事業に関してのロジックモデルと評価指標を設定し、評価を実施 • 評価結果に基づき、団体のミッション・ビジョン実現に寄与する事業ロジックに改善
課題と 期待される対応	• 事業期間中に初期アウトカムが実現されていることから、事業継続及び追跡調査による中間アウトカムの確認が期待される	• 業務効率の改善により職場環境やスタッフの働きがいが向上した • バックオフィスにおける課題や不安がないか、組織診断等を活用し、今後も定期的な振り返りを実施してほしい	• 事業期間中に自発的なIMMによるPDCAサイクルが実現していることから、現場での定着により、さらなる事業と組織の高度化が期待できる

Ⅲ-2-3.　SVJ所見：SALASUSU（再掲）

	社会課題の解決 （事業アウトカム）	組織基盤強化	IMM導入による 事業の高度化
設定された ゴール・ 代表的な指標	貧困層の学びの改善 • 教師の学びを見る目の改善 • 授業の修正 • 同僚性の改善	設定なし	アウトカム観点による事業成果の可視化 • モニタリングの実施 • アウトカムの測定
事業成果	• 50%以上の教師が学びを見る目の改善を認識 • 83%の教師が授業を望ましい方向へ改善	ー	• 学力向上への直接的な働きかけではない対象事業のアウトカムが可視化され、カンボジアにおける教育改善に向けたアドボカシーへの活用を検討 • リーダーメンバーにおけるアウトカム観点の浸透
課題と 期待される対応	• 同僚性の改善は、測定手法の工夫による確認が想定される • 事業継続及び追跡調査による中間アウトカムの確認により、さらなる社会構造への働きかけが期待される	ー	• 組織全体でのIMM浸透は途上だが、アウトカム観点でのモニタリングを継続し、成果を共有することで、事業の高度化やアドボカシーへの活用が期待される

Ⅲ-2-4. SVJ所見：チャイボラ（再掲）

	社会課題の解決 （事業アウトカム）	組織基盤強化	IMM導入による 事業の高度化
設定された ゴール・ 代表的な指標	子どもとかかわる新任職員の意識・スキルや心理状況の改善 • モチベーションの向上 • 離職率の低下	設定なし	アウトカム観点による事業成果の可視化 • モニタリングの実施 • アウトカムの測定 • 対照群の設定
事業成果	• 学びやスキルの獲得 • モチベーションの向上 • ストレスへの対処向上 • 離職率・内定辞退率の低下 • 施設側の負担軽減（新任職員が即戦力として活躍）	ー	• 中間評価の結果を踏まえて、グループワークのメンバーを固定する等の事業手法を改善した結果、参加者に連帯感が生まれ、参加者のさらなるモチベーション向上を達成した
課題と 期待される対応	• 参加施設への追跡調査による子どもの養育の質向上への効果の確認が望ましい • 事業成果の周知や手法・知見の共有による、参加者や参加施設といった受益者の拡大が期待される	ー	• 事業期間中に自発的なIMMによるPDCAサイクルが実現していることから、現場での定着により、さらなる事業の高度化が期待できる

Ⅲ-2-5. SVJ所見：ベタニヤホーム（再掲）

	社会課題の解決 （事業アウトカム）	組織基盤強化	IMM導入による 事業の高度化
設定された ゴール・ 代表的な指標	母子家庭の孤立解消 • 生活費の負担軽減 • 母子施設の利用率向上 • 地域のステークホルダーのネットワーク強化	設定なし	アウトカム観点による事業成果の可視化 • モニタリングの実施 • アウトカムの測定
事業成果	• パントリー利用者59%増加 • 母子家庭の支援ニーズとして離婚相談の把握 • 母子施設の期中利用率100% • 墨田区と協働する、新たな食支援ネットワークの構築	• 事業で必要となる能力やスキルの設定 • 職員のコミュニケーション能力の強化	• 評価を通して、これまで明確ではなかった母子家庭のニーズ（「居場所」の提供、離婚相談）を把握し、パントリー利用条件の見直しや離婚相談の拡充等、事業改善を検討
課題と 期待される対応	• 対象事業が母子にとって安心できる場所としても機能していたことから、アンケート内容をブラッシュアップし、中間アウトカムの確認まで行うことが期待される	• 必要となる能力やスキルを明確化し、獲得に向けた取り組みを事業プロセスに組み込む等、機会の活用に長けている • 今後も様々な機会や他組織との連携を活用した基盤強化が期待できる	• 組織全体や現場でのIMMは途上だが、評価結果から受益者のニーズを把握し事業改善を検討する等、IMMに関する学習意欲が高いため、研修の参加や評価継続による組織全体での定着が期待される

Ⅲ-3-1. 支援団体へのヒアリング結果（抜粋）

本事業へのヒアリングを支援団体に実施した。その主な回答内容は以下のとおりである。

1. ライジング基金のサポート体制への高い評価

- 事業期間中に、**SMBCグループの社員がネットワーキングの場を用意**してくれて、今後のご縁につながった。そうしたことを、厭わずにやってくれるのは珍しいし、**親身になって動いてくれた**と感じて、有難かった。
- **SMBCグループの社員に現場を見学**してもらえたのが、とても良かった。**自分たちが取り組む社会課題に関心を持ってもらえている**と感じた。
- SMBCグループ・プロボノプロジェクトとの連携で、**プロボノ支援**も活用できるのは良い仕組みだと思った。両立することで**資金的にも人的にも支援が受けられる。**
- 事業期間中に事業に関して相談ができたことで、申請書にはなかった取り組みも実施可能となり、次年度の事業構築のきっかけになった。
- 新規事業は走らないと分からないことも多く、変更をご相談させていただく中で、**変更に対してかなり柔軟に対応**していただけたのが有難かった。相談しても良いと思えることで**安心感もあるし、事業期間中により良い事業に改善**できる。

2. ライジング基金の支援対象の設定・選定への評価

- 日本の助成金は**国内事業や分かりやすい成果指標が求められることが多い**ので、国外事業や、学力向上等を焦点としないマニアックな事業への支援は有難いし、必要とされることだと思う。

Ⅲ-3-2. 支援団体へのヒアリング結果（抜粋）

本事業へのヒアリングを支援団体に実施した。その主な回答内容は以下のとおりである。

3. 社会的インパクト・マネジメント導入による学びへの高い評価

- 苦労したが、ロジックモデルと評価指標があったから、**何を成果として拾い上げて今後の支援に生かしていくか、意識して事業を進める**ことが出来た。結果として大変良かった。
- 政策化を考えていくうえで、**政府への説得に活用できるデータ**を得られた。今回トライしていなければ、来年再来年取り組むことになっていただろうし、評価は今やるべきことだったと考えている。
- 現場担当者は現場メインで、事業をやるのに必死で、アウトカムを見ながら事業を進めるには、まだ時間がかかるが、学びを見る目の改善など、自分たちにも定着してきた気はする。**アウトカムの視点は外の方に事業の効果をどう伝えるかにも活用できるし、自分自身で認識する、振り返る**ことにもなって良いと思った。
- **これまで実施回数や人数などの数を見て成果としてきた**が、数を追うのが難しい事業では、数だけでアピールできない。今回、子どもの変化を質的にみてくことが出来て、その重要性に気付けたので良かった。また、彼らが変化できない、元の状態に戻ってしまうことも課題の一つとしてあるんだということを評価の中で示せて、**社会に理解していただく機会**にもなったと思う。

4. 社会的インパクト評価導入へのサポート内容への提言

- 組織内で評価リテラシー向上に時間がかかるので、**複数年度での事業実施とするかサポートをより手厚く**してほしいと感じた。
- どのレベルの評価が求められるのかが申請時はわからず不安だったので、臨機応変に対応してもらえることやサポート内容などが**申請時に詳しく記載**されていると良い。
- 今後も継続していくためには評価するということをもっと勉強するべきだと考えた。**フォローアップで勉強会の機会**があれば、ぜひ出てみたい。

Ⅲ-4. 支援団体の評価結果に基づくライジング基金全体の評価総括

本事業の取り組みによる評価結果は以下のとおりである。

支援団体名	社会課題解決の促進		組織基盤強化		IMM導入による事業の高度化	
アクセプトインターナショナル	○	初期アウトカムの実現が確認できた	ー	ー	○	アウトカム観点によるモニタリングの実施・事業成果の可視化
エデュケーションエーキューブ	○	初期アウトカムの実現が確認できた	◎	業務効率が改善され、職員負荷の軽減やロイヤリティ向上・寄付数の増加等の、組織基盤強化につながった	◎	IMM導入による事業の高度化につながっている
SALASUSU	○	一部を除き、初期アウトカムの実現が確認できた	ー	ー	○	アウトカム観点によるモニタリングの実施・事業成果の可視化
チャイボラ	○	一部を除き、初期アウトカムの実現が確認できた	ー	ー	◎	IMM導入による事業の高度化につながっている
ベタニヤホーム	○	初期アウトカムの実現が確認できた	○	対象事業の波及効果として人材育成への効果が見られた	○	アウトカム観点によるモニタリングの実施・事業成果の可視化
総合評価	事業成果が確認できた		想定した以上の事業成果が確認できた		事業成果が確認できた	

Ⅲ-5. 社会的インパクト評価導入によるライジング基金のインパクトの向上

	社会的インパクト向上への役割	代表的な事例
アウトカム観点での事業モニタリングの実現	• これまではアウトプット観点での事業成果が管理されていた • IMM導入によりアウトカム観点での成果管理とレポーティングが可能となった	• 支援人数や相談件数だけではなく、支援対象者の望ましい変化に着目し評価指標を設定、モニタリングを実施した（アクセプト・インターナショナル他、全団体） • 参加者の募集に際して、参加者を送り出す施設に対して、アウトカム観点での事業成果を伝えることで、新任職員と施設両者への効果や想定される望ましい変化を明確化出来た（チャイボラ） • アドボカシーへの活用に向け、アウトカム観点での事業成果の可視化を行った（SALASUSU）
事業改善へのPDCAサイクルの確立	• 事業改善にIMMが有効であると認識された • 事業改善や組織基盤の強化に向けて、社会的インパクト評価を自発的に活用する好循環が生まれた団体があった	• 評価結果を組織内で共有することで、ロジックモデルや評価指標の見直しが必要であると認識し、自発的なブラッシュアップに取り組み、事業の高度化と組織基盤の強化を目指している（エデュケーションエーキューブ） • 評価を通じて母子の相談内容に関するニーズ把握を行い、支援内容の検討に活用している（ベタニヤホーム）
事業実施手法の改善	• 事業継続や改善の判断はアウトプット観点や現場感で検討されていた • 評価結果を活用し、事業手法やプロセスを振り返り、エビデンスに基づいた事業継続決定や改善を行った	• 中間評価の結果を踏まえて、グループワークのメンバーを固定する等、事業期間中に事業手法の改善に取り組んだ。それにより、参加者のモチベーション向上といった事業成果の最大化につながった（チャイボラ）

Ⅲ-6-1. 評価結果から得られた成果と学び

本事業の取り組みによる事業成果と学びは以下のとおりである。

1. 事業成果：支援団体による社会課題解決の促進

- すべての支援団体の活動において、当初想定した**初期アウトカムの実現**を確認できたことから、**ライジング基金による「社会課題の解決の促進」は一定程度達成できている**といえる。なお、事業期間内に確認できなかったアウトカムもあることから、**事業の継続や改善を通してモニタリングしていくことが望ましい。**
- ライジング基金の特徴として、寄付先の選定や事業実施期間中の見学会等、寄付を行っている**SMBCグループの社員が参画可能なプロセス**が設定されており、各団体が取り組む社会課題や事業内容を知る貴重な機会となっている。**社員の社会貢献マインドの育成につながるとともに、社会課題解決に取り組む団体のモチベーション向上につながる**と推察される。

2. 事業成果：支援団体の組織基盤の強化

- ライジング基金による組織基盤の強化を直接的に目指した支援団体は1団体のみであったが、目標設定した支援団体だけでなく、目標設定していなかった1団体においても、**ライジング基金での取り組みによる組織基盤の強化**が認識されていた。
- ライジング基金を活用したことで、組織基盤の強化の側面で以下の効果が確認できた。
  - ① 団体内の人件費やツール導入費として利用できたことから、業務効率が改善され、スタッフの負荷軽減とロイヤリティ向上につながった。
  - ② 新規事業の立ち上げにより、既存事業とは異なる対象者との関係性が生まれ、スタッフのコミュニケーション能力の向上など、人材育成につながった。
- 事業費だけではなく、団体内の人件費を含めた一般管理費にも寄付金を利用できるライジング基金の仕組みが、**業務効率の改善や新規事業創出による人材確保や定着、育成に寄与**していると考えられる。

Ⅲ-6-2. 評価結果から得られた成果と学び

本事業の取り組みによる事業成果と学びは以下のとおりである。

3. 事業成果：支援団体における社会的インパクト・マネジメント導入による事業の高度化

- 2022年度の寄付先募集では、インパクト志向での事業遂行を推奨しており、各支援団体が対象事業への社会的インパクト評価を実施した。5団体中、4団体が初めて社会的インパクト評価に取り組む状況ではあったが、**全ての支援団体がアウトカム観点によるモニタリングと事業成果の可視化を達成**した。
- さらに、全ての団体が評価結果を用いた事業改善を検討しており、2団体は、**自発的にロジックモデルや評価指標のブラッシュアップ、事業手法やプロセスの振り返りによる事業改善を実施**していた。**ライジング基金を通じて、組織内に社会的インパクト・マネジメントの視点が定着し、事業の高度化につながった**と言える。

4. 学び：支援団体における社会的インパクト・マネジメント導入への課題

- 社会的インパクト評価をライジング基金のプロセスに導入するにあたり、2022年度寄付先募集ではソーシャルバリュージャパンによる社会的インパクト評価伴走支援を行った。社会的インパクト評価を組織内の人材のみで実行するには課題が多く、今後の継続には、特に**評価計画（ロジックモデルの整理・評価指標の設定、調査票等の作成など）の段階での適切な支援**が必要である。
- 支援団体の評価に対する習熟度や事業内容などに応じて、**評価のレベルや評価手法を臨機応変に設定**することが望ましい。

Ⅲ-7. 提言

本評価の結果から、ライジング基金に関する以下の提言を行う。

1. ライジング基金のプロセスに社会的インパクト評価や社会的インパクト・マネジメント導入支援を取り入れ、支援団体の事業の高度化を目指す

- 2022年度の寄付先募集では、各支援団体が対象事業への社会的インパクト評価を実施し、全ての支援団体がアウトカム観点によるモニタリングと事業成果の可視化を達成した。ライジング基金のプロセスに、**社会的インパクト評価や社会的インパクト・マネジメント導入支援を取り入れることで、各支援団体の事業の高度化が期待**できる。
- なお、社会的インパクト評価を組織内の人材のみで実行するには課題が多く、導入に際しては、特に**評価計画（ロジックモデルの整理・評価指標の設定、調査票等の作成など）の段階で研修やツール提供といった適切な支援を行う**ことが望ましい。

2. ライジング基金全体における共通の評価指標を設定し、継続的な成果の可視化に取り組む

- ライジング基金は「次世代」における社会課題の解決を主なテーマとし、寄付先となる対象事業を選定・支援しているが、**ライジング基金全体の事業ロジックや評価指標は確立していない**ことから、本評価では、ライジング基金全体の評価指標として、①社会課題解決の促進、②組織基盤の強化、③社会的インパクト・マネジメント導入による事業の高度化、の3軸を設定した。
- ライジング基金は継続的に実施されており、**共通の評価指標を設定し、ライジング基金全体の事業成果の継続的に可視化し、アカウンタビリティの確保や事業改善**につなげていくことが望ましい。

3. SMBCグループ職員の参加や柔軟性のあるサポート維持による事業成果の最大化に寄与する

- 支援団体から、SMBCグループ職員の**現場見学やネットワーキング、事業改善に向けた変更への柔軟な対応が高く評価**されていることから、事業の高度化に向けた視点とサポートの維持が期待される。